



ほんとうに欲しいものめってなんだろう

1992-8 59

KUNIZUKURI TO KENSHU

国づくりの研修

【人物ネットワーク⑩】
 山田昭夫／【カンボジア・ベトナム、そして日本。これからの社会資本整備】三谷浩／【豊かさのあとにくるもの】住宅・社会資本整備】村上美奈子／【森林の育成と環境の創造】伊藤善善市／【新たな国土軸と経済文化圏の形成】小見志郎／【健全な田园地域の保全と創造】進士五十八／【これからどうなる余暇スタイル】田所正／【二一世紀のランド・デザイナー、建設産業】山崎裕司／【ケスク・チュ・ヴ？】フロランス・メルメ・小川／【「ゆたかさ」の新しい地平へ】木下修／【未来へつなげたい】ファッションと感性】コシノ・ジュンコ／【建設業の未来を誇れる土木技術者像】田村喜子

国づくりの研修

第59号 1992.8



時代の風を読む⑩—————32

都市実験の時代

～都市のありかたが真剣に問われ始めている～ 檜楨貢

KEYWORD—————58

新たな生活空間の創造

地方の魅力と東京圏の魅力/自然とのふれあい

選択の幅の広さI/選択の幅の広さII

OPEN SPACE—————68

いまという時代 木村尚三郎

声—————62

建築(設計)研修に参加して

BOOK GUIDE—————70

「東京キーワード図鑑」「地球環境報告」

VIEW—————64

'90年代「知的生産」「知的生活」の方法V 昇秀樹

人物ネットワーク⑩

インタビュー 山田昭夫—————4

カンボジア・ベトナム、そして日本

これからの社会資本整備

三谷浩建設省事務次官に聞く—————8

特集 **ほんとうに欲しいものってなんだろう**

豊かさのあとにくるもの～住宅・社会資本整備

村上美奈子(計画工房 主宰)—————14

森林の育成と環境の創造

伊藤善市(東京女子大学教授)—————16

新たな国土軸と経済文化圏の形成

小見志郎(野村総合研究所地域計画研究部長)—————18

健全な田園地域の保全と創造

～ハウステンボス見学から

進士五十八(東京農業大学教授)—————20

これからどうなる余暇スタイル

田所正(建設省建設政策研究センター主任研究官)—————22

21世紀のグランド・デザイナー、建設産業

山崎裕司(システムズ代表取締役)—————24

ケスク・チュ・ヴ?

フロランス・メルメ・小川(明治大学専任講師)—————26

「ゆたかさ」の新しい地平へ

木下修(流通産業研究所主任研究員)—————28

未来へつなげたい

～ファッションと感性～コシノ・ジュンコ 35

建設業の未来

～誇れる土木技術者像～ 田村喜子 48

フェニックス・フォーラム—————38

表紙 スワップミートの壺屋

アメリカ

裏表紙 夜のパリ フランス

edit design

H. Ogt/H. Yam



コシノ・ジュンコ氏デザインによる山崎建設の
ユニフォーム（本文35ページ参照）

リレー⑩ 人と人の間に、時代が見える

人物ネットワーク



山田昭夫

やまだ・あきお

㈱長谷工コーポレーション。
常務取締役。
総合研究所所長。

長野県出身。

東京大学建築学科卒。同大学院終了。
昭和三年、日本住宅公団に入る。
三八年、北海道大学工学部助教授。そ
して再び住宅・都市整備公団時代、ハ
ードとソフトをきめた研究を行うため
に開設された住宅・都市試験研究所の
初代所長をつとめ、六三年長谷工コー
ポレーションに。

前回登場の今井通子氏からのコメン
トは、「都市リゾート開発等、人間を
忘れた企業論理側のみには立たない人。
建物のハードよりも中身の人間のソフ
トについて、一企業としてではなく国
民的益を考える人です」。

平成一年四月に総合研究所が設立さ
れ、従来のハード系の技術研究所とは
別に、ソフト系の専門的知識による調
査・研究や情報分析を行う企業内シン
クタンクとして出発。一番の趣味は「知
的な好奇心の充足」とおっしゃる山田
所長の旺盛な知的「好奇心」が、都市
環境創造のソフト集団を率いる。

研究所の役割

ハード系の技術研究所とは別に、ソフト系の専門的組織としてスタートした総合研究所。データ蓄積をベースに、独自の研究活動を展開し、社会的にも提供したいとおっしゃる。

「活動内容としては、都市生活・街づくり・住まい・経営環境等に関する研究というのですが、情報化の時代ですから、いろいろな情報を集めて、いろんなところへ提供する。自ら研究した結果も大いに対外的に提供して、かつ広く世間にも提供しようという意図もあって、シンポジウムや講演会を行ったり、出版活動も積極的にやっているところですよ。」

「うちはかなり本格的にいいものをつくっていると思うんです。いいものというのは、高いものとか、デラックスという意味ではありませんで、各階層向けに質的にいいものをと。そのためには、いいものをつくっても、市民がいいものを買うという水準になってもらいたい。そのため、遠回しではありますが、一般市民の啓蒙というのを含めまして、対外的な情報提供をやっていることなんです。」

「当社は、昔はビルやマンションを売ったりなんてこともありましたが、だんだん物と合わせ

てサービスを売るということが社会的にも必要になってきましたし、わが社の企業路線としても物に高い付加価値をつけて買ってもらおうようになってきました。そうすると結局、サービスの内容をどんなふうにかえたらいいかというソフトの問題になってきた。そこで、そういうことを長期的な広い視野で勉強する組織が必要だということが、このソフト研究所のできた経緯なんです。」

あらたな風を

研究所の機関誌名『ANEMOS』とは、ギリシヤ語で「風」という意味。都市生活、都市環境に新しい、さわやかな風を送りたいということからの命名とか。研究所の人材にも新たな風が吹き込まれた。

「元々長谷工にいた人も何人かきていますが、主として外部から新規に採らせていただきました。最初からの方針なんです。研究所全体の半分が女性です。それから私自身が建築の出身なものですから、建築以外のいろんな分野の人を集めています。つまり、私にわからないことを教えてくれる人を集めようとしたわけです。」

「異業種交流ではありませんが、建築以外の経済学とか社会学、家政学とか法律学などいろんな

分野の人たちの考え方なり、知見なりを活用して、研究所自体の成果を上げようということなんです。やっぱり、おもしろいですよ。」

山田所長「自身、住宅・都市整備団で仕事なさったり、大学で教鞭をとられたり、研究所では「春一番」といつた趣で、風の陣を布く。」

「民間にきたことのギャップですか？ やっぱ、公的セクターの当然の制的として、誰が悪いということではないんですが、国の政策目的に合わせて事業をやっていくところですから、おのずからそういう枠の中でしか発想、研究できない面もありましたね。」

いま、わが社は『都市環境創造』産業と称していますが、都市というのはソフトとハードと両方ありますし、都市といってもひじょうに広がりを持っています。また環境という言葉は、自然環境やら人工環境など、いろいろありますでしょう。ですから大概のことが都市環境創造というところ、可能性としては含まれる。するとその中で、これが将来の目になりそうだとか、重要なポイントになりそうな話だということ、どの話をとっても都市環境創造産業に寄与することになる。だから、どういうジャンルで、鍵で勉強しなくちゃいけないとか、そういうことがありませんでしょう。そういう意味で、研究という立場からいうと、いまひじょうに自由度



夢科ブライトン倶楽部

がありますね。そこがまた、おもしろい」

日本文化の独自性

『日本は、日本独自の文化というものを持つているのだろうか』。さまざまの研究テーマをかかえた中で、特に抱えている疑問であるとおっしゃる。

「一番近いところで対すると、江戸時代になります。つまり江戸三〇〇年の間に、いろいろ政治的・経済的問題もあったでしょうが、その間にきちんとした日本の文化というものをつけたわけですね。それが明治維新後、文明開化して、戦後はアメリカの文化が入ってきて、ひじょうにいいこともあったわけですね。民主的になったとかそういうこともあったのですが、だけでもその一方でいま、日本が本来持っていた固有のものを、どこかに置き忘れていたのではなからうかと。確かに生活は便利になったとしても。しかし、アパートの中の空間を考えても設備は大変便利になったかもしれないけど、空間そのものとして面白くない。そこへいくと江戸時代、いまはもう料亭だとか特殊なところしか見られないような、すぐれた空間のつくり方がいろいろあった。これまで、木造を不燃化にしたり、キッチン材規模を大きくしたりと、それはそれで歴史的な意味があるので、

機能的に便利になった生活空間がある一方で、豊かな空間とは何かということを本格的に考えるべきじゃないかと思うんです。

いま国際化社会で、PKOだとか経済問題とかいろいろありますが、やっぱり一番基本は、日本が日本独自の、現代における日本文化を持つて、その文化のよさを海外の人たちが日本から学ぶ。そういうことで文化的貢献をする。それだけの力なり実態を持つことが大事だと思います。

早い話が、いまあちこちに住宅展示場がありますけど、あそこへ行ってみますと、純日本風でもないし、純洋風でもない、どこの国の住宅かわからないようなものがたくさんありますね。それも、東京、大阪、九州、どこの展示場に行っても、みんな同じ。地域のアイデンティティがない。日本全体を通してみても、日本としてのアイデンティティがないことが問題だと思う。

日本は平安の文化もあり、奈良の文化もあり、天平の文化もあったかもしれないけど、われわれの現在の生活に一番身近ということでは江戸の文化ですから、そういう江戸の文化の中から、いまわれわれが日本文化として継承して、現代的に生かしていく、そういうものは何なんだろうかというところ、いま深い関心があるんです。都市政策も、生活も、居住文化も、そんなものをそういう観点からひとつ基本的に見直してみようかと」



浦安ブライトンホテル

住まい方

『住まいのなかで今のような形で個室というのは本当に必要なんだろうか。子供のための個室というのは、心の豊かさを育むという方面では、あまり良い環境とは言えないのではないか』という疑問とは。

「確かに、戦前は住宅の規模が小さかったし、個室の確立はむづかしかった。それが住宅の規

模も大きくなり、部屋が幾つかとれるようになってきた。それはそれでいいのですけれどもね。社会の構造も変わってきたから、もちろんそのことだけのためじゃないでしょうが、だんだん家庭というものが、あるいは家庭の結合みたいなものが失われてきた。それに加えて、一緒の家にいるけれども、子供が部屋にとじこもる、共同の生活がない、そういう状況になってくる。個室をつくってその中に放りこんでしまうというのには、かなり家族生活に影響しているのではないかと思えます。

もともと個室が大事なんじゃなくて、個の確立といえますか、自我の確立が必要で、そういうそれぞれ自我を持った人たちが共同生活をする。そのときのルールといえますか、空間の取り方として、自我の確立みたいな目的のために個室が必要であるということなんです。ただ、物理的に空間が取れるからというので個室をつくるという話はおかしいじゃないか。やっぱり自我の確立みたいなものを図りながら、自我を入れる器を考えなくちゃいけない。そんなようなことを言いましたね。やっぱり、みんなが一緒にいる中で自我の確立が始まるということですかね。そういう自我の確立を旨ずすためにもみんなで共同で生活するような、そういう空間を大事にする、あるいはそういう生活空間のつくり方を大事にする。そんな必要があるんじゃないかと思う。それにしてみると、いまの個室

はなかなかそういうふうにはできていないんじゃないかということですよ」

本末転倒というか、カタチが先行している例は、多々見受けられ、

「あります、あります。だから、さつき申し上げた、物売りじゃなくて、そういうソフトを一生懸命考えて、それにふさわしい物を結果としてつくるといふことです。これからの家庭生活はどうあつたらいいのか、社会生活はどうあつたらいいのか、あるいはどうあつたらいいのか、そのあたりをしっかりと見据えないと、本格的な住宅もできない、本格的なリゾートも、都市づくり、まちづくりもできない。そんなことで、いまハッスルしています」

さて、次回ご登場願う小澤紀美子さんへのコメントをいただいた。

「『住まいや都市の質をあげていくためには、住み手の意識を高めていかなければならない』という彼女の持論に強い共感を覚えます。」

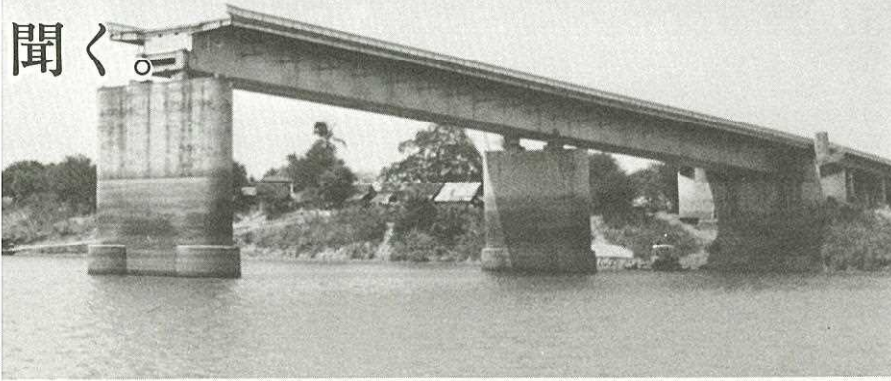
企業が、よい街づくり、住まいづくりをすること、まっとうな経営ができる世の中にするため、同志の環をいっそう広げていただけたら願っています。

なお彼女は、大学での教え子のなかで、最も幅広く活躍している人の一人です」

インタビュアー・緒方英樹

日本。これからの社会資本整備

聞く。



維持・修繕が容易な社会資本整備

——一九七八年末のベトナム軍進行以来十三年に及んだカンボジア戦争が一九九一年十月二三日、パリ国際会議で包括的和平合意により一応の終止符が打たれました。PKO法案が可決され当面の日本の課題としてカンボジア再興への貢献が話題となっているわけですが、建設省の役割としての社会資本整備、これからの貢献という意味で、事務次官はどのような印象を持たれたのでしょうか。

三谷 日本から直接カンボジアに入るルートがありませんのでバンコクから入国したわけですが、建設省や公団から道路や住宅の専門家たちにも同行してもらいました。

カンボジアは人口約八百万人、面積約十八万km²、日本の面積の半分ぐらいでアジアのなかでは人口密度は低いほうです。人口の九割が農民ということもありまして「飢えがない」とも言われています。

カンボジアの首都プノンペンに入って視察しましたのは、チュルイ・チョンバー橋、通称日本橋です。トンレサップ湖から流れ出てプノンペンでメコン川に合流するトンレサップ川に架けられています。この橋は全長八五〇m、一部日本の戦後賠償により供与され一九六三年に完成したのですが、一九七二年に内戦により中

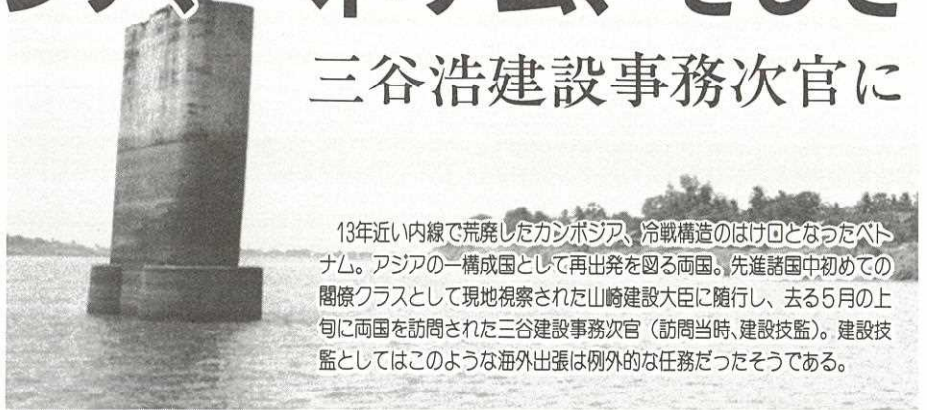
央部の三径間が落橋しています。この橋を両岸から見せてくれるということだったんですが、これがなかなか大変でして、なにせトンレサップ川には現存する橋がないためにカーフェリーのある上流まで車でいかなければならない。この道路が内戦の影響で舗装どころか全くの土道で至る所に穴があいている。地雷がどこに埋められていても不思議ではない状況ですから、前を走るジープが気になってしょうがない。それこそイブ・モンタン主演の「恐怖の報酬」のような気分です。それも百二〇kmもの道路を走破する結果となりました。

橋もさることながら、最も基礎的な交通路ですらそういう状態ですから、道路周辺の家には電気もなければ水道もない。社会資本整備をまさに人間生活：日常生活を安定させる、最低限の生活に必要なシビルミニマムとしてスタートさせなければならぬ。そういう意味では、建設省所管の社会資本整備としての仕事が残っている。日本がもし復興のお手伝いをするとするれば、やることはいくらでもあるという感じですね。

カンボジアは長く不幸な内戦状態がありまして熟練した学識経験者というのがほとんど皆無に近い。国外に難を逃れたごく一部の人を除けば知識人たちの多くが殺されてしまったわけです。したがって、カンボジアで土木工事をやるにしても、念頭においておかなければならない重要なことは、誰でも簡単に直せるような、維

カンボジア、ベトナム、そして

三谷浩建設事務次官に



チュルイ・チョンパー橋
(通称、日本橋)

13年近い内線で荒廃したカンボジア、冷戦構造のはけ口となったベトナム。アジアの一構成国として再出発を図る両国。先進諸國中初めての閣僚クラスとして現地視察された山崎建設大臣に随行し、去る5月の上半旬に両国を訪問された三谷建設事務次官（訪問当時、建設技監）。建設技監としてはこのような海外出張は例外的な任務だったそうである。

持・修繕が非常にやさしい社会資本を整備する必要があるということではないでしょうか。

いつ落橋しても不思議ない橋

——一九六八年アメリカと北ベトナムのパリ和平会談を経て、一九七三年ベトナム和平協定調印、一九七五年サイゴン陥落、南ベトナム崩

壊となりその後いろいろあったわけですが、戦後数十年を経たベトナムの現状とその印象はいかがだったでしょうか。

三谷 カンボジアで二日過ごした後ホーチミン（サイゴン）に飛行機で向かいました。ソ連製中古の飛行機は、離着陸の際に通常新鮮な空気が出てくるところから、気圧調整がうまく行かないようで、水蒸気がもうと出てきて機内



みたに・ひろし

建設事務次官

昭和9年、東京生まれ。33年、東京大学土木工学科卒業後、建設省に入省。関東地方建設局企画課長、中部地方建設局沼津工事事務所長、計画局国際課長、北陸地方建設局長、道路局長、技監を経て、平成4年6月26日から事務次官。

が真っ白になってしまふんです。数m離れた人の顔が見えないくらい。

ベトナムは日本のちようど九州を除いたぐらいの面積で、人口が六千万人。

フノンペンからホーチミンに入るとその豊かさが目立ちます。ただし、ホーチミンですら一週間に四、五回停電すると言っていました。停電を意識的にやっている。つまり電気が足りないのので停電をさせなければならぬ。冷蔵庫を使っている、必ずしもその用をたさない。

ホーチミンのまちそのものは、一言で言うとなんて全自動二輪車でうずまっています。せいぜい一二五ccぐらいでしょうが、家族全員が乗っているという感じです。少なくとも三、四人。日本に帰ってきて思い出せないんです、どうやって乗っていたんだろうと。

自動車は非常に少なく、自動車が走っていると、それを取り囲むように二輪車が行く。実際に自動車に乗って前を見ていると、足が自動的にブレーキを踏む格好になって、みんな足がしびれるという、それぐらいこわい。自動車が一番先に壊れるのはホーン。あんまりこわいのでホーンを鳴らしつぱなして走っているから。二輪車の方はまったくよけない、ホーンを鳴らしたって全然知らん顔なんです。

次にホーチミンから飛行機で首都のハノイに向かったんですが、千四百kmぐらい離れています。ベトナムは資源もあるし、ある意味ではポ



ホーチミン市内

テンシヤルのある国なんだろうが、ハノイとホーチミンが千四百kmも離れているというのは大変なことだ。日本というと東京と大阪がそんなに離れていたらどうか。コミュニケーションギャップがどうしてもあるんじゃないか。

ハノイというのは中国の雲南省に近いということもあって中国文化の影響が非常に残っています。その中国から「紅河」という川が流れているんですが、川幅が広いところで1km以上あるすごく大きな川で、ハノイに入るところに三本の橋がかかっています。

そのうちの一本がロンピエンという橋なんです

すが、一九〇二年着工ですから一九〇年近く経っているわけです。フランス植民地時代に、エツフェルの設計により、フランスで製作、組立、解体し、船で運び、再び現地で組立てたという代物です。アメリカの爆撃を受けたんだろうと思います。現在自動車は通行禁止、真ん中を鉄道が通っています。

主径間一一二〇mの橋なんです。映画「カサンドラクロス」に出てきた、汽車もろとも落ちてしまった橋を思い出さすような非常に老朽化したもので、現地の技術者も「お前はこの橋をどう思うか」と言うので、「これはもうすぐ落橋したっておかしくないんじゃないか」と言ったら、「お前もそう思うか」と言う。それぐらい危ない。

もう一つ一九八五年にできた有料橋、タンロン橋というのがあります。これはまさにベトナムの歴史そのものみたいなんです。一九七四年中国の援助で着工、中国の引揚げによる中断、一九七九年以降ソ連が替わって援助して完成というものです。はじめはわからなかったんですが、有料橋でトールゲートという日本のを思い浮かべるんですが、そうではなく守衛ボックスみたいなのがあって、切符を買ってそこで渡す。ほとんどが二輪車ですからなかなかおもしろい光景です。これも完成してわずか十年もたっていないんですが、維持・修繕をまったくしていないために錆がはじまっている。

いずれにしても、橋や道路、電気事情など社会資本整備の必要性ということを考えたとベトナムもやっぱりこれからが大変な国です。

志気の高い日本大使館

——カンボジア、ベトナム。確かに不幸な時代を経験した両国で、戦後復興の行方も前途多難な状況のようですが、日本の特に社会資本整備としての国際協力にはかなり期待がかけられていると思うんです。両国にある日本大使館の復興への息づかいも、かなり高いのではないのでしょうか。

三谷 建設省関係の技術者がこれからいよいよ出番というところでしょう。私も国際課長という、国際関係の仕事をしていまして、このところこのような仕事から遠ざかっていましたが、大変印象深い旅行でした。先ほどの現場もそうですが、実際にはそのほかにも山崎大臣が次から次へと要人に会われ、積極的に精力的なスケジュールでした。

一番感激したのはカンボジアもベトナムも日本大使館の意気が揚がっているということと、両国の大使館もできたばかりです。いずれも館員にとっては生活環境が厳しいし、なおかつ情報がなかなか取りにくい。日本でわれわれが簡単に手にしているような食料品もほとんどない。わざわざバンコクまで買い出しに行くとか、日

本人がたまたま訪れる際に少し持っていくという程度ですね。外務省の方もこの時期一番大事な任務を果たしているもつとも志気が高い大使館ですと言っておられました。

結局、歴史の変わり目というか、一つの世界の変わり目で、これから復興を通じて新しい国をつくっていく。そのお手伝いをするという意味から、非常に限られた人数でよくあれだけ頑張っておられるなと思ひまして、非常に感激しました。私もいろいろな国に行っていますけれども、大変印象深く、感激した国の一つと言えます。



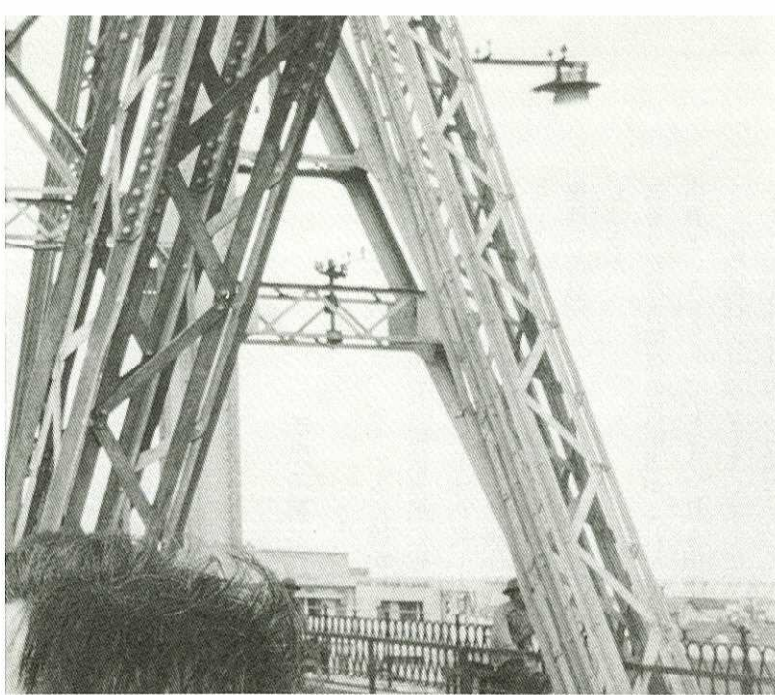
ベトナム、湯下大使公邸にて

これからの日本、社会資本整備への要望

——日本の社会資本整備を考えるとときに、カンボジアやベトナムのような生活に必要最小限な社会資本整備と、ある意味でサービスの高いと考えられる欧米諸国の社会資本整備の存在が参考になると思われまます。交通、住宅、電気、水道といった当たり前とも思われる社会資本を整備しなければならぬ国と、次の信号をどれくらいの速度で行けば青で通ることができるといふ情報を表示している国。言ってみれば両極端にあるようなこれらの現状を参考に、これからの日本の社会資本整備にとって必要とされることとはどのようなことでしょうか。

三谷 日本の社会資本整備も、まさに先の戦争でゼロからスタートしたわけですね。建設省が担当している道路を例にとっても、シベルニマムという意味で、荒廃した国土をまず必要最小限整備する、確かにその頃は質より量だったんでしょね。国道でも二車線の交通路をまず確保しようということとそれ以上の道路が非常に少ない。はるかに社会資本整備を凌駕して経済社会が発展してきたわけだからどうしてもギヤップがある。加えて量だけじゃなくて質の面でどうするかということがいま要求されるようになってきているわけです。

私はよく言うんですが、欧米に比べて日本の



社会資本は整備が遅れている。人口や国土の大きさをみると道路延長も半分以下だとか、一戸当たりの居住面積が小さいとか。しかし住宅・社会資本の整備は使ってもらう人にとっていいかどうかということが、まずその方向を決める判断の基準になるわけで、当たり前の話なんですね。道路で言えば歩行者あるいは自動車の運転者、物を運ぶ人、乗る人などが効率的にしかも快適に使えるかどうかということです。築造者すなわち技術者は利用者の目で見る、そうすれば欠点もわかるし、質のよくないところがよ

くわかる。

利用者の立場になって社会資本の整備がこれでもいいかどうかということをやいまでずうっと言い続けていたんですが、最近それが非常に大事な要素になってきたわけです。首相の諮問機関、経済審議会から「新経済計画（一九九二～九六年度）」の最終答申案が出ましたが、これにも利用者の視点に立った社会資本の整備目標というのがわざわざ掲げてあるんです。いままでは道路を何キロ、河川の堤防を何キロ整備しますとか。そういう数字も大事なんですが、利用者にとってどうなんだというところ、こういう数字とは違った目標が求められるわけです。たとえば幅の広い歩道はどれくらいできますとか、平均速度はどのくらい上がりますとか。自動車の運転者としてはあそこまで何分で行けるのかということに興味があると思うんです。何キロできましたというのも大事なことなんです。違った観点の指標で社会資本の整備目標を考えるようになったわけです。すべてそういう目で見ていかないと、私も建設関係に取り組んでいる人は、どうしてもうまく整備を進めていくことができないだろうと思っっています。

建設省では最近「建設行政に反映させなければならぬ社会の課題」と「建設技術に対する国民のニーズ」というものを調査しました。

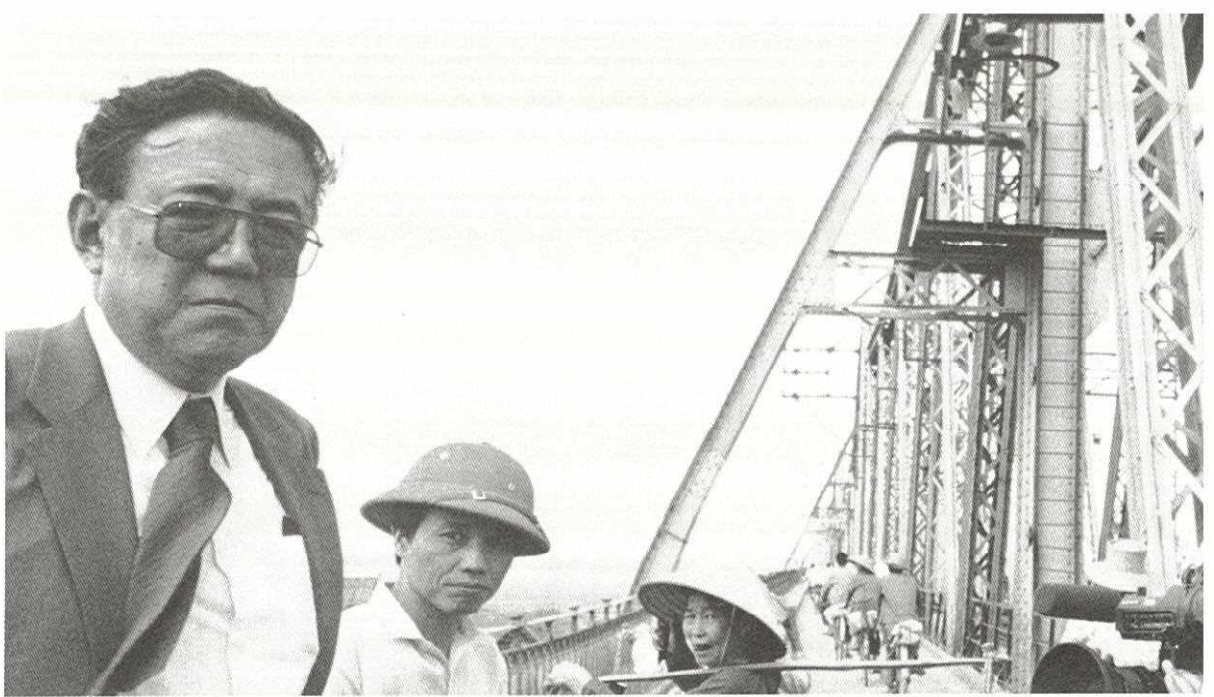
「いったいあなたはこういうことを社会問題として一番大事に考えていますか」ということ

を聞いてみると、三割弱の方々が「高齢者が非常に増えて、老人介護が大変だ」と。その次に「環境保護問題」「自然保護の問題」「慢性的交通渋滞」「ごみ、廃棄物の増大」となっています。これらから今後の社会資本整備のアプローチが生まれてくる。

われわれは技術者ですから建設省でいろいろな建設技術開発を考えている。その技術に対してどういうことを要求しているのだろうかというのを建設関係の専門家と一般の方々に対して別々に調査しました。専門家と一般の方と違いを探るということで別々に聞いてみたんですが、意外にも同じ「自然にあふれた海や川の整備」というのが一番でした。これに「高齢者対応の社会資本、住宅」「省エネルギー型の施設、都市の建設」が続きます。違ったところと言えば「景観をどう考えるか」「建設工事の自動化、ロボット化」「道路やダムデザインのどのよう考えるか」ということについては、専門家は重要視しているが一般の人はあまり考えていないということでした。

結局このアンケートで一番特徴的なことは、当面経済的なものはいらない、耐久性を考えてくれ、質の高い永続的なものをつくってくれ、ということですね。

もう一つ、このアンケートのなかで建設関係のいろいろな専門用語をどのくらい一般の人が理解しているかということも聞いています。た



たとえば「あなたはこういう単語を知っていますか」ということで、光ファイバーとかリニアモーターカーとかこの辺は誰でも知っているんですけど、スーパードーム、大深度、ガイドウェイバス、ツープイフォーなどになるとどうか。そうしましたら半数以上の人が認知しているという結果が生まれて、かなり建設技術というものについても一般の方が理解してきているということがわかりました。

では、その量よりも質への要望をどうとらえるかというところがむずかしい。

いま四百区間ものコミュニティ道路があるんですが、これはいわゆる通過交通を配慮するためジグザグに道路をつくって、人々がそこを歩きながら散策できる、あるいは自動車も非常に遅く走らせる道路です。第一号をつくってから二〇年は経っていませんが、いろいろな人が各地で取り組んできましたので、かなり特殊性や独自性がありますが、共通的な基準はできています。

個人個人の好みは少しずつ違いますが、全国皆違うものをというわけにもいきませんので、どこまでを基準化し、どこまで独自性を出すか、質への要望に答えるむずかしさはこういうところにもあるんですね。

——ありがとうございます。

「象と象がけんかをして象は死なない。死ぬのは足もとの虫けらだけだ。」カンボジアではこのように言われている。

ホーチミン市役所前、午前六時。国際バスが約十時間をかけてプノンペンへ向かう。満席で、いっぱい荷物。庶民の生活に必要な不可欠な経済交流は着実に動き出している。

昭和九年生まれ。日本の戦後の厳しさを復興の勢いを肌で感じていらつしやる三谷事務次官。カンボジア・ベトナム両国の視察は、日本の戦後復興への回顧ではなく、必要最小限の社会資本整備が望まれる両国への、建設省として貢献できることの強い想いである。

ポール・ポト政権の虐殺を後世に伝える資料館として保存されているトゥルスレン事務所。僅かの時間を利用して見学され、拷問器具や遺体の写真、身の毛もよだつ当時の模様には大変な衝撃を受けられたそうである。

事務次官がよくいわれてきた「利用者の立場に立つた社会資本整備」。さまざまな質への要望に対する最大公約数とは。最適解がすぐ生まれるというわけではないだろうが、建設関係者の対応も多岐に渡っていかなければならぬ。必要最小限の社会資本整備という観点で、一般の利用者も改めて考えてもいいのかもしれない。建設省の要職に就かれ多忙であるにもかかわらず、かなりの時間を割いていただいたうえで、本編以外に「情報の取捨選択」などについてお話をさせていただいた。インタビュー中、映画の話題が再三出てくるほどの映画通でいらつしやる。最近では映画館よりも歌舞伎座や国立劇場へ行かれることが多くなつたそうである。事務次官に就任されたいま、柔軟で多岐にわたるご活躍とますますのご健勝をお祈りする次第である。

(インタビュー・安孫子義昭)

ほんとうに欲しいものってなんだろう

おびたらしいモノや情報、
変わりそうで変わらないライフスタイルや価値観、なんだか自分の拠り所を見失ってしまふような時代の潮流の中でいま、そして将来ほんとうに私たちが選ぶべき、求めていかなければならないもの（「コト？」「ココロ？」）とは何なのでしようか。

○まち

○住宅・社会資本整備

○豊かさのあとにくるもの

○余暇空間とライフスタイル

○ランドデザインとしての

国づくり

五つのキーワードを提示させていただき、執筆依頼をいたしました。以下に特集として掲載させていただきます。

(順不同)

豊かさのあとにくるもの 住宅・社会資本整備

村上美奈子

計画工房 主宰

栄えた国は必ず減衰を迎えるのが歴史の教えるところである。今の日本の豊かさの後にくるものは何であるか。この豊かさがそれ程長くは続くはずのないことも心の片すみでは解っている。ではそのために何をなすべきか。はっきりした方向が見い出せないのが事実である。

ヨーロッパを旅すると、その国や街の豊かさとして感じられるものは、歴史的遺産である。豊かな時代に築きあげられた都市や建築は、その後の時代にも生き続けている。新しい時代のいわゆるモダンイズム建築の方が、もはや古びた感じを与えるほどである。

アメリカを旅すると、国の豊かさは、そのスケールの大きさ、ゆったりとした空間から感じとることができる。しかし、建築や都市を構成する構築物は、いたみが目につく。時間の経過に耐えられる質ではない。モダンイズム建築がその大半をしめているからだろうか。繁栄の時代が、産業革命以後の工場生産や合理主義的思考によって築かれたからとも思える。

アメリカもヨーロッパも、その豊かな時代の遺産をしっかりと残している。これからも、その形は大きく変わらないだろう。

日本は、現在この豊かさの中で築いているものは何なのだろうか。はっきりしたものを見るのができない。

質の良い建築をつくって、後の時代に残せないかということを考えてみる。日本の建築の質

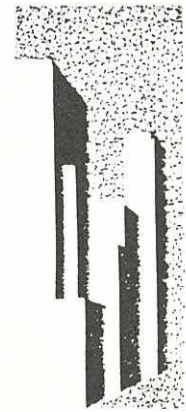
は世界的にも高いといわれている。又私自身もそう思っている。しかし、その質は、精度の良さという点では良いが、長い年月に耐える質であるかどうかという点では疑問がある。

最近建てられる建築物の中で、最も高価で質の高い建物は、商業・業務用建築である。その次が公共建築で、最も質の低いのが、住宅である。用途が変わらず、一番長く使いたいのが、逆に住宅であって、その次に公共建築が続き、商業・業務用建築が最も短かいのではないかと思うのであるが、お金のかけ方や建物の質が逆の順序となっているのが現実である。

世界中の天然石が日本に集められるのではないかとと思うほど、内部はいうに及ばず外部の仕上げにも沢山使われているのが商業・業務用建築である。目をみはるようなまぶしさである。

今、私は公営住宅を設計している。いわゆる高齢化社会にむけての対応策としてのシルバーハウジングである。高齢者の自立を助けるために、建築的にもいろいろと新しい対応策が考えられつつある。しかし、思った程には実行されていない現実がある。特に公営住宅は、工事単価が低い。一般の住宅よりも質の高いものよりも、多くの数量を完成することの方が重要だからである。

しかし、高齢化社会の対応策としては、民間の賃貸住宅ではやれない——採算がとれない——この分野に行政はとりくまざるを得ない。そし



て、建物としての機能は、これまでの日本の公営住宅の考え方の枠からはみだしてしまうような、スペース・機能が求められる。当然のこととして、工事単価が上がリ、一人あたりの面積も増える。公営住宅を所管する窓口では、これまでの公営住宅の考え方を引きずっている。従ってどうしてもなじまないことが多いのである。

例えば、浴室を設計する。段差がなく、引戸で入口ができ、落とし込みの浴槽であること。これらは必要な条件とされている。ところが、このとおり設計すると、浴室の広さは、今までの家族向きの住戸の浴室よりも広くなってしまう。安全性、使い易さの点から器具類も高価となる。民間の住宅よりも立派になり、価格がある。この事実が職員を悩ます。

日本の「住宅・社会資本の整備」としての捉え方の変革が一般化しないかぎり、この問題は解決しない。戦後から、日本の住宅は耐久消費材的な捉え方が一般化してしまった。20年かから30年もてばよしとする風潮である。消費が日本

の経済を支えるということだそうであるから、その器としての住宅が消費されることは、重要なことだったのであろう。しかし、豊かさの後に、この繁栄がそう長く続かないとしたら、また高齢化社会へ突入する時が来た時。経済効果よりも、社会そのものが成り立っていくために、住宅の役割は大きく変化しつつある。質の高い住宅の整備は欠くことができない。

また、人生80年の時代に耐久年限20年30年という住宅は疑問が多い。40才で家を建てたとすると、死をむかえる以前に、高齢者になって、家の重要度を期待したい時に、耐久年限が来ているというのは、実に悲しいことである。戦前、人生60年の時代には、住宅の耐久性は、30年から50年であった。良い建て方をしたものは、100年も持ち、三代にわたって建ったのである。

地球にやさしく、資源のむだ使いをしない。日本の超高齢化社会への対応。どれを択んでも住宅・社会資本整備は、耐久消費材としての住宅の考え方を切り変えて、耐久性があり、質の高いものにしていかねばならないと思うが……。

「ほんとうに欲しいものってなんだろう」と問われると、答えは物質ではなく、精神生活の豊かさである。生活を支える住宅は、その基礎である。これがぜいたくである必要はないが、基本的な所での質の高さ、見えにくいがいこそ潜在的にはほんとうに欲しいものといえるのではないかと考える。

森林の育成と環境の創造

伊藤善市

東京女子大学教授

一、地球環境の創造

昭和天皇の誕生日「四月二十九日」を「みどりの日」としたことは、環境問題が地球的規模でとりあげられている時代にふさわしい、賢明な決定であった。周知のように、地球環境元年といわれた一九八八年以降、地球温暖化、熱帯林破壊、フロンガスによるオゾン層破壊などが、国際会議で討議され、国内でも自然保護や環境問題への関心が高まってきているからである。この問題こそは、今後全世界的な広がりの中で、何百年間という息の長いスパンで説明され、また解決さるべき重大問題なのである。

人類がこの世に出現してから、かなりの年月がたったが、人類は農業を発見してから水利に恵まれた地域に定住し、多くの都市を創った。しかしながら、人類は自然からの恵みであり、また生きた宝ともいべき森林を伐って、船や建物をつくることに熱心で、木を植え、育てることを怠ってきた。そのため、山は保水能力を失ない、川も土も荒れてしまい、森林は砂漠化してしまった。それだけに止まらず、多くの文化や文明を創った都市それ自体も、砂漠の中に埋没してしまった。まさに「文明の前には森林があり、文明の後には砂漠が残った」のである。このように、ヨーロッパをはじめ、多くの国々は、森林を破壊することによって都市を築い

てきたのだが、その行きづまりによって滅びてしまったのである。彼らは都市生活が行きづまると、その都市を捨てて別のところに移ったから、もとの都市はゴーストタウンになってしまった。彼らは都市を使い捨てにしたのである。

二、草木塔に学ぶ

ところが、日本では森林を育てることで、文化を養ってきたほとんど唯一の文明国であった。奈良も滋賀も京都も鎌倉も、いぜんとして古都にふさわしい風格をもち、いまなお栄え、人間が定住しており、決して砂漠化しなかったのである。そこは海とも陸とも川ともつかぬ低湿地であった。それを農地に変え、その農地を守るために、山に木を植え、水害を防ぐという治山治水を行なってきたのである。われわれの先祖たちは、木を伐っては植え、それを育ててきたのである。

衆知のように、日本人の信仰心の基礎には、自然崇拜と祖霊崇拜とがある。古来、日本人の自然崇拜の象徴は神への信仰となり、祖霊崇拜の象徴は仏への信仰となつて現在まで続いている。ところで、山形県には草木塔の石碑が多くみられ、現在確認されているものだけでも七十基もある。それは、草や木を利用し、その恩恵をうけて暮しをたてていた人々が、伐採をする時に草木に感謝し、宿る精霊を供養するために

建立されたものである。また山で木を扱う人が、災害にあらうことは木の怨霊によるものと考え、その鎮魂のため、ということがいま一つの理由となっているものと考えられる。

「草木風土悉皆成仏」という仏教の思想が、この背景にあることはいうまでもない。ところで、北海道の大雪山国立公園内には、昭和二十九年に北海道を襲った洞爺丸台風のために、風倒木となった大量の樹木の霊を慰めるために、「樹霊碑」が建立されている。これもまた、日本各地の社寺境内などの樹木を「鎮守の森」として信仰の対象となっている思想につらなるものである。いずれにしても、美しい山々に囲まれ、自然の恵みに満ちあふれている山形の風土が、生きとし生けるものとしての草や木に霊を感じ、信仰する心を育くんだものであろう。アルバート・シュバイツァー博士のいう「生命への畏敬」の念を、この草木塔はわれわれに教えてくれるのである。

積尊の教えは、一部の生物に対してだけでなく、とりわけ樹木に対して敬虔で優しい態度で接することを求め、すべての仏教徒が何年おきかに一本の木を植え、これがしっかりと根づくまで見守る義務があると教えている。E・F・シュマツハー教授は、「万人がこの義務を守るならば、外国援助がまったくなくとも、本当の高度な経済開発ができることを容易に証明できる」のであって、「東南アジアの経済が振るわ

ないわけは、疑いもなく森林を許しがたいほどなおざりにしてきたことによる」とのべている。かつて空海は、「祈りなき行動は盲動であり、行動なき祈りは妄想である」と教えたが、都市の再生と創造を図るためには、何よりもまず、このような敬虔な態度とたくましい行動力が不可欠のように思われる。

三、森林と国土を守るために

四全総では、国土の七割をしめる森林が、木材生産のほか、土や水との密接なかわりを通じて、国土の管理という重要な役割を果たしているだけでなく、四季を通じて美しい自然を形成し、野生生物や微生物の生息地として重視すべきことを強調している。

ところが、その重要性にもかかわらず、山村の過疎化によって、森林の管理水準が低下している。戦後、積極的に進められた造林によって、人工林は一、〇〇〇万ヘクタールに達した。いま成長の最盛期をむかえ、その過半が間伐対象期に入ったのに除間伐作業がおくれたために、竹ヤブのような杉や檜が目立ってきた。

なぜそうなったか。その一つの理由は、間伐材を適当に間引きして成林にしようとしても、オーナーとしての取り分がなくなってきたという点、いま一つの理由は三公社五現業体制が独立採算性を建前にしているために、その矛盾

がでてきていること、に求められる。周知のように行政改革によって国鉄は民営分割方式が採用されたため、累積赤字からやっと解放され、経営努力の効果がはじめている。

ところが、林野庁の方は火の車で労使とも必死になって再建の努力を続けているのだが、伐る木が急減したのに労務だけは過剰という結果となっている。この原因は、林野庁の政策が、森林の長期的な生態的合理性よりも短期的な経済的合理性を優先させたことに求められなければならない。つまり目先の効率にひきずられ、長期の効率を軽視したからである。

林野庁が独立採算制を強いられ、単年度収支のバランスを確保しようとするれば、収入を増やし、支出を減らさなければならぬ。収入を増やすためには木を伐って売上げを増やし、支出を減らすためには人員を整理して人件費を減らし、やるべき仕事をおさえて経費の節減をはかる、ということになる。単年度での辻褄は合うだろうが、何年かたてば、森林がじり貧になり、山村社会が崩壊することになる。

いま、国有林で働いている人はおよそ三万人、民有林で働いている人は二万人とのことだが、三八万平方キロの国土と森林を守り、育てるために彼らを「国土・森林保安官」として育て、評価することが必要だと思われる。

新たな国土軸と経済文化圏の形成

小見志郎

㈱野村総合研究所
地域計画研究部長

始動しはじめた
国土開発の新たな模索

いま日本の各地方ブロックで次の時代に向けた国づくりの模索が始動しはじめている。北海道・東北二世紀構想、日本海国土軸構想、瀬戸内海経済文化圏、環黄海経済圏などが代表的である。

そのいずれの国土開発構想も、基本的には東京一極集中の是正を図り、多極分散型国土の実現を目指そうとするものであるが、グランドデザインを描くにあたって共通した類似点、共通した流れが見受けられる。

まず第一は、これまでの地方ブロックの枠組みを越えた新しい経済圏の構築への流れである。その新経済圏は概ね一、五〇〇万人の単位から形成されるとみられる。

第二は、新しい概念の国土軸の提起への流れである。第二国土軸の論争が引金になっているものの、高速交通体系と情報通信ネットワークへの本格的な取り組みが指向されている。

第三は、国際化の流れであり、大きく変貌しつつある国際的な枠組みを視野にいたれた国土の形成が模索されている。新しい経済圏構想は地域の国際化、グローバル化を軸として組み立てられようとしている。

一、五〇〇万人経済圏からなる
国土構造の再編

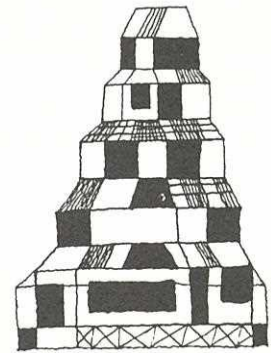
新しい経済文化圏の構築が模索されているが、その規模は概ね一、五〇〇万人から二、〇〇〇万人といったところである。土地、森林資源などのポテンシャルを活用したフロンティアが広がる北海道・東北は一体的に取り組めば、一、八〇〇万人の経済圏が構成できる。また歴史的にも大陸への表玄関であり環日本海経済圏の中核を担う日本海国土軸は二、〇〇〇万人である。そして、世界有数の多島美を誇り明石海峡大橋等で一体的になる瀬戸内経済文化圏は一、五〇〇万人の環状経済圏ができあがる。既存の近畿圏二、〇〇〇万人、中京圏一、六〇〇万人、九州圏一、四〇〇万人と比べても遜色のない経済圏が国土に加わることになる。このような規模の経済文化圏が自立的に形成されてこそ、東京圏への一極集中の是正を図ることができる。

これらの経済文化圏は東海道・山陽の第一国土軸に次ぐ第二、第三の国土軸にそって形成されることに特色がある。国土軸は、中核的な都市機能をもった地方拠点都市が適度に軸状に配置され、「集中からの分散」を可能にする高速交通体系や情報通信など新しい技術を高度に活用して相互に機能を分担しながら独自の圏域を形成し、多極分散型国土の実現に寄与するものでなくてはならないだろう。

とりわけ、一、五〇〇万人経済圏は、地方が単独では持ち得ない国際拠点機能を形成しうる規模の経済圏である。国際拠点空港、国際港湾、国際コンベンション機能をばかりでなく、国際的な情報の受発信機能を背後圏の入口・経済集積を基盤に確立することができる。日米欧の三極体制では国際都市東京に国際中枢機能が集中しがちであるが、中国、極東ロシアを含めたアジア太平洋地域の成長ポテンシャルが急速に高まりつつあるなかで都市の国際機能も多元化していくとみられるからである。

アジアのダイナミズムと運動する 国土開発

アジアからみた日本はとてつもなく巨大な経済国家であることはまちがいない。日本の後を追いかけていたアジアNIEsは日本の背中を見たと考えた瞬間に大きく水をあけられていた。苦渋を何度も味わってきた。そのアジアNIEsが華南経済圏など局地経済圏に投資しはじめている。香港、シンガポールは世界第一位のコンテナ貨物取扱港を競うまでになっている。またASEAN諸国も中産階級の登場と民主主義の芽生えのなかで、着実に工業生産力をもちはじめている。マレーシアは世界最大のクーラー空調機器の生産基地になりつつある。中国の対外開放政策はいましばらくその帰趨を見守る必要があるが、歴史を測ることはないだろう。



このようなアジアのダイナミズムを受けとめるのは日本市場の役割でもある。そのとき、東京都市圏や関西経済圏のみで受けとめられるものではないだろう。三大湾にこれ以上の荷重をかける環境ではもはやない。まして極東ロシアからの流れ、北米大陸からの流れの三つの軸を考えたとき、一定程度の集積と国際機能をもつ懐の深い経済圏が国土に複数形成されていることが望ましい。

「二一世紀の社会と国土」の哲学 いま必要な

新しい経済圏を単位として国土構造を構築していくとき、重要なポイントはこちらら経済圏づくりがいかなる構造転換を呼び起こすかという点である。地形的な連担性や歴史的な結びつきもさることながら、国土に新しい構造転換を呼び起こし、新世紀にむけての価値創造につながらなければ経済圏形成の意味がないし国民の支持も得られないであろう。

その構造転換のキーワードは、技術、価値観、制度変革にあると考えている。自動車、エレクトロニクスからロボット、ハイビジョンなどにいたる最先端技術は日本の経済優位性を確保していくためにも必要不可欠な条件であり、経済圏形成にとっても基礎的な条件である。地場産業を含めて経済圏特有の優位性を確保した技術・産業分野が確立してこそ情報発信機能をもつことができる。東北インテリジェントコスモス構想が好事例である。また、生活者の価値観が多様化しているなかで、新経済圏の形成は新世紀へのライフスタイルを創造していくものでなくてはならないだろう。地域の豊かさ、クオリティオブライフに裏打ちされたライフスタイルの創造が人口定着を真のものにしていく。一村一品やシティブランドが地方の生活者、都市の生活者にそれぞれ支持され従来と異なるライフスタイルを創りだしつつあるように、生き生きとした新経済圏独自の生活像が新しい価値観のもとで構築されるべきと考える。さらに、戦後経済社会の制度枠組みが問われている今日、行政機構を含めて新世紀にふさわしい制度の再構築が伴わなくてはならないだろう。

新世紀への国土づくりは大きな構想力、言い換えると、二一世紀の社会と国土についての哲学が求められている。国土政策プランナーが活躍する時代を迎えている。

健全な田園地域の保全と創造

～ハウステンボス見学から～

進 士 五 十 八

東京農業大学教授／造園学

先週、雑誌の取材で長崎オランダ村のハウステンボスを訪ねた。

いわゆるテーマパークとも、リゾート開発とも一味違ったポリシーと、具体的な環境の質の高さを堪能した。ただ漠然と、この地域のこの場所に忽然と登場したオランダ風の景観に、ただただ拍手をおくってよいものか、迷いの心も残った。オーナーの神近氏の、ホンモノ志向やエコロジカル・シテイへの実験都市的展開には心から拍手をおくりたいし、これがふつうの住民がはりつくふつうの都市になるべきだとの思想を聞くと、是非共そのような方向で成功して欲しいと願わずにはいられなかった。

それでも、しかし、何かが残るのであった。後で思うのであったが、私の中には日本の国土の将来風景がイメージされていたのである。

ハウステンボスのオランダばかりか、日本全国各地にイタリアやドイツ、アメリカが造られてきている。首都圏の郊外住宅にもコロンビアスタイルやスペインシユスタイルが、何の必然性もなく各地につくられている。映画のマカロニ・ウエスタンよりも、もっと不自然な風景が日本の国土を席卷しつつあるのである。

ハウステンボス訪問で、私は「景観におけるらしさ」とはノについて新しい発見をした。材料からディテールにいたるまで徹底した建築やペーブルメント（舗装）や緑の取扱いには、ホ

ンモノ以上にオランダ並みの質を感じた私であったが、たった一つだけ「異和感」があった。

それは地区外の山や丘への眺望である。優れたオランダ風建築景観、町並み景観の背景には、如何にも日本の、如何にも長崎らしい山や丘の緑が横たわっている。折角、内部景観だけならオランダらしさを十分に演出しているのに、外部景観と一体的に眺める風景は、やはり日本の風景なのである。

どんなにホンモノで建築しても、人の眼はごまかせない。何んと、ランドスケープとは正直なことかと、痛感したわけである。

要するに、私が欲しいのは、東京、大阪、福岡などの経済都市でもないし、話題性や非日常性を強調したハウステンボスやリゾート都市でもない。平凡でも心おだやかに私たち国民が抱いて立ち得るわがふるさと日本の、郷土性が実感できる豊かな、そして健全な田園性である。

勿論、経済活動と自律的パワーの発揚によって経済都市やリゾート都市は、わざわざ私が欲しいと訴えなくとも登場してくるであろう。だから、あえて欲しいと言わないだけ、それは不要だと思っているわけでは毛頭ない。

ただ将来の日本が、そうした経済活動の自律的パワーの結果だけでおし流されて、全国各地に全世界のミニチュアが覇を競うというだけではいかにもさみしい。それは、現在、どの都市でも推進されている都市デザインによる美的景



観都市づくりの方向の在り方への忠告でもある。
 いわば「図 (figure) になる都市づくり」への
 一方的展開への危惧である。

「図」は、「地 (ground)」とのバランスにお
 いて図のすばらしさが出るものだ。余りに過大
 な図、背景を考えない点景は絵を台無しにし
 てしまう。

十分に落ちついた風格ある風景 (地) があつ
 てこそ、都市という点景 (図) が安定して賞味
 できるのである。

国土スケールでの「地」は、田園地域 (農業
 地域・農村地域) である。ところが、日本の現
 状では、この地域が都市的ライフスタイルに席
 巻され、景観的にも都市的デザイン手法の適用

によって、そのアイデンティティが浸されつつ
 ある。

ハウステンボス開発は「図」であるが、背景
 の山並み景観は「地」である。「地」を第一義
 に考えて「図」を描かなければ、余計な装飾や
 別の修景事業を付加してゆかざるを得なくなる。

オランダばかりか、日本人は戦後、世界中の
 ものを日本の中に造り出した。衣食住のすべて
 にわたって貧欲に世界を集め消費してきた。い
 まや都市風景までも、世界を消費しようとして
 いるのかも知れない。

しかし、お金で買えるからといって日本の風
 土には適合しない世界を持ち込む方法が最良か
 どうか。住環境の質を上昇させるためには、人

々が高額のお金を支払う商品を買わなければならない。
 高く売れる商品が、ビバリーヒルズや
 ハウステンボスなのだろう。

そろそろ、こういう発想や循環から脱却して、
 日本の風景 (地) に立脚したホンモノの質の高
 さに、お金を払う人々が増えてもよいのではな
 いか。又、そういうモノを創造してゆこうとい
 うデベロッパーが登場してもよいのではないか。
 特に、混乱と質的低下を招いている農村地域
 に「健全な風景」とは何か? その再生のため
 には何をなすべきか? という国土政策が登場し
 てもよいのではないか。

「生活大国」の第一歩は、国民自らが自国本
 来の景観、日本の、そして日本各地に「○○ら
 しき」のある風景をキチンと保全し創造してゆ
 くことではないのだろうか。

自分の顔 (国土風景) に自信がもてないと、
 自分の生き方や生きがいまでを不安にする。

日本の国土全体の「地のデザイン」こそ今、
 最も必要なことである。何かを新しく建設する
 ことだけが重要なのではない。

問題の多い、不健全な部分を健康にすること、
 それが本来のグランド・デザインというものだ。
 日本の将来、国民みんなが誇りをもてるよう
 な「日本のランドスケープ」を保全創造してゆ
 くための施策に是非共着手して欲しいものである。

これからどうなる余暇スタイル

田 所 正

建設省 建設政策研究センター
主任研究官

「日本人は遊びがヘタだ」「日本人は長期休暇をゆったりと過ごすことになじまない」などのような話を、たまに耳にすることがあります。いろんな分野にたくさんの遊びの達人がいるにはいるのですが、全般的に遊び心豊かな人が少ないのかな?としたりもします。日本人の勤勉さは世界に高い評価を得ているところですが、そのために遊びや余暇の過ごし方に対する創造性が乏しいのでしょうか?

私は今、21世紀のインフラ整備の研究の一環として、国民の価値観やライフスタイルの変化について研究しています。価値観やライフスタイルと言っても、まさに十人十色であり、研究と言えるようなものでもありませんが、余暇スタイルについて色々と見聞したところから、紹介してみたいと思います。

日本人の国民性や価値観については、文化人類学的視点等から多く語られていますので、細かい話は他書に譲りますが、島国で人種交流がほとんどなく、温帯に属し四季がある、という地理的条件は、日本独特の国民性を育んできたと言えます。また、狭い土地、風水害や干ばつ等に耐えて来た農耕社会の歴史が日本人の勤勉性のベースになっており、それに併せて、明治以降の質の高い義務教育が日本人の知的水準を押し上げ、20世紀の繁栄をもたらしたと言えます。

話を遊びに戻します。バブル華やかなりし頃、

リゾートブームを皮肉るように、「奥の細道しかり、巡礼の歴史しかり、日本人の旅行は周遊型。西欧型の長期滞在レジャーなどとてもムリ」という話を聞きました。また、自分自身の趣味に合った旅行を求める人は国民の3割程度、残りは団体旅行志向という話もあります。なるほど、とうなずけそうな話ですが、私はそうは思いません。日本にはなれません。日本人の志向は明らかに新しいものに向かっているはずで

日本にも、御存知のとおり、粹で洒脱な江戸時代の町人文化をはじめ、新たな遊びの追求が時代に応じてさまざまな文化を創り出しています。しかし、農村をはじめ、共同作業要素の強い昔のコミュニティでは、日々の労働を数日空けて、旅行に出ることなど考えもできなかったでしょう。植民地政策の時代から、経済的、時間的余暇を持ちながら余暇のスタイルを築いて来たヨーロッパ諸国とは、文化的ストックが違っています。

第二次世界大戦後、経済を復興・成長させる過程で、日本人のライフスタイルは大きく変わってきています。第一次産業就業者は、50年の約50%から、65年には半減し、90年には7%まで低下、合計特殊出生率は戦前に4を上回っていたものが、60年にはほぼ2まで低下（90年は1.54）していることからわかるように、戦後の約20年間で農村型大家族ライフから、都市型核家族ライフへの大転換が進みました。その後、高

運輸送機関の発達や週休2日制の定着などで、かなり余暇・旅行に対する感覚は変わって来ました。

さて、それでは今や経済的に欧米をしのぐほどの地位に達している現在、当然、余暇に対する感度も十分高まっているはずなのですが……。いったい何がじやましているのでしょうか。

それは、「企業」というムラ社会の強い求心力でしょう。これが社会人の家族や地域コミュニティへの帰帰を強く阻んでいると言えます。日本型経営と他の先進国に恐れられている背景にはこの企業に対する忠誠心があり、強靱なタテ社会、トップダウンシステムが日本の目ざましい成長の推進力になって来ました。たまの休みも疲れ切ったり、接待であつたり。休日に十分な余力がなければ家族で充実したクリエイティブな時間を過ごすことはできません。私の職場の霞ヶ関界限では、特にそういう印象が強いので片寄った表現になっているかもしれない。その点は御了承を。

もちろん、時代は変わっています。約20年前、ドルショック、オイルショックという経済成長の大転換期に「脱サラ」「ユックリズム」等のことが生まれ、それまでの反省も込めて、脱企業戦士の流れは着実に進んでいると言えます。バブル景気はすみにして転職が活発になり、時短も進み、自分の追求への条件はますます進んできたと言えます。景気次第ではありますが、

今後新成人の数は最後のピークを越し、減少の一途となりますので、売り手市場は続き労働条件はより改善される方向にあります。同時に、世代間で企業に対する意識も大きく変つてきており、戦後生まれが企業のトップを占める10年程度先までには、個人と社会の関係は大きく変わると思われます。そのころには、新人類も中間管理職。理想的管理職像も大きくモデルチェンジしているでしょう。

ちよつと話がうまくまとまりすぎたので、念のため補足しますが、企業と個人との関係はそう簡単にはドライにはなりません。企業社会には、やはり心許し合える男社会(?)があり、そう簡単にくつがえるものとはなりません。家庭に戻る人もあれば、趣味のつながりで仲間を作る人もあり。しかし、会社も捨てたものではありません。21世紀にも赤ちやうちゃんは不滅でしょう。まあ、数は減るでしょうが。

最後のキメ手は、男と女の関係。「粗大ゴミ」「濡れ落葉」という、女性の逆襲に男性はひるんではいけません。女性も、達観したニュートラルな意識を持たなければいけません。出生率の低下、晩婚化など結婚に対する感覚も大きく変化していますが、これからジャストフイッティングの男女関係になるか、やはり、スムーズに行かない距離ができるのか、私は前者にかけますが、いかがなものでしょうか？

私は今、トリアスロン大会からの帰路で、

この原稿を書いています。日本で始まってまだ10年余りの「変人」スポーツ、周囲からは、「何が楽しいの」などとひやかされています。まともな人間のやることではないと言われる身も蓋もありませんが、若いうちにはできないという先入観は間違いのようです。意外や意外50才を過ぎた方も結構参加していますし、夫婦で参加なんていうのもあり、平均年齢も30過ぎ位ではないでしょうか？ ジョギングから始めて一年後にレースに出場という人をはじめ、新しく自分の趣味として開拓した人が圧倒的のようです。

得手不得手、好き嫌いは人それぞれです。トリアスロンはちよつと極端にしても、自分に納得の行くものを求める強い意欲が、今後もさまざまな新しい余暇スタイルを生み出して行き一方で廃れるものと定着するものの選別もより進んで行くと思われまます。

一ヶ月程度の休暇をとり、リゾートでのんびりと過ごすフランス人の生活を別世界のように思う人も多いでしょうが、これもフランスにおける半世紀以上の地道な政策が産み出した、と言われています。日本でもじっくり気長に取り組めば、21世紀の心豊かなライフスタイルは間違いなく実現されます。それまで体力を蓄えておくことが得策でしょう。

21世紀のグランドデザイナー

建設産業

山崎裕司

(株)システムズ代表取締役

明日は、今日よりも良くあってほしい。未来は現在よりも、二一世紀は二〇世紀よりも良くあってほしいと願う。世界で一番に裕福だと言われながら、本当にそうなのかと疑いたくなる日本の現状。

小さな家、狭い道路、緑のない街並み。いまのままではダメだとマスコミは主張する。たしかにそうだろう。しかし、ではどうあれば良いのか。

私たちはいま、混迷の時代に生きているようだ。現状は否定するけれども、しかしあるべき姿がまだ見えない。

どんな二一世紀が来れば、私たちは満足するのだろうか。その二一世紀のイメージは、万人の目に明らかに見えているのだろうか。いや何人かでもいい。誰かの目には、求めるべき二一世紀の日本のイメージは見えるほどに明らかになっているのだろうか。

時代は人が造り出すものである。何かを造り出すためにはイメージが必要である。想像を基礎に置かない創造はあり得ない。なりゆきに任せ、ただ待つうちに、理想的な未来が来ることはない。

だから、いま私たちに求められているのは、望ましい二一世紀のイメージ・グランド・デザイナーである。こんな二一世紀なら素晴らしいと、

心の底から感じることでできるイメージ、それも目に見えるほどに明らかなのが求められている。

では、それを創りあげていくのは誰なのだろうか。政治家なのか、役人なのか、マスコミなのか、あるいはまた世論という得体の知れない存在なのであろうか。

ここで建設産業とは何かを考えたい。建設産業が社会に提供する商品とは何であろうか。自動車産業は自動車を、家電産業はテレビやビデオやクーラーなどの家電製品を提供する。しかし建設産業は建設製品を提供するわけではない。提供しているのは建設行為である。建設行為を通じて、ダムを作り、そして家をビルを造りあげてきた。

人が生活するために基本的に不可欠となる全てのものを、建設という行為を通じて提供してきた産業、それが建設産業である。

人跡未踏の荒野を想像していただきたい。その地に人が住もうとしている。まず雑木を切り倒し、道を通し、整地を行い、家を建てる。畑地を開き、そして豊かになるにつれて、ダムを作って電気を通し、飛行場が築かれていく。集落が町になり、都会になって、ビルが林立するようになる。

こうした一連の活動は、全て建設産業による。私たち建設産業が提供してきたのは、ほんの

少しだけ見方を変えれば、「生活」そのものはなかったか。

その時代、時代にあった、最善の生活を提供する産業、それが建設なのではなからうか。

生活創造産業、それが建設産業である。その産業が、二一世紀の生活に対して、グラント・デザインを提供しないならば、それは役割、あるいは使命の放棄であらう。

だからこそ提言したい。
政治家、役人、マスコミ、etc、そんなものに期待する必要はない。

私たち建設産業が二一世紀のグラント・デザイナーになることだ。

全国展開の大企業は日本全体の、あるいは地球全体の未来をデザインする。地方の企業は地方の未来をデザインする。町の工務店はその町の未来をと、それぞれの規模や立場にわせて、二一世紀を描いてく。

考えてみれば、建設産業と社会との結びつきはひじょうに大きなものがある。地域での政治も経済も、建設産業抜きには語れない。選挙となると仕事を手につかなくなる建設経営者は数多いはずである。

国家レベルで見ても、GNPの二〇%を占める巨大産業である。二兆円企業が何社も存在する一大産業、技術力もあり、他産業を巻き込む力、何兆円ものスーパープロジェクトを推進す

るマネジメント能力も高い。この産業がグラント・デザイナーとして名乗りをあげずに、誰が二一世紀を幸せな未来へと導いてくれるのであらうか。

さて、では現状はどうなのか。
超大手を中心に、未来の巨大建築や地下構造、あるいは砂漠緑化やスペース開発のイメージ・イラストが数多く発表されてきた。月刊誌「ニュートン」などに特集され、多くの人々の目を引いている。

地方では建設二世を中心に、若き建設経営者の集まり（各地の二世会や青年会の動き）が盛んである。近くに迫る自分たちの時代を予感し、また現状への否定が彼らを動かしているようだ。双方ともに、新しいものを作り出そうという力強いエネルギーを感じさせる。

しかし、問題は生活、人間の生き方、個々人の幸せ、なにかそうしたものか不足していないだろうか。

経営指導をしていていつも感じるのだが、「私はこうしたい」「自分はこうありたい」といった強い思いを明確に持った経営者、あるいは二世があまりにも少ない。

その視点で日本人全体を見てみると、こうした願望を明確に持っている人がほとんど見当たらない。

なんとなく幸せになりたい、なんとなく豊かになりたい、そうしたあいまいな願望しか持たない人が多い。自分自身の中に、力強い幸福感、未来への願望がなくて、それで幸せな未来を描けるものであらうか。

そこでふたつめの提言である。
まず自分軸を明確にすること。どうなりたのか、どうありたいのか。それが全ての出发点であるはずだ。

産業全体としてのグラント・デザイナーとしての自覚、その上での自分軸探し。

六〇〇万人の建設マンが、全国津々浦々で、自分の幸せ、自分の未来、自分のありたい姿を議論しはじめ。

五〇万社の建設各社が、それぞれの地域で、こんな町がいい、こんな日本がいい、こんな地球がいいと主張しはじめ。

議論・主張がぶつかりあって、そこかしこに小さなうねりが生まれる。何年かのうちにはうねりがひとつになり、大きなうねりとなって、そして二一世紀の日本のグラント・デザインが誕生する。

自ら作り出したグラント・デザインを、自らの力で現実化していく力強い産業、そこそが、二一世紀のリーディング・インダストリー「建設」の姿なのではなからうか。

ケスク・チュ・ヴ?

フロランス・メルメ・小川

明治大学 専任講師

「豪華な空っぽの宝石箱」

私は空っぽの宝石箱は要らない。それがどんなに豪華なものだったとしても。

空っぽの金庫よりは、金庫の内に入れるものが誰だって欲しさに決まっている——と欲していたのですが、日本の現実を見ると、そうでもないのかなと疑問に思うことがあるのです。

家が欲しいのか、家庭が欲しいのか。

すばらしい家が欲しいのか、すばらしい家族生活が欲しいのか。

仕事に欲しいのか、生活の糧に欲しいのか。

遣甲斐のある仕事に欲しいのか、満足のゆく生活の糧に欲しいのか。

休日に欲しいのか、休養に欲しいのか。

豪勢な休暇を過したいのか、充分な休養がとりたいのか——一体、どちらなのでしょう。

去年、日本の友人とパリの蚤の市へ行った時のことですが、友人はアールヌーヴォーの花瓶を買ったのですが、それが本物が贋作なのか価値あるものなのかどうか迷いに迷った末買いませんでした。

就職活動に忙しくて、余り講義に出て来ない学生と話をすると、ウンザリするくらい皆、同じ返答をします。

私は友人に、学生に「ケスクチュヴ? 何が欲しいの? 本当は何がしたいの?」と問うので

す。なぜか彼や彼女らの話を聞いていると、宝石よりも先に、宝石箱を欲しがっているように思えるのです。

ガラスの花瓶は投資の対象でも見栄の手段でもなく、窓辺に置きましよう。アガパンサスの花を活けたらステキだろうな——と欲して、花瓶は買うものだと思うのです。ですからガレやドームであろうとなかろうと、そんな事はどうでも良いのです。

家、仕事、休暇、などを考える時、金庫ではなく、その中味が大切(欲しい)と思えば、本来あるべき姿が、本来に欲しいものが見えてくると思うのですが。

「本来はそうかも知れないけど現実……」と反論する心に対して「ケスクチュヴ?」と再度尋ねてみるのも良いのではないのでしょうか。

「本来、本物、本質、本当、本音」

本当に愛する家族と共に、本物の人生を生きていきたい。その為には、生活の場としての家や町は、本来果たすべき機能を有す家や町に暮らしたい。これは私の本音です。

町が果たすべき本来の機能、町の本質、本物の町とは——。家が果たすべき本来の機能、本質、リゾートの本質等々、本来、本物、本質、本当の何々は?と本音で問題に迫ってみると、本当に欲しいものが見えて参ります。

本当に欲しいモノと書きましたが、本当はモノではなく本当に欲しいコト、本質的なコトが見えて来るはずですよ。

もうそろそろ私たちは、モノからコトへと物事の発想を変えてみるべき所に来ているのです。モノが豊かなのではなく、コトが豊かな家、町休暇であって欲しいのです。

モノの本質はコトにあります。コトに拘りつづけると自ら本物を獲得することになるので。「……だけが取柄。よくやってくれますよ」

「空気が良く子供には最高です。近くをお通りの際は是非お立ち寄り下さい」と書かれた引越案内をもらうと『こんな所行く機会ないな』空気が良いのだけが取柄なのかしら？』と、すぐ思う私は、意地が悪いのかしら。それとも僻んでいるのかしら。

『ご主人の通勤大変でしょ？』

「ええ、よくやってくれますよ」と事も無げに言われると『あなたに出来る？』と問い詰めたくなってくるのは嫌味かしら。

「○○へ行って来たの、○○を見て、それから○○も見、ついだから○○を見、折角○○まで来たんだから○○をして、○○を食べて、それから思い切って○○を買って、それから——」それから○○しそれから○○と、延々とそれから続く話を聞いていると、『よくそんな

に長い休暇がとれたわね。ホテルだけでも大変だったでしょ』と他人の財布のことやら、会社のことやらが心配になるけれど、彼女は私にちやんと安心させてくれる。「3泊4日、丸々楽しんで来たの」と。超人的超過密スケジュールをどうやって消化出来たのかしらと、私に感動と謎をも、彼女は与えてくれる。

クタク／＼に草臥れ呆れ諦め苦しみしめてるご主人、アレヨ／＼と何が何かわらず、フテクサレ、叱られ、せきたてられる子供たちを想像するのは、嫌味かしら。そんな旅行から帰って

「痩せ我慢のすすめ」

家族の内の誰ひとりとして犠牲にならない家。国民の誰ひとりとして犠牲にならない国家が無理ならば、全員が等しく犠牲になった方が良いとはきつと誰も思わない。

ただ誰もが、ほんの少しの我慢出来るコトなら可能なように思えるのですが。

通勤時間二時間は我慢の限度を越えていると家族四人2DKは我慢の限度を越えていると感じないのかしら。せめて通勤時間一時間、3LDK……これなら誰もが我慢出来ると云うようなモノ・コトはあるように思うのですが。女（妻）にとっても、男（良人）にとっても、子供にとっても父母にとっても、休養、安らぎ、

来て「ああ我家が一番だ」と言うご主人の言葉を、本心と信じ、愛の言葉と感じているとしたら、彼女ほど幸せな人間は居ないでしょう、と思うのは私の僻みでしょうか。

愛する誰かの犠牲と、我慢の上に成り立った家なら、休暇なら、私は要らない。と言えば痩せ我慢だと思われるかしら。

それが痩せ我慢だとしても、家族のことを思えば、私は敢てその痩せ我慢をしたいと思いません。これ私の本音。

寛ぎ、生甲斐、交感（交歓）のない家や町や仕事や休暇は、空っぽの宝石箱、あるいはガラクタの詰まった宝石箱のように滑稽で醜悪です。何よりも余りにも淋しすぎる。

各人が、その各々の人生が、本当に大切なコトやモノを大切に出来るようにする為に、家も町も仕事もリゾートも国も存在するのですから、大切なコトを大切に出来る条件（物事）が一等欲しい。

欲しいと言えは手に入るのかしら？

いつまで我慢はつづくのかしら？

私はただ空っぽの宝石箱は欲しくない。

「○○だけが取柄として」式の納めは欲しくない。そうは言っても私の我慢にも程がある。欲しいのはたった二・三のコトだけなのに——。ホント。

「ゆたかさ」の新しい地平へ

木 下 修

流通産業研究所主任研究員

豊かさのあとにくるもの——それは繁栄のあとに訪れる没落、恐慌、破滅などのカタストロフィーか、それとも現在の豊かさとは別のより高度化した、あるいはデイクンストラクティブな（脱構築的）豊かさだろうか。

●万物流転

「万物流転」「生者必滅」などという箴言は、生成流転する常なきこの世のさまを語ったものであり、たとえ栄耀栄華を極めようとも必ず没落が訪れるという真理を説いたものである。

シュペンゲラーは各々の文明には誕生・成長・衰亡・死があるとして、それを春・夏・秋・冬の四季に譬え、ヨーロッパ文明の終末を予言したが、トインビーも文明の発生・成長・挫折・解体という段階説をとっている。

企業についても同じことが言える。「いまだ超優良企業と呼べるような企業は一つもない」という書き出しで始まる『経営革命』の著者は、何と『エクセレント・カンパニー』の著者ピーターズその人である。彼はウォーターマンと共にアメリカ企業の過去二五年間のデータを詳細に調査分析し面談調査した結果、六二社を超優良企業として選び出し、その成功と繁栄を礼賛したが、何と五年後にはその全面否定の本を出さざるをえなかったのである。この本に登場した超優良企業の中の相当数は、変化する環境に対応できずにその座から脱落し、あるいはM&Aされてしまっていたのである。

●数字は豊かさを示しているけれども

日本はいまや経済面では欧米先進諸国と肩を並べ、フロー面で世界のGNPに占める日本のシェアは一五%を越え、国家予算、GDP、貿易黒字、ODAなどどれをとっても、「経済大国」に相応しい膨大な数字になっている。そして日本の輝かしい繁栄が二一世紀初頭まで続くだろうというエコノミストたちの樂觀論が多いけれども、本当にそうなるという保証は何もない。

世界一の「債権大国」日本が国債残高を一七四兆円もかかえ、一方で貿易黒字にたいする国際的な非難にも対処していかなければならず、将来は必ずしも樂觀視できない。

●遅すぎた「生活大国五か年計画」

経済審議会は六月二五日宮沢首相に「生活大国五か年計画」を答申した。タイトルは「生活大国」と華々しい。豊かさゆとりが実感でき、多様な価値観が実現できる機会と、美しい生活環境の下で簡素なライフスタイルが確立された「生活大国」への前進を謳っている。

しかし、年間総労働時間一八〇〇時間の達成、週四〇時間労働への早期移行、大都市圏で年収の五倍程度で良質な住宅の取得、東京圏の鉄道混雑率を一八〇%程度にする（この一八〇%という数字は「誤植」かと思った）、なども「目標」として掲げられており、日本の経済発展の影で国民の生活が長い間犠牲を強いられてきたことを、この答申は皮肉にも証明している。

「生活大国」という晴れやかなタイトルを掲げた答申内容は、「経済大国」としては禁欲的で慎ましく、何をいまさらこの程度のものをという感じはぬぐえないし、具体策はどうなっているのかという疑問も出てくる。この答申は、国民のための社会資本整備をもっとすべきだと内外から批判されてきたことへの遅すぎた回答に他ならない。決して達成困難ではないこの目標が、「画餅」に終わらぬよう、積極的に推進してほしいものである。

●日本型経済システムの功罪

日本に繁栄をもたらした要素の一つに日本型経済システムがある。しかしそれが現在、国際的にも国内からも批判に曝されているのである。日本は企業本位社会だと言われるように、日本人は個人を犠牲にし、家庭を犠牲にしてまで、会社のために尽くしてきた。その結果が欧米から嘲笑されるような、「貧しい個人」「豊かな企業」というギャップ、すなわち「生活小国」という貧困な現実でしかないとしたら、それは何をかいわんやである。

社内留保された利益が、株主、労働者へ適正に配分されないことも日本の経営の特徴である。バブルの発生で露呈したように、企業は利益至上主義で利潤追求を自己目的化しており、いまや企業は何のために存在するのかという問いのもとに、その枠組が厳しく問い直されなければならない。

「豊かな個人」の実現のためには、まず労働分配率を高め、労働時間を短縮しなければならぬことは言うまでもない。日本の労働組合は労使協調路線を続けているが、この「豊かな個人」という目標に向けて、大いにカウンタベイリングパワーを発揮すべきであろう。日本型企業システムが変革されなければ、いくら豊かさについて論じても効果はなく、それは他人の物語、見果てぬ夢としての豊かさでしかない。

●何のための豊かさ

モノが氾濫し、世界の高級ブランドであれ何であれ入手できる快適な消費社会が到来した。いまや労働・勤勉・貯蓄は必ずしも善ではなくなり、余暇・遊び・消費が推奨され、拝金主義者やHanako、Yonosukeたちが喜々として闊歩する、快樂遊戯奢侈三昧の時代が到来した。低俗凡庸のおもしろ主義、スキャンダリズム、快樂主義が横行する中で、大衆の欲望はつねに刺激され、肥大化し、開放されつぱなしになっている。モノも情報も快適な祝祭空間も氾濫しているために、かえって想像力や欲望の弾力性が減退し、そのためにさらに新しい強い刺激が求められている。

マーケット、知識人、評論家などの口舌の徒や詭弁家やデマゴグなどいわゆる諸子百家・ソフィストたちが跳梁跋扈し、世の中はますます浮薄で騒々しくなってきた。大衆をリードすべき政治家やマスメディアは、理念も使命

感ももたないご都合主義・迎合主義に陥っており、衆愚政治の上に爛熟したビジネス文明の花が咲いている。——実は二〇世紀の世紀末に、世界の政治経済の微妙な危ういバランスの上に咲いている徒花、それが日本の平和と繁栄の姿ではないだろうか。

●アンテ・フェストウム型の日本人

戦後日本は、木村敏氏の表現を借りて言えば、「アンテ・フェストウム」的にひたすら前進してきたのである。（ラテン語の「アンテ」は「前に」、「イントラ」は「内で」、「ポスト」は「後に」、そして「フェストウム」は「祭日・祝祭」のこと。）日本はこれまで「アンテ・フェストウム」的に、「現在」を空しくしてでも「未来」に賭け、彼方にあるはずの豊さを求めて驚進してきたのである。

「イントラ・フェストウム」とは、祭りのさなかにいること、すなわち「祝祭」の喜びや「永遠の現在の現前」を「アウラ」として享受することである。「現在」という時間の中には「デオニユソスの陶酔」や「アウラ」の悦びがあるはずだけれども、日本人にはその実感が無い。むしろ「ポスト・フェストウム」（祭りの後、後の祭り）的な意識で「現在」と「過去」を眺めていると言える。「イントラ・フェストウム」の享受者たちがいるとすれば、それはHanakoやYonosukeたちではないだろうか。

●日本はモンゴル帝国の末裔か

歴史的に見ると、政治経済的に繁栄した国は、いずれも壮大華麗な文化・文明を遺している。

例えば古代ギリシアはその輝かしき繁栄のなかで、今日の民主政治の原型をつくり、典雅な建築物や劇場、のびやかで美しい彫刻、深遠なる叙事詩や悲劇等の文化芸術を生み出し、精神世界においてはソクラテス、プラトン、アリストテレスといった超弩級の哲学者を輩出した。

その文化的影響は古代ローマ、ルネサンス、近世ヨーロッパのみならず遙か現代にまで脈々と続いている。後世のひとびとは政治、文学、芸術、哲学において常にギリシアを意識せざるをえないほど、古代ギリシア文化は普遍的かつ卓越したものであった。

一方、世界制覇は達成したものの、ほとんど見るべき文化的遺産を遺さなかったモンゴル帝国のような例外的なケースも、世界史上ないわけではない。はたして日本はこの繁栄の中から何を創りだし、いかなるよき贈り物を後世に遺すことができるのだろうか。

● 「モノからココロへ」論の陥穽

「モノの豊かさからココロの豊かさへ」「モノの豊かさからコトの豊かさへ」「モノの時代から文化の時代へ」というキャッチフレーズが流行っている。しかしこの二分法、二項対立的構図はミスリーディングだと言いたい。モノへの問いはいつの間にかコトへの問いに変わり、コトへの問いはモノへの問いに転換し、それ自

体で独立に論ずることができないのがこの問題の特徴である。

「モノの豊かさからココロの豊かさへ」というテーゼには、次のような解釈が可能であろう。第一は、モノレベルの豊かさは達成できたので、次はココロレベルということ。第二は、モノレベルで豊かになったとはいふものの、欧米先進諸国と比較すると、社会資本、生活関連資本などの基本的な面で到底追いつくことはできないので、せめてココロの豊かさを、という図式。第三は、ココロが優先すべきであり、ココロを犠牲にしてまでモノを追求すべきではないという立場。このうち今流行っているのは第一のタイプである。彼らは「モノの豊かさからココロの豊かさへ」とは言うけれど、「貧しい個人」「豊かな企業」という現実をどう見ているのだろうか。また、「衣食足りて礼節を知る」のように、モノの後にココロの地平はおのずから披けてくるとでもいうのだろうか。

簡単に「ココロの豊かさ」と言うけれども、その意味するところは何であろうか。「モノの豊かさ」のイメージは誰にでも共通するが、「ココロ」の方はそうはいかない。「ココロ」という言葉を我々は自明のこととして使用しているが、それが何であるかについては分かっている。それは、意識と無意識の両方を含んだ私世界全体、私の言語世界、あるいは私の出発点でありかつ究極の世界、自己の根拠そのものと言

うことができるかもしれない。「ココロ」の豊かな人とは、人格円満で悠々としており、寛大で親切で、教養があり、趣味があることなどがあげられるかもしれない。しかし、ココロの世界は自己にとって揺るぎない絶対的なものだとし、でも、それは他者にとってはある程度までしか理解できないものである。

ところで、古来宗教家たちは、幸せになるためには、まず持っているモノを捨てよ、と説いてきた。モノへの執着は無論のこと、ココロの世界も放下せよと説く立場もある程である。

いかなる立場に身を置くかはさておき、モノレベルの豊かさだけでなく、ココロの問題をもっと突っ込んで考えるべきであろう。

消費における自己発見論、自己表現論、あるいは浪費は文化のパロメーターなどという消費礼賛論や消費美学が盛んであるが、一方で、モノがそこにどのように存在していることの意味、モノが潤沢にあることの有難さ、本物志向などの質志向とは別の次元での、モノそのものが持っている本来の味をじっくり楽しむことに、もっと目を向けるべきであろう。

● 魂の快樂について

ココロの豊かさの一面面として、魂の快樂について触れてみたい。エピキュロスは一般に官能的物質主義的快樂主義者（エピキュリアン）の元祖とみなされ、禁欲主義で精神主義的なストア派のゼノンと対極に置かれて語られること

が多い。しかしそれは誤解であり、彼の快樂説は、実は放蕩の官能的なものではなく、「アタラクシア」（ココロの平静不動なる状態）を目指すものであり、そのプロセスも到達点もストア派のそれとほとんど同じである。

プラトニック・ラブとは肉体的交わりのない純粹な精神的な恋愛のことを言うが、これもある意味でプラトンを誤解したものである。彼の哲学に沿って言うならば、美しいものを求めてさまざまな愛の遍歴を続け、甘美な悦びを経験してきたが、真の意味でココロは満足することができなかった。美しいモノを美しくあらしめている美それ自体、すなわち美のイデアに恋い焦がれ、それを追い求めるようになること、これがプラトニック・ラブの真意であろう。

ココロの豊かさの問題は、まさに幸福観、人生観、世界観の問題でもあるといえる。

●「豊」は「ゆたか」ではない
奇妙なことではあるが、「豊」は「ゆたか」ではないらしい。現在我々が使っている漢字の「豊」の語源を調べていくと、「豊」にはもともと豊かさの意味はなく、それに相当する語は別であることが分かってくる。

「豊」は実は醴トの本字であり、「神前の供物の形を象る。豆は祭器。曲は之に供物を盛りし形なり。後更に示扁を加え禮と書く。豊は俗に豊の略字として用いる」(『大字典』上田万年他)、「あまぎけを盛るたかつきの象形で、礼をとり行

なうときのたかつきの意を表わす」(『広漢和辞典』諸橋・鎌田・米山、『大漢和辞典』諸橋)とある。もともと「豊かさ」の意味はなかったのである。

現代我々が使っている「豊かさ」に相当する漢字は、実は「豊」だったのである。「豊」は、「豆トに似て豆より大なる一種の禮器。盛物の多く満ちたるもの、文字はその形を象る。転じてユタカ・盛ナリ・多シ等の義としてまた五穀の善く熟する義にもいう。一説に丰は音符なりともいう。豊は別」(『大字典』同前)とされる。なお加藤常賢氏は「豊」と「豊」の甲骨文、金文が同じであると見ていることを付記しておく。

ここで注意すべきことは、「豊」はモノレベルの豊かさのみを意味し、ココロのそれを意味しないことである。ゆたかさを表わす漢字は、「裕」「豊」「優」「饒」「寛」「胖」であるが、そのうち「裕」「優」「寛」はココロのゆたかさを意味する。なお現代中国語には「豊」の字は存在せず、繁体字「豐」(feng)、簡体字「丰」が使用されている。

●大和言葉「ゆたか」の射程
大和言葉の「ゆた」は、空間や気持ちに余裕があつてゆつたりしているさま、ゆつたりと落ちていたさま、を意味する。

「ゆたか」「ゆたけし」には、第一は、豊富なこと、裕福なさま、満ち足りていて不足がないというモノのゆたかさの面がある。第二は、広々と余裕のあるさま、人の心や態度などに余

裕があつておおようであるさま、心が広く安らかであるさま、のんびりとして屈託のないさま、豊満で美しいさまなどというココロのゆたかさの意味がある。すなわちモノとココロの両方のゆたかさがあるとされている(『日本国語大辞典』小学館、『古語辞典』岩波書店)。

なお白川静氏は、《「ゆたか」は「ゆた」と同根。「ゆた」に状態を示す「か」をそえた語。ゆつたりとして余裕のあるさまから、豊富の意となる。『万葉集』では海の状態や、心の思いをいうことが多い。国語の「ゆた」は「寛」に近く、「ゆたか」には寛と豊の両義が含まれている》(『字訓』平凡社)としている。

このように見てくると、大和言葉「ゆたか」の射程の広さに改めて感心せざるをえない。豊かさのあとにくるべきもの——それは漢語「豊」ではなく、大和言葉「ゆたか」という、もう一つの脱構築的な豊かさの地平である。

漢字の「豊」を使うとき、すでにそれはモノレベルしか意味していない。ココロとモノの両方の意味を持つ美しい響きの大和言葉の「ゆたか」が、本来的な意味で実現されるべきであろう。アナクロニズムと言われようとも私は、久しく忘却されていた大和言葉「ゆたか」の復権をあえて唱えざるをえない。

都市実験の時代

～都市のありかたが真剣に問われ始めている～

檜 貢

本当にほしいものがわからない

このところ、豊かさを実感できるまちづくりについて論議する機会に接することが多くなつた。それは、社会全体が豊かになっていると言われているほどには、人々の生活や地域が豊かなものになっていないという認識が一般化しているためであろう。とくに、一、二年前までのパブル景気の時には、何億円もする絵画の購入など企業等の貴族趣味的豊かさが、庶民の生活とは遊離して、謳歌されていたのだから、その実感も各層に幅広く存在していたにちがいない。

だが、豊かさが社会的テーマとして論議されなければならぬほどに住民の生活が貧しいのかといえば、そうでもなさそうである。また、地域や都市環境については、最近では水辺や生活道路等の景観整備が推進されるなど、見た目にはきれいで清潔な町が多くなっていることも事実である。

豊かさどころか、「地域の課題が明確ではないことが課題だ」という声さえ各地で聞かれるようになってきているのだ。この声は、地域の状況に決して満足しているわけではないが、問題の焦点が形成されるほどの不満もないために、結果的に地域整備の方向性が発見できないというわけだから、ぜいたくな悩みだとも言えそうである。

ところで、この二つの認識が生じているのは、

実は最近の都市や地域にとっての本当に必要なもの、欲しいものがつかめなくなっているからではないだろうか。かつては、都市の諸問題に関して客観的側面から必要なものが提示されたし、また、そうされることで都市づくりや地域づくりの方向も認識することができたのである。つまり、絶対的に整備しなければならぬ課題や条件が目白押しに存在しているために、必要なものや欲しいものをとりたてて言い出す状況になかったわけである。わが国の都市づくりにおいてはこの経験が大きいために、都市住民自身が見つけ出すルールや習慣を育ててきていないし、よしんば、それを見つけてきたとしても現実にもすびつていく諸条件もつくられていないようである。

昭和五〇年代の後半になって、各地でイベントやCI活動が実施されるようになったのは、ソフト化社会の要請によるところが大きいけれども同時に、それをテコに新たな自発的かつ自立的な都市づくりへ歩みを進めようとするものでもあった。

教科書が欲しい

わが国において、新しい都市づくりの段階に入ったのは、ポスト経済開発の都市づくりを目指すようになってからだといつてよいのではないかと思う。

それまでの都市づくりを一言でいえば、公共

投資主導による経済開発型の都市づくりであり、その内容もヒト、モノ、カネ、情報が効率良く動くように整備・仕組むことであり、都市や地域そのものの成長拡大を指向することであった。そして、このタイプの都市づくりは昭和三〇年代から様々な都市モデルが省庁等から提示され、今日まで続けられてきたのである。

古くは工業開発のモデルとしての産業都市圏（昭和三十一年、建設省）、地方開発基幹都市（昭和三五年、自治省）、新産業都市（昭和三七年、複数省庁）があるし、比較的最近では、テクノポリス（昭和五八年、通産省）、リゾート整備（昭和六二年、複数省庁）、頭脳立地（昭和六三年、複数省庁）、拠点都市（平成四年、複数省庁）などにみられるように、情報技術、余暇開発、研究開発、事務所（オフィス）立地等をキーにした経済開発型の都市モデルが提示されている。

これらの都市モデルは、すべてがそれぞれの時代の先端的要素をもっていたことやその推進上において一定の優遇措置が用意されていたからであろう。どの場合においても全国的に誘致競争が繰り広げられてきた。だが、これまで省庁提示の都市モデルを受け入れて成功したという話をほとんど聞いていない。

ただ、都市モデルの内容は現代に近づくにつれて、少しずつ変わってきており、最近では地域の個性を大切にすることが多くなってきている。おそらくその分だけ、本当に欲しいモデル

を中央側は提示し得なくなっているのではある。

その一方で、最近では生活指標による住みよさのランキングがブームの様相をみせている。昨年の夏あたりから都道府県別の住みよさのランキングがシンクタンクや官庁等から発表されている。そこでは指標のとり方等に批判があるものの、ブームは現在も続いているようで、去る五月にも生活の豊かさを示す新しい指標を経済企画庁が発表している。これは住む、費やす、働く、育てる、学ぶ、癒す、遊ぶ、交わるの八領域を一五三の指標でとらえたもので、北陸地方が一位となっている。このランキングブームは序列をつくることの好きな国民性を表しているともいえるが、本当の住みよさを求める時代背景をみせているのだともいえよう。

また、政策を新たに開発することを目指して、指標を検討したり、アイデアを集める動きも目立ち始めている。たとえば、建設省は社会資本整備をより一層推進するために、高速道路の出入り口に一時間以内で到達できる人口の割合やどこにいても二五〇メートル以内で児童公園があるように整備された市街地の割合等のキメの細かい計画指標をつくり始めている。また、一般道路にも高速道路のパーキングエリアのような機能を整備して、そこを「道の駅」と位置づけて周辺地域との交流拠点をづくり出す事業を研究するための学識者の集まりを作るといった動きも注目される。

これらの動きは先頃、経済審議会が答申を出した新経済五ヶ年計画の生活大国化につながるものであろうけれども、それによって都市の人々が本当に欲しいものを理解し得るかといえば、そうではなく、今のところはただ生活の名を借りた経済寄りの内需拡大イメージが伝わってくるだけである。

リゾート開発の落とし穴

ところで、最近リゾート法の重点整備地区の指定を受けながらもその開発が暗礁に乗り上げている例が増えているようだ。この地域指定も省庁による都市モデルであり、リゾート法の成立前後から全国的に指定競争が繰り広げられたものである。

たしかに、指定競争の当時から、長期滞在型の集客機能を備える新しい都市開発のあり方等のリゾート都市開発について認識の不十分さが指摘されていた。また、当時は東京都心で発病した土地熱病の伝染時期でもあったために、この開発への過剰流動資金の流入も心配されていたのである。

最近のバブル景気の破綻等は、まだ途中の段階にあった、リゾート都市開発を襲ったようだが。最近の新聞によれば、リゾート法に基づいて指定を受けた開発で、計画の一部を中止もしくは規模縮小等に追い込まれている道県は二十三にも達しているといわれている（平成四年五月二

十二日、朝日新聞朝刊)。そこでは、進出予定企業の撤退、環境破壊を理由にした反対運動、自然保護運動の発生等が規模縮小等の理由に上げられている。

そもそもこのリゾート都市開発は、国民のアウトドアライフ等のライフスタイルの未成熟な段階において、始まったものである。それなのに経済的要因の内需拡大の要請を具体化することに急なあまり、そこに施設を先行投入して開発の成果を得るといふ姿勢をとったのである。まさに、水道の蛇口を設ければ水が使われるという発想がとられたのであった。

この発想は基礎的社會資本が絶対的に不足していた時代には通用したが、リゾートのようにそれを活用するライフスタイルやソフトと施設が同時に存在しなければならぬもの場合には、このやり方は結果的にイメージ過剰になってしまうことになろう。

地域開発としてのハウステンボス

同じくリゾート法の指定を受けた都市整備でも、よい立ち上がりを見せているものもある。それは長崎オランダ村やハウステンボスを対象地域にするナガサキ・エキゾチック・リゾートである。

このリゾート逆風の下で、その最大拠点のハウステンボスは本年の三月に第一期の工区の完成を機会にオープンした。わたくしは佐世保市

に誕生したこの新都市をこれまで二度にわたって視察したので、その感想を述べておきたい。

この新都市の景観は、オランダ都市の移植を宣言しているように、日本ではなく欧州の都市そのもので、水を生かした煉瓦づくりの建築物群のスカイラインを見せていて美しい。この都市が徹底的な人工の都市なのだから当然なのかもしれないとしても、統一された景観、歩行者に優しい道路、見えない役所(行政)を実感させられて、現実の都市においてはなかなか達成できない課題がここでは「こうも簡単に実現されている」という思いにかられてしまった。

また、この都市は批判をむけにくい。それはこの都市を批判すれば、逆にこの都市が「君はそれほどの者か」と、その人に対して都市経験やライフスタイルを問い返してくるようだからである。さらにまた、この都市を後にして現実の都市に戻って感じたことだが、その周辺においての駐車違反をとがめる警察の音や景観の不統一さ等は理想と現実間の差の大きさである。

やはり、この刺激的な実験都市はわが国の西境にあつてちよūdよく、たとえば東京人には精神衛生上悪いものといえよう。

もう一つだけ最後に付け加えておきたいのは佐世保市民の態度である。二度の視察とも入客状況はあまりよくなかったのであるが、口を開けば宣伝であり、悪い状況に関しては口を開かない。思えば、この二〇年余構造的不況に喘い

できた佐世保市にとって、ハウステンボスはまさに戦後最大の地域開発であつて、これが成功に到るまでじつと耐えていこうとする市民の姿に地域開発の本質を見た思いがした。

ともかく、実験都市から都市未来への示唆をこれからも期待したいものである。

東京フロンティアの焦点

最後に東京フロンティアについて触れておこう。東京フロンティアについては、すでにこの連載で取り上げたことがあるので、詳細はそれに譲るが、これから四年後の平成八年に二〇四日の会期でレポートタウン予定地の東京湾臨海部を中心に開催されることが決まった。テーマは「都市づくり」そのものであつて、わが国のザ都市の座を長い間独占してきた東京にふさわしいものといえるけれども、教科書なき都市づくりの時代にあつて、その展開方向に注目が集まっているわけである。

その準備段階では、あらためて実験すべき都市のテーマの模索から始まっている。二一世紀の都市は現在の活動の延長線上に位置しているのだろうか、それとも新しいパラダイムの獲得が必要なのか、また、都市づくりの方法はどうなっていくのか等の検討が始まっている。

二〇世紀末になつて、ようやくわが国で本格的な都市実験が始まりそうである。

(日本都市センター主任研究員)

小平市民への感謝のつどい

後援/建設省建設大学校・小平市



未来へつなげたい —ファッションと感性—

コシノ・ジュンコ

——平成四年六月六日、(財)全国建設研修センターの創立三〇周年を記念して「小平市民への感謝のつどい」が、小平市福祉会館市民ホールにおいて、盛況のうちに開催されました。まず、主催者を代表して上條勝久理事長からの挨拶では、日ごろより当センターへの理解と協力をいただいている小平市民の方々に感謝の意を表し、この「感謝のつどい」を開催させていただくことの喜びを述べた次第です。

「未来へつなげたい—ファッションと感性—」と題したコシノジュンコ氏の講演は、スライド二台を駆使し、山崎建設の斬新なユニフォーム、パレーボールや卓球のユニフォーム、そして赤と黒を基調としたコシノデザインに、来場者は身を乗り出さんばかり。特に3K、6Kと呼ばれた建設企業のユニフォームをデザインする際、自然を相手の仕事だからより大胆に、よりファッションナブルにという逆発想こそ、世界のコシノの面目躍如といったところでしょいか。

最後に、「未来は、次から次とやってくる。二二世紀を迎えるにあたってビジョンが必要」という観点から、独自の基本コンセプト「アー・フチュール」を提唱されました。

そこで今回、その中から、建設企業のユニフォームをデザインされたときのお話を、当誌面にて掲載させて頂くことになりました。以下に要約して紹介させていただきます。

(編集部)

「本来、ファッションとは洋服という意味ではないんですね。もともとは流行とかはやりということで、それがいつの間にか、移り変わりの早い洋服がファッションになってしまったというわけです。たとえば映画の〇〇が流行ったりとか、それぞれの世界にはやりということがあるもので、洋服の中でもそれぞれのいろいろな職業のはやり、つまりファッションがあります。

山崎建設といういわゆるハード系の会社があります。数年前、そこからユニフォームをつくってほしいということがありました。私もユニフォームの仕事は大変に多くしておりますけれども、建設関係のものは初めてで、初めてということとは私にとっても革命的なことなんですけれども、逆に私の中に予備知識とか偏見がないわけです。また当時、建設業に対して3Kとか言われていた意味でも、おそらく縁がなかった関係だと思えます。そういう時こそ、実はぜひやってみようということとその仕事をやりました。

一般的に建設の仕事というのは大変にハードで、まして女性がそういう仕事に携わるなんていうのは、おそらく昔は考えられないというか、縁がなかったと思うんです。ユニフォームの「ユニ」は一つということ、つまり一つになるという意味なんです。たくさんの人たちが一つになって仕事をするということですね。するとチームワークが重要になってくるんですが、特に

山などの大自然を相手にしたり、大きな建設機械を運転したりといったハードの中で、人間というのは大変弱いものです。山のなかで人間がぼつんと立ちますと、点に等しいくらいの存在だと思わんです。都会よりも山のほうがこわいというくらいに、自然の中にぼつんと置かれたとき、人がいるという存在感は大変重要なことなんです。そういう意味でパワーのある、イメージの強いユニフォームにしてみようということです。

そこでまず大切になってくるのは色ですね。色を見ると、人は大変感動するわけです。信号もそうです。赤、黄色、グリーン。子供でも教えなくても本能的に感動するのが色です。ですから、大自然を相手にしてハードな仕事になつてくると色というのは大切なことで、自然の中に色が溶けこんでしまつて、人がいるかどうか分からないというのは大変危険なことなんです。そういうことで、まず一番わかりやすい色というのは赤ですね。赤を見るとうれしくなるとか、楽しくなるというような「ねあか」な色、明るい太陽の色。ですから、この赤を使ってチームワークをつくろうと思ったわけです。

チームワークということでは、快適に仕事をするという意味からも、同じものを楽しく着る、同じ精神が一つになっていく大きな手助けになったんではないかと思えます。

ただ、赤だけですと平凡になってしまう。そ

こで、赤を美しく見せるために、また繊細で、かつこうよく、都会的でというような意味を含めますと、デザインというものになるわけです。デザインは配色によってなされていますので、そのデザインによっていろいろ表現できます。ですが、この建設というハードな分野も、最近女性がたいへん増えてきたということです。ユニフォームのかつこよさでこの仕事をやってもらおうという意図も含めました。

土色の、いわゆる作業服を着て仕事をするとなると、いかにも土方みたいな、3Kと言われるような暗い印象になるんですけども、この仕事をたいへんに明るい、日本の建設のためにがんばっているというような表現が、このユニフォームには託されていると思うんです。いわゆる「ねあか」で活気のあるということですね。徹底的に赤というものを美しく見せようとした。

それと、切りかえが丸いような形になっていますが、私は常に未来というものを見つめています。未来というのは宇宙でできている。ですから宇宙は常に動いているということで、丸い形をしているわけです。一〇年、二〇年後のための現在の仕事だと思えますので、常に未来をみつめていくために宇宙的なイメージのデザインをしました。

たとえば、スキーウェアなんていいますと、それこそ男も女も年齢も関係ない。真っ白な自



然のなかで、その人のファッション、そのものずばりを見せ合う。ヨーロッパのスキー場なんか、かなりお年寄りの方が、ものすごくカラフルで、おもしろいものを着ていますね。でも、それを着て山の中に立つと、ちゃんと着れるものだなと。自然のなかでぼつんとしたときに、なんてことないんです。

ですから、建設でベテランの方というと、たいへん年齢が高いんですけども、スキー場のあの感じと同じですからね。皆さん最初は違和感があるんじゃないかと思つたんですけども、実際にはとても喜んで着てくださったんですね。その後、ユニフォームを脱がないでそのまま飲みに行くんだとか、そのほうがモテルんだとか聞きましたけれども、それくらい愛用していただきました。

また、人間で不思議なもので、いやだいやだと思うと似合わないんですけども、だんだん

うれしくなってくると、だんだん誰にも似合ってくる。さまになってくるんですね。これがどんどん汚れて、古くなってくれば、ますますかっこよくなるというような、それがファッションの本当の意味ではないかと思います。それを土木や建設の世界にファッションができたということは、おそらく欠点が無形になったのではないかと。

デザインというのは、利点ばかりで欠点がないと、デザインの価値が出てこない。3Kと呼ばれる欠点とかマイナス部分からいかにして脱皮するか、それが一つのテーマとなったわけですから、かえってたいへんおもしろい、



自分としてはまだまだ関係なかった業界ですの
で、とても深い縁を持つことができたなと思っ
ております。

(文責・編集部)

田村 三国川ダムで見たんですよ、山崎建設のユニフォーム。もうウルトラマンですね。「かっこいいー」と思ったもの。

それで、この間、関東学院大学の「全国土木系女子学生の会」のファッションショーを見て、「とにかく自然を相手に仕事をしているんだ。そんなときに野暮りたいかっこうなんかしていたらだめだ」と言ったの。最初にあのユニフォームがばつと出てきたときは、うわーっ！なんてみんな驚いてましたよ。でも、あれでいいんですよ。あの巨大な自然が相手だもの。

西山 おもしろいですね。都会じゃない、自然が相手だから何でもいいじゃないかというの、いままでの建設業界。

ところが、自然が相手だからファッションナブルがいいと。なるほどね。

田村 どんなに目立ってたって自然には負けるもの。

山崎 いまのご意見は、そのままあの制服をつくったときのコシノ・ジユンコ先生のコンセプトなんですよ。

「大自然がバツッで、大きな重機を使って、

ものすごくダイナミックな仕事なんだ。そのダイナミックさに負けてはいけない」という見方なんです。ですから服の色に赤が出てきたわけですね。

田村 かっこよかったですよ。頼りになるもの。あんなかっこうをして、トリプルゼボン(重タンプロラック)を運転していて、ごらんなさい、本当に。

山崎 赤の制服が入ったというのは前代未聞でしょうね。最初導入したときは、若い人はもろ手をあげて賛成だったんです。四〇歳以降の人は「やっぱり、恥ずかしい」と。ところが、最初の冬服というのは歳をとった人に似合うんですね。それでうまく導入ができました。

田村 歳とると赤い服が似合うの。

西山 制服については、それ以降触発されたのか、有名デザイナー、若手に人気のある方を各社が動員して競争されているようで、それ自身きわめていいことですね。はっきり言えば今まで「制服で競争するなんていうのは土建屋のやることじゃない」という発想があったと思うんですね。

田村 だから一つ進歩したんです、前進したんですよ。

(田村喜子、山崎裕司、西山英勝、各氏による座談会「建設業・未来へのアプローチ」。本誌、四九号より)

業とくに現場の仕事に携わるようになるとは夢にも思っていませんでした。その私が現在のこの仕事にかかわるに至りましたにはいくつかの要因があります。

その一つは、家業を父の一代で終らせたくない、そのためには、実際現場に出てみないと、職人さんの大変さ、気持も分らないと思いましたが、仕事を覚えるためにも本格的に現場へ出ることになりました。それから、私にとつては大変でした。まずは足場にのぼるのに足が上からず、よじのぼったら恐ろしくて一歩も動けないことがしばしばでした。8階建のマンションで両サイドの壁しかつかまるところがないという箇所をコーキングしたこともあります。多分、一日も早く仕事を覚え一人前にならないと、無我夢中であつたと思います。そのせいか恐怖と不安は徐々に克服できるようにになりました。それでも、今でも何日か足場にのぼらずに済む仕事をしてから足場にのぼりますとやはり恐いです。

足場には何とか慣れましたが、私が携わり始めた頃は、現場ではどんなに大きな現場でもトイレが一つというのには驚きました。大勢の男性の方々がいらつしやる中で周囲の目を気にしなければならぬ、大変不便な思いました。トイレがない場合は、夏でもできるだけ水分を取らないように心がけました。私の仕事は、このように、年じゅうほとんど外で、冬には、手

足の指先の感覚がなくなることがしばしばです。このほかにも、肌で感じる経験を積み重ねてきますと、普通あたりまえと思つて見過ごしてしまふことが実は尊くすばらしいことであり、自然、太陽、水の恵みなど、何でも感謝できるようになりました。この世の中には感謝することが沢山あることを改めて痛感させられました。物が豊富にある時代に、ともすると失われがちなものに気づかせて頂いたことに、現場の経験を本当に有難く思つております。

当初、男性の目から見れば女性には無理と言われるようなことも私なりに徐々にクリアしてきました。今では、それほど女性では無理だということを言われずに仕事ができるようになりました。けれど、安全については、気を使ってきました。と言いますのも、女性の場合、怪我をした場合、男性と違ってまず現場復帰は不可能と考えられるからです。たとえば、現場に行きましても、足場の状況を見て、慎重に、かつ一番安全な方法で、遠廻りをして時間がかかっても気をつけて安全第一を配慮して参りました。周りの方から、女性なのに高い所にのぼつて大変とか、また、私は幼い頃ひ弱かつたものですから、親戚の者からも、今の仕事に従事していることが信じられないといったことをよく言われることがあります。私自身は、自分で選んだ道ですし、今はそれほどには感じておりません。むしろ、最近では体を動かして自然と触れ

ながら仕事ができることに楽しみと喜びを感じております。また、仕事を通じて大勢の方々との出会いもあり大変嬉しく思つております。

仕事のよさも感じるようになりました。いろいろな業種の方々の熟練した見事な技術によって建物がつくられていく、その様子は本当にすばらしく感動させられます。ものを作る喜び、大勢の人達の努力があつて初めてできる建物、どれだけ多くの人達の愛情があつてものができあがってくるか、それが分りますと、あまり物を粗末にできなくなりました。また、自分の仕事に自信が持てて一生懸命にやれば、それが結局周囲の人の仕事を生かすことにもつながる、周囲の方達に少しでもお役に立つためには、おのずといろいろなことを勉強し経験して身につけていかなければならないということも学びました。また、仕事には、喜びのほか、遊びとかリクリエーションの要素もあつて、それをもつて挑戦するようになれば、危険とあらゆる困難に立ち向かつていこうとする勇氣と力自体に喜びを感じ、それがすばらしい結果につながると思うようになりました。

建設業という仕事は、一年じゅう外で四季折々の様子を見ながら自然に触れる機会が多いということ、さらに、自分がかかわつた建物が存続する限りいつでも自分の仕事を振り返ることができるとなど、プラス志向で考えますと、まだまだよい点があるような気がいたします。

今、3Kなどといった言葉が、残念なことに、全国的に広まってしまったように思います。私も含みまして、実際に従事していらっしゃる方達は、そのようには感じていないと思います。プラス志向で考えていかなければ、現在話題になっている人手不足など解消できないのではないかと思います。

仕事の方も毎日出ておりましたし、現場で働く方々とくに職人さん達の苦勞、大変さも理解できるようにになりました。こうして仕事に少しずつ慣れて参りました頃、これからは資格が必要な時代が必ず来ると思うようになります。シーリング一級防水施工技能士、シーリング管理士の資格をとりましたが、この試験場でも、また、本格的に現場の仕事に携わるようになってからも、ほとんどいつも女性は私一人でした。そのため、異業種でもいいから現場に携わる女性がおられたらどんなに心強いかと常々感じておりました。また、現場には女性ができる仕事が多いことも実感するようになりました。建設業界とくに現場で働く女性が多くいて、しかも何ら違和感がないという状況になったらどんなにいいかと思うようになりました。私は、仕事には女性も男性もないような気がいたします。時代とともに分業化が進み、また、職業の多様化、さらに機械化によって女性が担う職種、分野がかなり多くなっています、女性が職場に進出する必要性が大いに出ているように思います。

す。こういう背景の中で、女性達の会を考えるとようになってきました。そんな時に、今日御出席の荻原さんが「建築現場の女性ネットワーク」を一昨年発足されたことを知り、建設業に携わる女性の会を作ることを決心しました。会の愛称は、人なつっこくて、庶民的で、愛らしくて、しかも芯が通っていることをイメージして、アップルウーマンと名づけました。

会を作る時点で、私が一番強調させて頂いたのは「男女それぞれの特性を生かしながら、その補う中で、調和した姿で仕事をしていけば必ず明るい職場ができて、人手不足・作業環境の問題なども解消されていくのではないかとということ、そして、女性の存在が多くなればなるほど相乗効果として男性の方々もふえてくるのではないか」ということでした。この趣旨に大勢の方が賛同して頂き、昨年の9月15日に設立総会・発会式を持つことができ、札幌市長、知事夫人など多くの方々から会の誕生を祝って頂きました。

女性が建設業界により多く入って頂くためには、まず、女性の方に「私もできる」という意識を持つて頂いて「建設業も女性の選択する職場である」と考えて頂けるようにすることです。女性を起用する社長さんが多くなることも願っています。建設の仕事が好きという女性も沢山いらつしやるような気がします。アップルウーマンでは、会員がいろんな職種に分れておりま

すので、その方々を通じて他の女性の方々の存在を知り文集を作るなどして経営者の方々にも女性起用の理解を深めて頂くことを活動の一つとして重点を置いております。

今回のフォーラムを契機に、同じような会を作って頂いて、横のつながりを大きくしていけたらと思っております。建設業に従事する一人として、これからの建設業界が少しでも明るい、よい状態になるように、微力ながら努力していきたいと思っております。

三津谷洋子（佐藤工務店）

私は、学校がカトリック系の女子高校だったので、よくテレビドラマの中で見るようなOL同志のうわさ話の場面などが嫌で、男の人がいるさっぱりしたところで、仕事を前向きにやれるような職場を望んでいました。卒業時に、たまたま今の会社にいた叔父から求人票を送って貰い就職することになりました。職人になりたという動機はあったのですが、職人といっても、書類に仕事の内容が書いてあっても、現場を知らないのです、どういう仕事かということさえ知りませんでした。

最初は、考えてもみななかった仕事でびっくりもし、男の人が一杯いたので圧倒されてしまったんですけれども、私もやる気があったので、「あれやりたい」とか「これやりたい」と言っていくと、男の人達も理解してやらせて貰いま



女性オペレーターによる建設機械デモンストレーションと、ユニフォームデザイン過程の説明

したので、私は現場とか上の人に恵まれたと思
っています。仕事を覚えてしまうと、居心地も
結構よく、また、資格もとれるようになり、二
級鉄筋技能士、玉掛技能者の資格をもっていま
す。

自分がやっている仕事、建物が目に見えて
建っていくことにつながっているのがどんな
楽しくなり、今就職3年目になりますが続いて
やっています。若いうちに体を動かして、どん
どん自分のプラスになるような、そういう人間
的な土台づくりというか、それを今楽しんでや

っております。

昨日ご覧頂いたような鉄筋工の仕事、会社で
はレディタスクと聞いていますが、現在50人お
ります。その6割が新入社員で、まだ入ったば
かりですから、今は仕事を楽しんでやって貰う
よう教えているところですが、自分の生活の中
で生きたいと思っていけるように仕事を見つめ
てほしいと願っています。やっぱり楽しくない
と続かないので、楽しく、みんなで仲良くやっ
ていきたい、そういう思いが一杯です。生きたい
としてこの仕事を選べる人がどんどんふえて
くればいいなと思います。

また、仕事には、どうがんばっても絶対男の
人にはかなわないというのがありますが、でき
そうな仕事は任せて貰えばそれなりにやれる
つもりで今まで来ているので、なるべくどんど
んやらせてほしいというのも私の実感とお願い
です。

小松春美（山崎建設）

私は、高校を卒業して2年半OLをしていま
したが、コピーをとる単純事務がすごく嫌でし
た。その時に、女子の重機オペレーターを募集
していると聞き、実際にオペレーターとして働
いている女性に話をきいたところ、みんな生き
生きしてすごく楽しそうだったし、私と同じ位
の年の人や主婦の方が従事されているので、私
にもできるなと入ることに決めました。実際に



建設機械のデモンストレーションを視察する参加者たち

重機に乗ってみて、こわいことか結構あつた
んですけども、でもそれを越えるすごい楽し
さがあつて、毎日があつという間に終るとい
う状態です。外の仕事ですから季節感があり、今
の仕事はすごい高台にあつて、湘南海岸が見渡
せて、江ノ島が見え、逆の方には横浜のベイブ
リッジが見えるという、景色がとってもいい所
あるんです。桜の咲く時季には山桜で周りが真
白になったり、山桜の次の時季には新緑の山々
を見渡して仕事をするというように、すごく気

持がよくて、大自然の中で伸び伸びできてすごく嬉しいと思います。事務所内で、煙もくもくの中であらゆるしながら仕事をするなどとても私には考えられません。

現場では、昨日の建設機械デモンストレーションを見て頂いたショベルの3倍位大きな機械に乗っており、45トンとか50トンのダンプに積み込む仕事をしております。こういう重機のオペレーターは3年も5年も乗ってやっと一人前になれるもので、私はまだ2年目で、まだ勉強することが一杯あるんですけども、とにかく毎日が楽しくて、このような状況を、関心のある方には実際に現場に来て私達の姿を見て頂ければ、自分も乗ってみたいと思うようになると思います。ぜひ多くの方がこういう仕事に入って頂きたいと思っております。

椎屋幸子（椎屋建設）

私は、土木の工事現場で、ヘルメットをつけ、安全靴をはいて、第一線で、道路とか、下水路とか、公園とか、河川とかの工事をやっております。私は現場で働くのがとても好きなんです。これからもずっとやっていきたいと思っております。

この仕事に入ったきっかけは、父が建設業を営んでいまして、私は女子ばかりの長女でしたから、最初は仕方なく手伝うことになったので

す。当時21才の私は、やはりこの仕事は嫌でした。スコップはねとか、型枠の掃除とか、使われて毎日が過ぎて、すごくよごれたし、疲れて、お天気が続けば、一カ月でも二カ月でも休みがないというのが実態でしたから、仕事を覚えようという気持はなくて、「このまま一生過ごすのだろうか？」と考えると不安でした。大事な青春の使い方にとても悩んでいました。25才の頃から、少しずつ、このままではいけないと考えるようになったんです。それは、都市のあるホテルの若奥さんとの出会いだったんです。その方は、私より二、三才ですが、とても生き生きして魅力的な人でした。仕事へ



女性パネリストによる話題提供

の情熱と自信たっぷりな仕事ぶりは、そのホテルを一人で背負っておられるようで、私は大変なショックを受けたんです。さらに私は考えました。彼女は、ホテル業が好きでお嫁に来られたんじゃないやなくて、ご主人との結婚により、ホテルはご主人についてきた仕事だったんですね。その仕事を嫌ともいわず、しっかり身につけてこられたのだと思ったんです。さらに私は思ったんです。「いつか彼女を乗り越えたい」と。それから私は、あれこれ考えるのはやめて、真剣に仕事を覚えようと気持のスイッチを切りかえたんです。

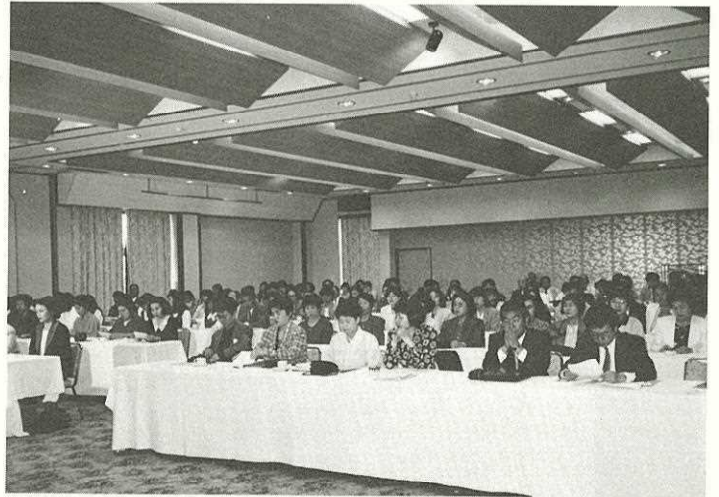
それから勉強を始めたんです。勉強してみると知らないことがかりました。私の学歴は土木とは全く関係がありませんでしたから、図面も、設計書も、測量も初めてでした。でも、気持はもう前向きになっていましたから、勉強も、仕事への打ち込み方も、自然と楽に感じられるようになりました。段々、仕事を覚えて、21才で大卒自動車免許はとっていったので、ダンプは乗れるし、建設機械も進んで乗るようになり、次第に監督の助手を務めるようになりました。そして、昭和45年に二級土木施工管理技士の資格を取得しました。

その年に初めて、一つの工事を全面的に任せられました。二千万円を少し超える仕事で、振興局の発注で水門を作る工事に、私の名前が代理人として書かれました。測量をして、施工計画

を立て、材料を注文し、下請さんとの打合せをしたり、そして、実際現場に入って、施工・写真の管理、現場の指揮、そしてみずからスコップを持って型枠を組んだり生コンを打設したりして工事は進行していったんです。もちろん、先輩方に相談したり、聞いたたり、役所の方にも沢山の事を教わりました。女性の監督は珍しかったです。高さは間違っていないだろうかとか、鉄筋はこれでいいのかとか、雨が降れば土砂が崩れていないだろうかとか、眠れない夜も幾度かありました。現場では水替中だったので、夜中に一人でポンプの燃料を足しに行ったこともありました。

5カ月程かかって仕事は完成しました。完成写真をカメラに撮った時の気持は言葉で表わすことができません。完成検査をすまして引渡しをしました。女性の私が多くの方々の協力を頂いて一つのを完成させた時の満足感、充実した気持は、かつて感じる事のなかった喜びでした。青春を使って悩みながら働いて身につけたことが全部役に立ったのです。この喜びが大きなバネ、励みとなって、苦しいことも、よごれる事も気にならなくなって自信が持てるようになりました。

それから13年間、主任技術者を兼ねて現場代理人として幾つかの仕事をしましたが、決して



華やかな 雰囲気の会場

スムーズにやってこれたわけじゃなくて、他の人より率先して行動しなければいけないこともありましたが、男性に負けないよう突っ張った力んだりのこともありました。でも、いざとなると男性にはかなわない事も知りました。勉強しないとついていけないので、講習会も多いのですが、専門的なことになると、女性は一人ということが何回もありました。そうこうして、昭和61年に一級土木施工管理技士に合格しました。

現場というのは、それぞれ工事内容とか条件とかが異なりますので、今でも胸がドキドキしますし、途方に暮れることもあります。一件一件働いた結果が形となって残りますし、失敗したら損害はとても大きいので、いい加減なこととはできないし、責任もそれだけ大きいですが、それだけに、完成した時の喜びは言葉では表わせません。そして、沢山の人々に支えられていることも切に感じます。一人ではやれないんです。

現在、建設現場は、建設機械の操縦も簡単ですし、大きな機械を動かすのはとても気持のいいものです。測量も覚えると面白い仕事だと思います。その気になれば現場監督にもなれますし、女性でも重要なポストで活躍できます。期待も大きいんです。学歴は全く畑違いの私がこのように現場監督になろうとは思っていませんでしたけれども、折角身につけた技術ですから、活かしていきたいと思っております。工事の忙しい時に、工期を守るため、日中は少しでも工事を進め、書類は夜に回すという状態になり、夜の残業が続くのは悩みですが、女性が現場に進出し活躍されたら人手不足に革命がおこるような気がします。男性女性が協調している職場にしたら、よりよい発想も生まれて工事が進んでいくような気がします。そんな方向を願いながら、私はまだまだ土木の坂道を上っていききたいと思っています。

荻原みどり（建築現場の女性ネットワーク）
私の20才代は、一生仕事をしていくんだっ
たら、自分が興味を持てる仕事につきたいと思
いまして、それを見つめるための転職の繰返
しして。私は、晴れた日にもずうっと屋内に
いたとか、一日中、会社で数字を眺めてい
た事務の仕事は自分に向かないし、大組織
の中にも向かない性格だと自分で分ってき
ました。そうこうしているうちに、偶然に女
ばかりで家を建てようという話が出まし
て、その時は、男性の大工と女性の設計者
がいらして、あと、金槌で釘をたたいたの
は皆女性だったんです。これは、私が大工
を職業にしようときめた、私にとっても大
きな出来事だったんです。もともと、手
で何かを作るという事は嫌いで、なかつ
たし、部屋も模様替えして、居心地よい
スペースを作る事なんかもとても好きで
したので、建築現場に関係する職業にぜ
ひつきたいと、まず職業訓練校に電話し
たところ、「えっ、貴女が受けるんですか？
女性はいませんよ」と言われたんです
ね。その時、私が仕事の経験を少しでも
持つておれば「女性でもやりたいです」
と私も言えたかも知れませんが、その時
は、女性がいなくて、イコール「女はだ
め」というように自分で受け取ってしま
って、建築の現場に関係のある技術を
まず覚えたいと「ダメでもいいから雇
って下さい」と内装の仕事の見習い入
りました。



(左から) 椎屋、あわや、三津谷、荻原、片岡、米村、小松の各女史

その後、女性の友人と一緒にワークショップ
を作って独立しましたが、その翌年、私はア
メリカに渡り、アメリカの職業訓練校に入
って訓練を受け、引続いてアメリカの技
能職の女性達

についての調査を行いました。この内容は後
程スライドで見て頂きます。

2年余りで帰国した私は、DIY関係の事
をしていましたが、大工の勉強を基本からや
直そうと、再び職業訓練校に行きまして「ぜ
ひ建築科に入りたいと思います。前回は女の
人はいませんが、今度はあきらめませんが、
今年度はあきらめません」というふう
に言って、入校し、一年間16才の男の子
達と一緒に勉強しました。それ以来、埼玉
で木工事と内装の仕事をして
います。

仕事の体験を通して、女性に大工仕事
の楽しさを知ってほしいと思うようになり、
女性を対象とした大工実技講習をお世話する
ようになりました。この講習の参加者は主
婦の方が多いのですが、再就職をされよう
とする主婦達というのは、本当に職業の
選択がないので、私はいつても、何か技
術を身につけることをお勧めして
います。

その一方で、こういった職業について
いる女性達の横のつながりを持ちたいと
思うようになり、2年前に呼びかけて「
建築現場の女性ネットワーク」を作
りました。電気・配管・左官・内装・
建具などいろいろな方達が入って
います。今日のフォーラムが開かれる
ことになったことを、ネットワー
クの皆さんもとても喜んでい
るし、こういった形で私達の仲間
が増えれば、自分自身も勉強
になるし、豊かな人間関係と、

職業に対する誇りが一層持てるので、あちこちでこういう集りが開かれたらいいなと皆思っております。

お話ししたいことがいろいろあるんですが、一つお願いしておきたいのは、今日午前中に基調講演して頂いたあわやさんのお話にありましたように、過労死までおこす男性達の働き方には問題があるし、そんなに肩肘張らないで、もう少しスローダウンしながら、仕事を楽しみ、家族とのコミュニケーション、趣味を生かすというような働き方をしないと国際的にも問題になっていくという位ですから、女性が入ってくることによって、男性の労働の仕方が少しでも変わってくればよいと思います。でも今のところ女性の数が少くて、女性が現場に入ってきた場合、男性達は「あつ、女」というように、その女性を全女性の代表のように見ているようなところがあって、例えば、何か失敗したとすると「ほら見たことか、女はやっぱりむずかしいんじゃないか」というふうに、常に、全女性を背負わされているようなところがあるんです。男性の場合は、そうでなくて、個人の働き方として見られている筈ですから、女性も個人として見てほしいと思います。私達女性は、普通に、本当に、一人の同僚としてつきあってほしい、一人の見習として扱ってほしいという思いがあるんですけども、男性達が、私達に「女性」という先入観をもってしまうと、男性達自体が、

男性同志の場合は何でもないので、女性達に對してはどう対応していいものか分らない状態になってしまっているのではないのでしょうか。ですから、男性達は、女性が失敗をするチャンスを与えてほしいと思うんです。あまり保護してあげようとすると、女性達のやる気が宙をさまよってしまうことにもなります。技術をマスターすることについては、失敗をおそれてはだめだと

七田茂彦（山崎建設）

私どもは重機のオペレーターに業界で初めて女性を登用しましたが、男性労働力が不足し、それを補うためとられたことがあるのが非常に残念です。建設事業によりで上がったものを使うのは人であり、それは男であり、女でもあるわけです。使う人がそうであれば、作るサイドも同じような構成があつてよいのではないかと、女性が働ける職場づくりにはどうやったら貢献できるかという認識をしたということです。社会的な役割として、自分達も率先してそういう機会を作っていくと女性の登用を始めたのです。女性の持つておられる、タッチの柔らかい感性を生かしながら働いて頂ければ、建設産業の持つている「男の職場」というイメージが「人間の職場」に変わるのではないかと、そういうふうに考えています。建設業は女性の方が働ける職場です。この業界に皆さんもどんどん入って頂きたいと思います。

いう事を男性達は十分に分つていらつしやる、その分つている事を同じように女性達にチャンスを与えてほしいと思つています。

では、私がアメリカに行った時のアメリカでの体験をもとにまとめたスライドを見て頂きます。（スライド「変わりゆく女の仕事、男の仕事（USA報告記）」を上映）

五島拓也（佐藤工務店）

当社は、社員の平均年齢が二六・七才で、若い男性社員が独身寮と現場とを往復する毎日を繰返していますと、女性と知り合うきっかけが殆どない。そこで、若い女性が現場に入つて貰えればモラールも向上するし、活性化もし、またお嫁さん候補にもなるという考えで、女性登用を始めたんです。ところが、実際に女性が仕事をやってみると、細い鉄筋を扱う床の部分とか、壁の部分は、男性よりきれいにでき上るし、また速いんですね。私どもも大変驚きまして、これはどんどんなんな仕事を教えていけば、鉄筋に関する部門は女性だけでやっていけるんじゃないかという考えが occurred。今年、鉄筋は全て女性でという現場を試験的に実施していますが、大変順調に、また評判よく進んでおります。鉄筋工の場合は、男性に比べて女性は仕事を覚える速度も全然速いし、打ち込む姿勢も男性と全然違う。戦力になっていきます。女

性達のたくましさを実感しております。意欲のある女性が建設分野の門をたたいて頂ければ、私どもは、鉄筋に限らず入口を大きく広げてお待ちしております。

吉岡博志（矢野運輸）

ダンブを運転する女性ドライバー15名に働いて頂いていますが、人が足りなくなつて始めたんじゃないんです。女性特有の優しさ、きめ細かさ等を出して頂ければ、それだけこの業界も社会からの評価を受けイメージも上るのではなにかという事で始めました。一番気を使いましたのが受入体制をしっかりと立てることでした。利用施設を完備して快適に仕事をして頂くという事です。また、3年勤続しますと、アメリカ西海岸へ研修旅行に出していますが、アメリカの女性ドライバーとの交流や、女性の進出の話聞いて大変自信をつけて帰って参ります。

ある会社の例ですが、女性が中心になって開拓営業するチームを募集したところ、大反響で、応募した女性達は「一度燃焼し尽くしたい、燃えてみたい」とのことで、年齢層は21才から52才でした。世の中にいかに女性人材が埋もれているかの証として紹介されていましたが、建設現場でも大きく門戸を開けており、思う存分自分の力が発揮できますので、皆さんに入ってもらいますようお願いいたします。

（編者注）

基調講演と建設省の調査報告「建設業における女性技術者技能者の活用」およびコーディネーターのコメントは、紙面の関係上、割愛させて頂いた。基調講演者西山氏は、日刊建設通信新聞社編「グッドカンパニー」の中で、建設業における女性の活用についての事例を紹介されている。同じく、基調講演者あわや女史には「女コドモが日本を変える」(PHP研究所発行)という骨太の著書があり興味深い。同書の中のFlying boyとか、基調講演にあったPersonal is political.など、現代

の組織論や都市社会を映し出している表現として印象的である。パネリスト片岡女史は英文科卒業で、ロシアや韓国とも交流があり、話題豊富である。本文中の荻原女史スライドの内容については、「どらまちっくにカーペンター」(ブレンセンター発行)に当時の経験が記録されており、Affirmative action(差別撤廃措置。米国における企業の雇用や職業訓練の対象者に女性や黒人の人数枠を設けるなどの措置をいう。)にも触れられており、興味深い。

なお、本フォーラム開催にあたっては、みやぎ女性交流活動センターにも御協力を頂いた。このセンターは、昨年六月に発足し、

宮崎県企画調整部女性青年課の事業を受託実施し、女性の社会参加と交流を支援していくことを目的としている団体である。ちなみに、荻原女史がその活動の一環として、10月18日に横浜で開こうとしているシンポジウムは横浜市女性協会の横浜女性フォーラムにおける共催行事であり、このように女性交流の場が各地に具現化しつつある。読者および周辺の方々に、このような女性建設技能者のネットワークづくりに御関心のある方は、当センター研修局に御一報願います。

（写真補足説明）

一、写真の鉄筋組立作業現場は、宮崎市内一ツ葉リゾート計画地区内のオーシャンドーム建設現場で、世界最大規模の室内ウォーターパークとされている。安全のため、視察者は全て安全帽、安全帯を着用しており、最前面に、本フォーラムの発想者である当センター上條理事長の姿が見られる。

二、建設機械のデモンストラーションは、オペレーターに快適な操作環境を提供すべく開発されたキヤタピラー三菱油圧シヨベルEGASOLを使用して、オーシャンドーム現場近くの九州建設機械販売(株)地内で実施した。

文責 山内恒雄



平成四年五月十三日、本会創立三〇周年記念式典に先立ち、田村喜子氏の記念講演会を行いました。以下に、要約して掲載いたします。

「土木の心」に魅せられて

そもそも土木という言葉は築土構木という言葉から来たと言われております。紀元前五〇〇年ぐらいに、中国の前漢のころに出版された『淮南子』という書物がございます。その中に、昔、人々は川のそばに穴を掘って暮らしていた。そういう生活をしていまして、冬は、雪とか霜とか氷とか風とかで、とっても寒いし、夏は虫や何かがいっぱいいますから、そういうのに災いされて、決して快適な暮らしをすることができなかつた。そういうときに、一人の聖人があらわれました、そこに築土構木、つまり、土を築き木を構えて、整地をして、そこに家を建ててという意味だろうと思います。そういうふうに築土構木をした。そのおかげで、非常に安心して人々が暮らせるようになったというようなことが書いてあります。築土構木をする人は、すなわち聖人ということになります。

日本の場合ですと、行基とか空海というような、最高知識階級を代表する僧侶ですとか、戦国時代は、武田信玄とか加藤清正なんているのが土木の先覚者として有名で、その当時でも、土木事業というのは難工事と言われるものが多く見られたわけでございます。専門土木技術者というものがまだ生まれていない時代に、その難工事をよく克服できましたのは、それからの

人達が土木の心の持主ではないかと考えるわけでございます。

土木の心というものは、私、言葉としてわかりましたのは、もう亡くなりましたけれども、土木学界の功績賞をお受けになりました飯吉精一さんがお書きになりましたものの中に見つけた言葉でございます。『土木者が社会的に生きていくために、工学技術に精進することは必要欠くべからざることだが、技術者である前に、土木の心を持った土木者であってほしい』というようなことが書いてございました。本当に土木と建築の区別もついておりませんでした私が、ここまで土木の世界に深入りするようになりましてのは、実はこの「土木の心」に魅せられて、「本当に土木の心というのはすばらしいな」と思うようになったからでございます。

永遠の恋人、田辺朝郎のこと

そしてこの土木の心というものを実際に示してくれたというんでしょうか、その業績の中からそれを感じとらせてくださったのが、田辺朝郎という一人の土木技術者でございました。京都の琵琶湖疏水建設物語を書きました『京都インクライン物語』の主人公が、田辺朝郎でございます。何ですか、「田辺朝郎は田村さんの永遠の恋人だ」ということになっておりまして、本当に、それほど私にとりまして、その後の人

生を変えてしまうほどの大きな出会いとなりました、田辺朔郎のこと、少しお話しさせていただきます。田辺朔郎は、もちろん、もういま生きていらっしゃる方ではありません。文久元年と申しますから、一八六一年のお生まれでございます。工部大学校、いまの東京大学工学部の前身になりますが、この工部大学校の卒業論文を書くために京都へいらっしゃいました。そこで、遷都によって大変疲弊してしまつた京都が、どうやってこの起死回生を図ろうかと、何か大きなプロジェクトに取り組んで人心を一つにまとめねばならないということで取り組みました琵琶湖疏水計画というのがございますが、これを実際に主任監督として実行した方でございます。

琵琶湖疏水建設の目的といいますのは、大きな二本柱は、舟運と動力を確保することだったんですが、もちろん、そのころの動力といいますのは、水車動力でございます。水を落とす水車を回して、いくつもダーツと回して、それをまた次の段に落として、また回して、そして動力を生み出そうとするものでございます。琵琶湖疏水が完成しましたのが二七歳ぐらいでございますが、田辺朔郎はその主任監督でした。そのころ本当にそういうことをする人が少なかったものですから、設計から、技術者の養成から、現場の人達の指導から、何から何までみんな一人でしなければいけなかつたときでさえ、



日々勉強をなさっていらした。

それで、明治二〇年ごろに、アメリカのコロラド州アスペンというところにあります銀山で、初めて自家発電の水力発電を始めたという情報をキャッチしたわけなんです。確かに情報をキャッチするということは、どなたにでもできることなのですけれども、大切なことは、レシーバーがよくなくちやいけないんですね。レシーバーがよかつたから、ただキャッチするだけではなく、その反応が的確であつたわけですから、田辺朔郎はすぐにアメリカに渡りまして、現場に行きました。そこで水力発電とい

うものを実地に見学いたしました。ところが、ペルトン水車という、いまでしたら皆様方にはあたりまえのことなんです。もう一つそのペルトン水車の動きがよくないということで、アメリカ旅行をしながら、自分でまた設計をしまして、この設計通りのペルトン水車をつくつてくれとアメリカに注文したわけなんです。

そして日本に帰つてまいりまして、この疏水の工事計画を途中変更いたしました。水車動力によるものを水力発電に切り替へてしまつたわけでございます。いわば、琵琶湖疏水を建設する目的というものを正確に把握していただと思ひますが、その二三歳から二七歳、この時期、彼は非常に若さがあつたから、頭脳が柔軟だつたということも言えると思ひます。それに先見性があつたんですね。いまからやる計画に水車動力ではもう遅いんじゃないか。これからのエネルギー源は確実に電力だということをつかんだから、とにかく日本で最初の水力発電というものを取り入れました。そのおかげで、京都は日本で初めて路面電車というものを走らせることができた。これはもう、当時の日本にとりましては快挙でございました。日本の中で京都は、もう都ではなくなつてしまつた。都の位置を追われてしまつて、本当にしょんぼりしていただすけれども、やればできるんだというような考えに、再起することができたわけですね。ですから、やっぱり京都は決して西国の一地方都市

ではないんだ。都の地位というものを、少なくとも都人意識というものを自分なりに持つことができるような快挙につなげたのだと思います。

それからもう一つ、田辺朔郎がこの琵琶湖疏水という構造物をつくりましたときに、やっぱり評価することといたしましては、琵琶湖疏水というのは、滋賀県にございますあの琵琶湖から京都まで水路を引いたわけでございます。京都市に入ってきますところが蹴上（けあげ）と申します。都ホテルのそばでございますが、そこまで水路が流れてまいります。そこでひとつ水力発電を行った後、ずうつと南禅寺の方へと下りまして、いま観光で有名になっております哲学の道というところがございます。その哲学の道をずうつとのぼります。京都の流れというのは、みんな北から南に行くんですけども、疏水だけは南から北に流れています。そして鴨川の方まで行きますと、京都の北の方まで行って、とにかくこれは農業用水としても使ったわけでございます。それで、鴨川に入ったり、あるいは御所の防火用水にしたり、それから堀川の方に流れたり、いろいろなことになって流れていくわけでございますが、これ全体を含めた琵琶湖疏水という構造物。

それから、いま申しました南禅寺の境内に水路橋がございます。疏水の場合は水路閣と申しておりますが、赤レンガと花崗岩でつくった、高さが一〇メートルの長さが一〇〇メートルぐ

らいある、ピアが一〇本ぐらいある水路橋でございます。これができましたとき、福沢諭吉がこれを見まして、「南禅寺という世界に冠たる名園にこんな西洋かぶれのような建物をつくって、京都市民は一体何を考えているんだ」と、けちよんけちよんにけちなしたわけなんですけれども、これもいまとなりましては、非常に典雅な感じをこの白砂青松の名園の中の一隅にその存在をいまも残しております、観光名所にもなっているぐらいてございます。

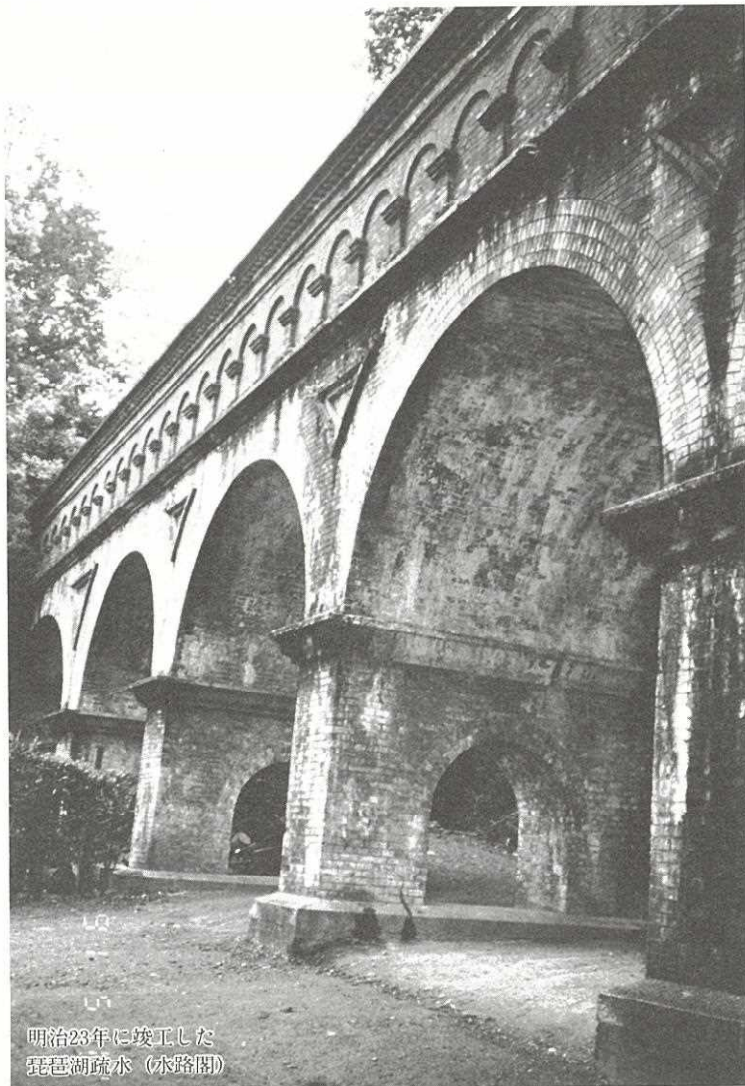
この琵琶湖疏水というのは、去年、完成一〇〇年を迎えました。京都市民はこういう水路閣のようなものを市民共有の財産として、もう一〇〇年たったものだけど、これから一〇〇年も二〇〇年も大事にしていこうという気持ちでいるわけでございます。つまり、琵琶湖疏水全体の景観、それからそれぞれの構造物、こういっただものというのが、いかに田辺朔郎という主任技師の素養とか、あるいは美学というものをあらわしているかということの証明になっているわけでございます。

構造物の「造」という字を考えてみますと、「告」にしんにゆうをかけたものです。よく運がいいとか悪いという「運」、あれは「軍（いくさ）」にしんにゆうをかけています。軍というのはいくさですよ。 「軍（いくさ）」にしんにゆうをかけたものです。「運を勝ち取る」ということは、いくさに勝つということなんです。

すよね。そういう場合に、「いくさにしんにゆうをかける」と申します。この「告」というのは、「話す」とか「語る」という意味ですが、「告」にしんにゆうをかけるものが構造物の「造」という字であるならば、「後世、これを見る人達の心にまで語りかけるものでなければならぬ」ということになると思います。その意味で、田辺朔郎のつくりました構造物がいかにすぐれているか、いま一〇〇年後の私達の心に確実に語りかけてくれる構造物でございます。

「ワン・オブ・ゼム」の心

この琵琶湖疏水を完成いたしました後、田辺朔郎、その当時、まだ二七歳か二八歳だったんですが、この業績によりまして工学博士の資格をもらえた。それで、母校の東京大学の教授になつたんですが、その疏水当時の知事さんが、その後、北海道の長官に転勤いたしました。何をすることが京都の市民の心をついにし、そして遷都で疲弊した京都の起死回生を図るかというときに、この琵琶湖疏水というものを建設したわけでございますが、北海道の宅地植民を進める上で何をしなくちゃならないか。この場合は、鉄道の建設だというわけで、「田辺君来い」と、呼んだわけなんです。田辺教授は、東京大学の教授の椅子にいたわけでございますが、この椅子を捨てまして、そして北海道へ渡りまし



明治23年に竣工した
長谷湖疏水 (水路開)

た。

当時の北海道は、いまと違います。本当に原生林と湿地帯に埋まったようなところでございます。北海道へ移民した人達が逃げて帰った大きな理由の一つに、口をあけたら飛び込んでくるような虫だったと言います。田辺朔郎さんもお書きになったものの中に書いてございます。「トイレに行ったら大変だった」と。本当に、虫がうじゃうじゃいたらしゅうございます。そ

ういう北海道へ渡りまして、もちろん、車も何もないところを、歩くか、あるいは馬で、北海道発展のための一〇〇〇マイル幹線鉄道の実地踏査をなさったわけでございます。

私は、この『京都インクライン物語』というものを書きました後、田辺朔郎という男と別れがたくて、次に、彼の跡をわざわざ北海道まで追っかけるようにして、『北海道浪漫鉄道』というのを書きました。彼が歩いた跡を、私の場

合は、もちろん車で連れて行っていただきましたけれども、ずうっと歩いてまいりました。本当に地吹雪のひどいところ、あるいは日高山脈を越える狩勝峠というのがございますが、ここに鉄道ルートを敷いてございます。このルートを敷くときは、マイナス二〇度ぐらいの寒いところに、毎日毎日野営を重ねまして、一番いいルートを見つけたわけでございます。いまの言葉で言うならば、まさに苦しくて、きつくて――三Kという言葉当てはめたら、まさにそういう現場へ飛び込んだわけでございます。

「なぜだ？ 東京大学の椅子を捨ててまで、なぜこんなところに飛び込んだんだろうか」。私には、最初のうちはわかりませんでした。社会的地位というものから見れば、いまよりもっと大きかったと思います。高等官という地位にあったのが、地方の一技師として、本当に北海道はまだ蛮地と言われるようなところでしたが、その蛮地の中に飛び込んで行って、三Kの中に身を置いた。「なぜだ？」というところに来ておりました。

あの本を書いたときには、まだ本当にわかっていなかった部分があったと思いますが、あの本を書くために、北海道のことや、鉄道のことなどを、いろいろ土木屋さんにお会いして教えていただきました。そういう中で、何気なくおっしゃった言葉の中から、私にはその都度胸がきゅんとなる、いい、名セリフがございました。

その中の一つが、車で連れて行ってくださったときに運転していらした土木屋さんが、「この道は僕がつくったんです」とおっしゃったんです。一瞬、意味がわかりませんでした。「道路なんて僕がつくれるはずないじゃないか」というような思いが一瞬かすめた途端に「ワン・オブ・ゼムです」とおっしゃったんです。そのときスーツと意味がわかりました。道路なんて大きなものは、道路に限らず、ダムでも、鉄道でも、下水道でも、空港でも、何だかって自分一人の力ではできるものではありませんけれども、大ぜいの人達が力を合わせ、心を合わせて完成したときに、一人一人の心の中に、「この構造物は僕がつくったんだ」という自負と誇りがあると思います。よくいま現場では、「あまりにも細分化されて、自分のしていることがあまりにも小さくて、この構造物の建設の意義がつかめないんだ」とおっしゃる方がございますけれども、私はそうじゃないと思います。「ワン・オブ・ゼム」の中の「ワン」。自分がいなかったら、あの大きな橋のビス一つ打つのが抜けていたら、橋は完成しないわけです。下水道の中のどこか一つのコンクリートに打ち忘れたところがあつたら、下水道は完成しないわけです。だから、それをやっている人の力というものが、「ワンはゼムより上にある」と解釈したときに、その力がいかに大きいのか、いかに自負と誇りが持てるか。ワン・オブ・ゼムというのはそういう

意味だろうと私は解釈いたしました。それからあるときは、ピアを見せていたでいたときに、「岩着にかかっているときに、僕達土木屋が一番幸せなんです」とおっしゃったんです。岩着という言葉初めて聞いたものですから、「がんちゃくって何？」と聞きまして、「ピアや何か構造物の基礎を基盤岩にしっかりと固定することで、基盤岩というのは、地下とか海底、川の底とかの〇メートルか二〇メートルか、場合によっては五〇メートルも掘らなきゃ出てこないものだが、その基盤岩にきちんと基礎を固定しているから、上の構造物というものは大丈夫なんだ」、こういうふうにおっしゃった。「でも、それは構造物が完成したときは、だれの目にも触れるものではないですよ。だからから見られないものでしょ」と言ったら、「そうですね、だれの目にも触れません。でも、それがあつたら、構造物はしっかりとついているのであつて、僕達土木屋は、それをやっているときにこそ燃えるんです」とおっしゃいました。そのとき私は、私の中に寒暖計があるとしたら、ググッと目盛が上がったような気がいたしました。

フを聞きまししたときは、私は本当に、この土木というものをテーマにして物語を書く、この道を選んだことを幸せに思いました。そういうすばらしいセリフを直接に聞ける立場にいたということ、本当に幸せに思いました。鉄道に限らず、土木というものが社会基盤の整備であるならば、そのことによって、世の中が発展していくならば、それを実際にするということは、そういう基盤整備のされていないところにそれをするという仕事につくこと自体が、恵まれない人達に少しでも豊かな暮らしを与えることだし、つくる人達自身は、ダムにしろ鉄道にしろ、すぐく辺びなところに飯場暮らしをしなくちゃいけないわけですよ。自分達はそういう苦勞をしながら、世の中の人達にもっといい、豊かな暮らしを与えたいと。「ああ、これが土木の心というのだなあ」とわかってまいりました。ですから、私にとりましては、土木の世界は、あの田辺朔郎を筆頭にして、崇高なものであつたわけです。

感動の「K」で、自負と誇りを

ところが、ちょうど私に土木の心というものがわかってきたころ、世の中では三Kだとか六Kだとかいう言葉が、もてはやされるようになりまして。一番最初は、工業高校の生徒が、卒業したら土木に進みたくななんだと。なぜ進

みたくないんだと、いろいろ理由を書きました。一番多かったのが「きつい」、「汚い」、「危険」、「休暇少ない」、「給料少ない」、「かっこう悪い」、いろいろあったんですけども、そのベストシックスが全部上にKがついたから、そこから六Kになったと聞いたんですが、実にうまいことを言うなと思って感心いたしました。

でも、本当にそうでしょうか。どんな世界にだって、一生懸命やっていけばきついこともあるし、苦しいこともある。私も、書いておりましたとき、いついつまでに書かなくちゃいけない。何日も何日も、二時までも三時までも起きてがんばっているときに、「ああ、こんなこと始めなきゃよかった。こんなことさえやらなきゃ、ゆうゆうとテレビは見ていられるし、早く寝られるし」と思いますけれども。ですから、それは苦しいわけですよ。でも、もの書きの世界が三Kだとか六Kだと言った人はいないと思います。本当に一生懸命やっていけば言わないはずなのに、なぜこの世界の人に限り、三Kだ六Kだと言って、大いばりで、これが言いたかったんだとばかり言い出した。「この世界はイメージが悪いから、何とかイメージアップを図らなくちゃいけない」と自分が「イメージ悪い」と自分の世界を決めてかかったら、世の中の人達をもっと悪いと思います。「人が何と言おうと、この世界は立派なんだ」と思っていれば、「イメージダウンだから、それをイメージアップ



プしなきゃならない」なんていうセリフは出てこないんじゃないか。むしろこの世界には、あの大きなものをみんなが力と心を合わせて完成したときに、「よくやったね、おめでとう。ご苦労さん」とお互いに言い合ったときの、あの感動のKがあるではありませんか。その感動のKこそ、売り物にしたいのだと思います。

私、あちこち現場へまわりまして、本当に三Kとかというものを実感したことはございません。そこで実感するのは、一人一人のお持ちになっっている自負と誇りでございます。

この間、三Kなんかの話が出ていましたとき、

このごろの建設業界は「花長風月」と言うんです。なぜかと言いましたら、「花」は花形産業、「長」は、本当は鳥ですけれども、この場合は長期休暇がある。風月の「風」は社風がよい、「月」は月給がいい。だから、建設業界は花長風月だというようになってきている。うまいことを言うなと思って、また感心いたしました。私なんか、一つの作品を書きましても、そのタイトルを決めるのに四苦八苦いたします。どうして皆さんこんな風に上手にキャッチフレーズみたいなものをおつけになるのかと思いますけれども、少なくとも私が見せていただいております現場では、現場の最先端で働いている人達に、自分自身の業界が三Kだと思っていられないとは感じられないんですね。

ダムの現場へ行きましたときには、型枠大工さんが、休みの日には家族を現場へ連れてきて、「これがお父さんの現場だよ」と自慢するとおっしゃっていました。炎熱にさらされながら、一日じゅうホースでコンクリートのレイタンスを洗い流していらっしやる清掃工の方は、「一生懸命にこの仕事をしていると、時間のたつのを忘れます」とおっしゃいました。鉄道の保線現場では、あの保線という仕事は、トンネルだとか、鉄道を敷いた建設の方は、完成したときには、樽みこしが出たり、テープカットというのがございますよね。でも、保線の現場というのはそういうのがないんです。樽みこしもテー

「カットもない、しかもエンドレスの仕事だと思いません。でも、あの保線をやっていらっしやる方達は、「保線は男の仕事です。線路は生きています。かわいがって大事にしてやらないと大病します」とおっしゃって、本当にその仕事を大事にしていらっしやいました。線路の上身をかがめてそのひずみを見ることを「拜見」とおっしゃっているんですね。そういう一つの言葉使いにも、その保線マンの心がわかるような気がいたします。

山形新幹線というミニ新幹線ができました。

その現場は、本当にカモシカが出てくるというようなな辺りな山の中だったんです。その中に新幹線が走るというような、いわゆるナローゲージを広軌につけかえている現場だったんですけども、そういう現場でも、「いま自分達がこの辛い仕事をやった後に、あのメタリックの新型車両が風を切って走るんだと思うと、この仕事はわくわくする。その姿を思い描いただけで、わくわくします」とおっしゃるんですね。あるいはまた、ダムの現場の方達の中にも、「こんなに自然に近いところにいる、四季の移り変わりをこの目で見られるということはとっても幸せです」とおっしゃいました。

つまり、その人達は「おれがやらなきゃ」という気持ちがありになるんです。しかも、この「おれがやらなきゃこの工事は完成しない」という気持ちは、いま男だけではありません。

ウルトラマンみたいに赤と黒の塗り分けのヘルメットをかぶって、コシノ・ジュンコさんの非常にすてきなユニフォームを来てダンプを運転しているオペレーターでも、あるいは工事事務所の中でコピーを焼いたり、お茶をくんだりしている女性の方達でも、「自分達もこの大きな構造物をつくるワン・オブ・ゼムだ。自分がいなきゃ、この構造物はつけれない」というお気持ちを確実にお持ちになっていらっしやる。私は、その現場に行つて、皆様方にお会いして、そのお気持ちを受け取っております。つまり、一人一人が「建設業界の顔だ」という自覚をお

「マナー」について

現場というのは、昔は工事現場のそばを歩くのはちょっと気味が悪いなんて言われたものでございます。確かに、そういう気味の悪い人達も働いていらしたのは事実だと思えます。その風潮が残っているから、マスコミ関係は、犯罪者の肩書に「土木作業員」なんていまだに付けているんだと思えますが、認識が少ないんじゃないかと思えます。確かに、土木作業員のマナーもとってもよくなりました。私が伺いまして、「こんにちは」と声をかけますと、セメントにまみれたような作業員の方達一人一人が、「ご苦労さんです」と挨拶してくださいますし、い

持ちになっていらっしやると思うんです。建設業界というものが社会基盤整備の担い手であつて、一人一人の力が結集しなければ何もできないときに、だからこそ、一人一人の自覚だとか、一人一人の自負と誇りというものが大切であつて、それが大きな仕事の完成に結びついていくんだということが、一人一人の心の中にあるんじゃないかと思えます。だからこそ、三Kとか六Kとか、イメージアップとか、そういう言葉を同じその心を持つている方のお口からは聞きたくないというのが、私の希望でございます。誇りを持つていただきたいという気持ち。

いろいろ質問しましても、答えてくださいます。マナーはとってもよくなつています。それは、工事事務所の責任者の方達とか、親方達の教育がよくなつてきているということも事実です。つまり、いまの時代というものが決して徒弟制度の延長ではない。精神面で徒弟制度があつても、マナーという意味では、そういうものがいままで踏襲しているものではないということがだんだんわかつていらした、向上してきたんだと思えます。

マナーというもののついでに申し上げますと、ある現場で伺つたんですが、昔は、「八丁四面は土方のもの」と言つて、工事現場の八丁四方というのは荒らし放題だったんですってね。ところが、いまはとてそんなことをするわけに

はまいりません。私のふるさとに琵琶湖疏水のインクラインというのがございまして、上から船が来まして、下にも船だまりがございまして。

これが一分の一の勾配で五〇〇メートルあまりの傾斜鉄道があるんですが、台車に船を積んで上げ下ろしするんです。これが、いま形態保存されている田辺朔郎のつくった構造物なんです。いまこの下に地下鉄を掘るために、ずっと桜のトンネルみたいになってる桜を、ちよっと手を入れなくちゃいけなくなりました。

ダンプが枝を引っかけますと、枝が折れるだけじゃなくて、幹まで割けちゃうんですね。そうすると桜がかわいそうだということで、桜の専門家に来てもらいまして、この枝は払ってもいい、この木はもう古いから、抜いて、別のところで隠居させてあげよう。いずれ完成したときに、新しい若木を植えたらいいからと、そういうのをきちんとして、決して土方のものだから荒らし放題ということをしないで工事をしているわけなんです。その桜の先生がおっしゃいました。「この現場の桜は、この工事現場の人達が非常に心を込めてめんどうをみたら、つまりその人達の精気を吸って、来年はもつといい花が咲きます」。つぼみのもとになるところを見てそうおっしゃいました。

だから、これはその方の受け売りになりますけれども、皆様方が現場でお仕事をなさるような場合、そこにあります桜に限らず、自然の一

つ一つ、木の一本一本に懸想してあげてください。懸想というのは、思いをかけることです。そうすると、そこにある木や花は、人間の精気を吸って、来年は必ずもつとすばらしい花を咲かせるようになります。一人一人の心がけが、

一人一人は自然を破壊するように見えながら、決してそうではないということを、身をもって皆様で示していただければ、いまこの時代に、自然破壊の代表者のようにこの業界が言われているときに、さらにいいものにして差し上げる。ただ差し上げるんじゃない、一本一本の木にも私達の思いが込もっていますよということがわかっていただけたら、これから何をつくる場合にもお仕事がいよいよいいんじゃないでしょうか。

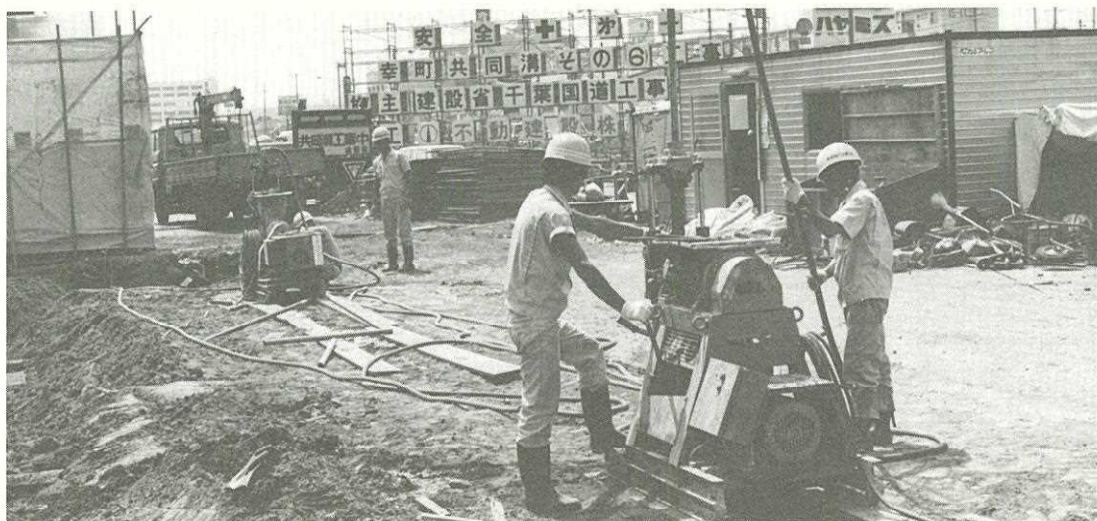
きのう、いま長良川の河口堰が問題になっていきます関係で、名古屋で川に関するシンポジウムがございました。そのとき、長良川というのは、私は新幹線の上からしか見たことがないので、そんな話はずきないものだから、私の書きました作品に『物語分水路』というのがございます。新潟県の信濃川に大河津分水という構造物がございまして、その話をいたしました。川というものは太古からそこに流れているものです。そしてその川は、本当に人々の暮らしにうるおいをもたらすものだけれども、放っておいたら、うるおいと同時に大変な被害をもたらすものでありますから、そこに人間が少し手を貸すことで、何らかの技術を加えることによっ

て共存共栄を図らなくちゃならないと、そういうお話をいたしました。

その大河津分水が完成いたしました。もうこれで信濃川の氾濫はない。いまでわかりやすく言えば、コシヒカリの産地はもうこれで安泰だとみんなが安心して、大河津分水の構造物ができ上がったときに、それからわずか五年にして壊れちゃったんです。元の木阿弥の状態になりましたときに、その当時の内務省は全力投球いたしました。この補修工事をいたしました。それが完成しましてちょうど六〇年になります。

この六〇年間に信濃川に大洪水は起こったことがございませぬ。起こったことがないということとは、もうその大河津分水という構造物のありがたさというものをみんなが忘れちゃっていることですよ。ですから、やっぱりこういうものは、繰り返し繰り返し皆さんに知ってもらわなくちゃいけないということも大切なんです。

この大河津分水の補修工事の完成しましたところに、補修工事完成の記念碑が建ててございます。青山士あやまという土木技術者が撰文いたしました文章。青山士という人は、日本人でたった一人パナマ運河の建設に参画なさった方でございます。あの第二次世界大戦のときに、ある日本軍の将校が青山さんのお宅へ訪ねてまいりまして、「あのパナマ運河を何とか破壊して使えないようにしたいんだけれども、どうやって破壊したらいいだろうか」と青山さんに質問した



そうです。すると青山さん、おっしゃったそうです。「私は土木技術者です。建設の技術は持っているけれども、破壊の技術は持っていない」と。すばらしい方ですね。その青山さんが選ばれた記念碑の銘文が、「万象に天意を悟るものは幸いなり」と書いてございます。その裏側に、「人類のため、国のため」と書いてございます。つまり、いろんな解釈の仕方はあると思いますが、私は、天職として、土木技術者なり建設の道を選んだ人間が、縁あってこの地の構造物を完成させることができた。これは、神様の思し召しと考えたときに、幸せだなと思えるんじゃないか。

世代を越えて、不変なもの

土木事業、建設業というものは、工学とか技術というものが日々向上してまいります。技術というものの勉強は必ずしなければ、これにはや技術者ではございませぬけれども、土木の世界には、技術の世界と同時に、心の世界というまったく異なったものが同時に存在している。なければならないのだと、先ほど申しました飯吉精一さんがおっしゃっています。ということでは、コンピュータを駆使するようになって、新しい技術が導入されて、土木の形態というものは日々変わってきています。田辺朔郎が琵琶湖疏水をつくって、もうそんな技術はいまどきな

ないか。しかもその幸せが、自分一人の幸せではなくて、「人類のため、国のため」というのは、この新潟県の発展のためにも、そして日本と広く、日本の発展のためにも、そして日本が発展したときには、それは世界人類のお役に立つんだなと。自分一人の小さな力、先ほど申しましたワン・オブ・ゼムのワンの力が世界人類の幸せにつながるんだなと思える。そのことが幸いだなという意味に取れる。これこそ、土木の心を如実に言いあらわしている言葉ではないかと思えます。

いわけでございます。でも、田辺朔郎が学びました工部大学の建学の精神というものが、エンジニアは社会発展の原動力であり、田辺朔郎はその精神を骨の髄まで自分のものにして、そして大学教授の椅子を捨てて、自ら三Kの中に身を投じて、そこに北海道鉄道建設の基となる実地踏査を行ってきた。そういった精神、つまり土木の心というものは世代を越えても不変のものではないか。決して変わるものではなく、その心があるからあすへの建設をまた続けていくことができるのではないかと私は思うようになってまいりました。皆様にもわかっていただきたいという気持ちがかんだん強くなってまいりました。常に建設業の未来像というものを語る際には、過去というものが必ずあるもので



すから、その過去から一貫してきた土木の心というものを持って、世の中のお役に立っている努力に邁進しているという毅然とした姿を貫いていただきたいと思えます。

もう一つ土木屋さんのものとしては、土木技術者でもあり、最後には国鉄の総裁におなりになりました藤井松太郎さんのことを書いた本がございませう。このタイトルも苦心した挙句に『剛毅朴訥』という名前をつけました。「巧言令色少なし仁、剛毅朴訥仁に近し」というのが

論語にございませう。仁というのは、にんべんに「二」と書きますね。これは、つまり二人あるいは複数ということで、相手に対する思いやりという意味でございませう。巧言令色の人、ちやちやらとお世辞ばかり言う人は少なし仁、仁がないんです。剛毅朴訥の人は仁に近いんです。あの藤井松太郎さんを書きましたときに、実にあの方が剛毅朴訥の方で、非常に思いやりの深い方でございませう。ああ、あの方の代名詞にこれを使わせていただけよう。藤井さんを剛毅朴訥といたしましたけれども、藤井さんのような方にこの形容詞を奉っても皆様文句はおっしゃらない。あの方は全土木技術者を代表している、本当の土木屋さんらしい土木屋さんだったから、剛毅朴訥という言葉もあの方につけさせていただけようというように思いつけました。「剛毅朴訥仁に近し」ということは、本当に思いやりのあるということ。思いやりという

ものが、つまり土木屋さんの心に近いものであろう。いっそ同じものじゃないかと思えます。この藤井さんが若い技術者に贈る言葉としておっしゃったのが「一生懸命努力して、十分な安心感を持てるだけの万全の仕事をしなれば、人様に対するより自分自身に申しわけない」とおっしゃっています。亡くなる間際まで、原書を離さずに勉強なさっていた方にしてこの言葉をおっしゃるのは、やっぱり尊いことだと思えます。

日々の技術の研鑽とともに、土木の心にも磨きをかけていただいで、後世のもの書きが書きたくなるような、人の心に語りかけるようないい構造物をつくることで、日本の発展に大きく寄与していただきたいと思えます。どうぞ、よいお仕事をいつまでも続けてくださいます。どうもありがとうございます。

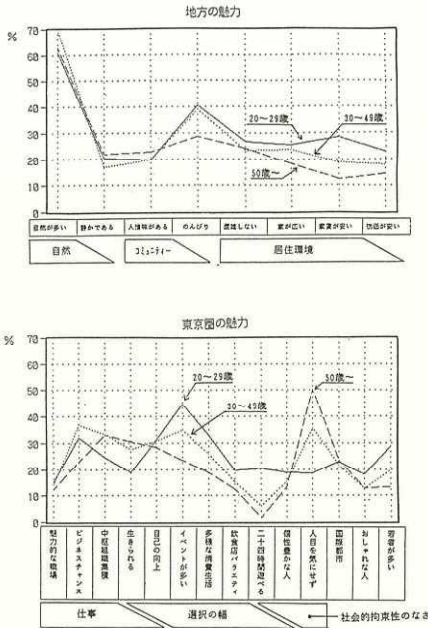
(文責・編集部)

〔たむら・よしこ〕

作家。

琵琶湖疏水工事の立案から完成に至る経緯を描いた『京都インフライン物語』では、土木工学や土木技術者の活動を世にPRしたという点から、昭和五八年度土木学会著作賞を贈られている。

図 地方の魅力と東京圏の魅力



地方の魅力と東京圏の魅力

我々の生活は、その行動を考えても、住み、働き、遊び、食事や買物をするなど多岐にわたり、また、自分を取り巻く環境を考えると、都市的環境、自然的環境から、社会的環境や身近な人間関係まで、様々ものが絡み合っている。

図は、こうした諸要素をかなり広範に含め、東京圏に住んでいる人圏内出身者五六%、圏外出身者四四%が地方、東京それぞれの魅力と答えた項目のうち、回答の多かったもの

(地方は八項目、東京圏は十四項目)を年齢層別に整理したものである。(ただし、地方の魅力については十二項目中三項目までの、東京圏の魅力については二十三項目中五項目までの複数回答である。)

地方の魅力を見ると、どの年齢層でも、「自然が多い」をあげている率が非常に高い。「人情味がある」、「のんびりしてゆとりがある」といった地域コミュニティの良さなどもかなり目立つ。また、若い年

注) 1. 総読者資料
2. 京データ 経済企画庁「平成3年度国民生活意識調査」
3. 東京圏に居住する20歳以上の男女1,734人(圏内出身者968人、圏外出身者766人)が地方と東京圏それぞれの魅力として回答した割合が高かった項目(図が)12項目中8項目、東京圏(23項目中14項目)を年齢階層別にグラフ化したものである。
4. 地方の魅力については3項目までの、東京圏の魅力については5項目までの複数回答である。
5. 各項目の魅力は以下のとおりである。
地方の魅力
「のんびり」のんびりしてゆとりがある
東京圏の魅力
「魅力的な職場」所得が多く、魅力的な職場が多い/「ビジネスチャンス」ビジネスチャンスが多い/「中級職が多い」行政機関、会社の中級職が多いが職種している/「静かである」静かである/「自分の向上」自分を高める機会に恵まれる/「イベントが多い」美術館、ギャラリー、コンサートホールなどが多い、イベントも盛りだくさん/「多様な消費生活」豊富な多様な商品がある、流行の先端をいく消費生活が楽しめる/「飲食店が豊富」飲食店が豊富/「二十四時間営業」24時間サービスが受けられる/「住居が広い」居住空間が広い/「住居が安い」住居費が安い/「人が多く」人が多く/「人が少ない」人が少ない/「交通が便利」交通が便利/「交通が不便」交通が不便/「若者が多い」若者が多い/「若者が少ない」若者が少ない

代を中心に、「家」が広い、「家賃が安い」なども多く、居住環境の良さがUターンの一考慮要因となっている様子もうかがえる。

東京圏の魅力については、まず、「ビジネスチャンスが多い」や「所得が多く、魅力的な職場が多い」など、職業、仕事に関する項目の評価が高い。また、二十歳代を中心として、「美術館、ギャラリー、コンサートホール」などが多く、イベントが盛りだくさん、「豊富、多様な商品にあふれ、流行の先端をいく消費生活が楽しめる」、「飲食店がバラエティに富んでいる」など選択の幅の広さといったものをあげている人も多い。さらに、人情味が地方の魅力となっていることは裏腹に、東京圏では、「人目を気にせず生きていける」ことが大きな魅力となっている。

これらをまとめてみると、図に示すとおり、仕事、居住環境、自然、選択の幅、コミュニティと社会的拘束性といった切り口で、地方圏と東京圏それぞれの生活の魅力や欠点を相当程度語れるのではないかと考えられる。

そこで、以下では、自然の豊かさ、選択の幅の広さという観点をとりあげ、人々の生活行動を見ていくこととする。

自然とのふれあい

多くの人が自然の豊かさを地方の魅力として指摘しているが、実際、人々は自然にどう接しているのだろうか。ハイキングや登山など自然を求めて積極的に活動を起こす場合、公園で憩いのひとときを過ごす場合、さらには、忙しい日常生活の中でも街路樹の緑にふと心をなごませたりする場合など、その形は様々である。

ここでは、我々の生活行動の中で、余暇活動という面に注目し、それぞれの地域の人々がどのような形で自

然に接しているかを見てみよう。実際に地方の人々は、豊かな自然の中のレジャーを実際に楽しんでいるのだろうか。

図は、北海道から九州までの各地域について、全国平均と比較して参加率の高い余暇活動上位十項目を示したものである。

北海道、東北、北陸のスキー、中国、四国の釣りをはじめとして、キャンプ、ハイキング、登山、などそれぞれの地域の自然の恵みを感じさせる項目が上位に入っている。

これら自然、大きな空間を必要とするスポーツなどを「多自然型」として分類してみると、関東を除く全てのブロックでは、地域性を反映した何らかの余暇活動が登場している。比較的近くで気軽に行ける範囲内に豊かな自然があり、その中でスポーツ、レクリエーションを楽しんでいる地方の人々の生活の姿がよく表れている。

また、山や川、海など豊かな自然とまではいかないが、「空間型」と分類したボールゲームやジョギングといった身の回りの屋外空間、施設を利用するスポーツなどを見ても、関東地方においてのみ、上位十項目の中に一つも入っていないことがわかる。

多くの人が自然の豊かさを地方の魅力として指摘しているが、実際、人々は自然にどう接しているのだろうか。ハイキングや登山など自然を求めて積極的に活動を起こす場合、公園で憩いのひとときを過ごす場合、さらには、忙しい日常生活の中でも街路樹の緑にふと心をなごませたりする場合など、その形は様々である。

実際に地方の人々は、豊かな自然の中のレジャーを実際に楽しんでいるのだろうか。

図は、北海道から九州までの各地域について、全国平均と比較して参加率の高い余暇活動上位十項目を示したものである。

これら自然、大きな空間を必要とするスポーツなどを「多自然型」として分類してみると、関東を除く全てのブロックでは、地域性を反映した何らかの余暇活動が登場している。比較的近くで気軽に行ける範囲内に豊かな自然があり、その中でスポーツ、レクリエーションを楽しんでいる地方の人々の生活の姿がよく表れている。

また、山や川、海など豊かな自然とまではいかないが、「空間型」と分類したボールゲームやジョギングといった身の回りの屋外空間、施設を利用するスポーツなどを見ても、関東地方においてのみ、上位十項目の中に一つも入っていないことがわかる。

図 豊かな自然の中でのレジャーを楽しむ地方の人々

(%)

順位	北海道	東北	関東
1	スキー	スキー	音楽鑑賞
2	パドミントン	将棋	空くじ
3	ボウリング	日曜大工	映画鑑賞
4	動物園・水族館等	キャッチボール、野球	国内観光旅行
5	トランプ等	囲碁	観劇・コンサート等
6	キャンプ	バスケットボール	音楽会・コンサート等
7	カラオケ	麻雀	読書旅行
8	スナック、飲み屋等	おどろ(日舞等)	中央競馬
9	サウナ	洋裁、箱庭	美術鑑賞
10	ボウリング等	機械いじり等	海外旅行
順位	北陸	中部	近畿
1	スキー	動物園・水族館等	催し物・博覧会
2	ドライブ	国内観光旅行	遊園地
3	サウナ	囲碁、将棋ほか	ビュッック・ハイキング等
4	スナック、飲み屋等	観劇・コンサート	水泳(プール)
5	カラオケ	カラオケ	サウナ
6	ディスコ	パチンコ	中央競馬
7	ボウリング	フィールドアスレチック	外食(日常以外)
8	外食(日常以外)	ボウリング	映画鑑賞
9	模型づくり	ジョウダン、マクソン	ウォーキング・マラソン
10	お茶	ドライブ	ゴルフ(コース)
順位	中国	九州	沖縄
1	釣り	釣り	釣り
2	読書	麻雀・将棋ほか	パチンコ
3	パチンコ	麻雀	バスレール
4	催し物・博覧会	動物園・水族館等	登山
5	文芸の創作	書道	ジョギング・マラソン
6	卓球	パチンコ	キャンプ
7	お花	フィールドアスレチック	釣り
8	ビデオ制作・編集	ゲームセンター等	ダーツボール
9	邦楽、民謡	パルレール	クラブ、キャバレー
10	将棋	アイススケート	麻雀、将棋ほか

凡例

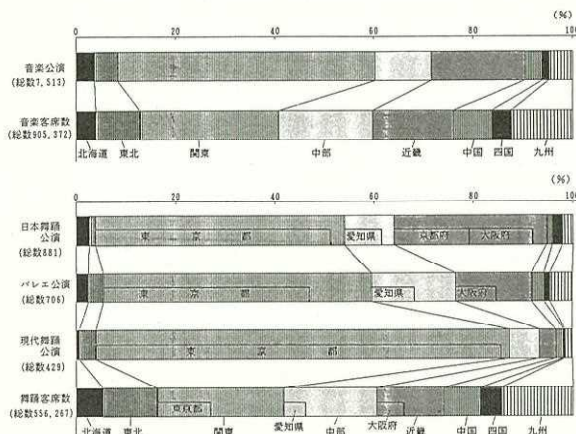
1. 多自然型(自然、大きな空間を必要とするスポーツなど)
2. 空間型(ちょっとした空間、施設で行えるスポーツなど)
3. 集客型(多くの人が集まる施設でのレジャーなど)
4. 室内型(自宅や室内での趣味、遊戯など)

(注) 1. 建設省資料
2. 原データ 観光振興センター「レジャー白書 91」
3. 調査対象 1日単位
4. 有効回答数 N=3,527
5. 調査時期 平成2年12月
6. 参加率は、ある余暇活動を1年間におこなった人の割合である。
7. それぞれのブロックについて、全国平均の参加率を上回っている種が大きい余暇活動を上位10項目並べたものである(参加率そのもの大小によるわけはしないに注意)。
8. ブロックの区分は以下のとおり。
北海道 北海道、東北 青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県、新潟県/関東 群馬県、茨城県、栃木県、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、北陸 福山県、石川県、福井県/中部 長野県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県、静岡県、奈良県、和歌山県、徳島県、香川県、高松県、岡山県、広島県、山口県/中国 岡山県、広島県、鳥取県、島根県、山口県/四国 徳島県、香川県、愛媛県、高松県/九州 福岡県、佐賀県、長門県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県
9. 近畿の「催し物・博覧会」は、国際花と緑の博覧会の影響が大きいものと考えられる。

選択の幅の広さ I

我々の価値観の多様化に伴い、一人一人の価値観を実現できる選択の幅の広い社会への移行が求められてきている。この問題は、個人個人の生き方、ライフスタイルや社会経済システムなど広く関わるものである。また、我々の具体的な生活行動を考えてみても、仕事、遊び、勉強、買物などにわたり、選択の幅の広さや狭さを実感する場面は様々ある。このため、選択の幅の広さ全般を語ることは難しいが、ここではイベントの多さについて具体的にみていく。

図 音楽、舞踊の公演で際立つ東京の魅力



注) 1. 建設省資料
 2. データ：旧日本演劇連盟「演劇年鑑」、全日本舞踊連合「舞踊年鑑」
 3. 音楽、舞踊それぞれについて、各地域の平成2年における公演回数と、平成2年12月現在の会場・ホールの客席数の全国シェアをグラフ化したものである。
 4. 現代舞踊とは、別名、モダンダンス、ジャズダンス、ダンス・パフォーマンス、フラメンコ等である。
 5. 舞踊については、日本舞踊、バレエ、現代舞踊の三つのジャンル別公演の公演回数にのみならず、かつ、京舞踊家によるものは除く。
 6. 地域別の定義は以下のとおりである。
 北海道：北海道／東北：青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県／関東：群馬県、茨城県、栃木県、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県／中部：富山県、石川県、福井県、長野県、山梨県、新潟県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県／近畿：奈良県、和歌山県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県／中国：岡山県、広島県、鳥取県、島根県、山口県／四国：徳島県、香川県、愛媛県、高知県／九州：福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

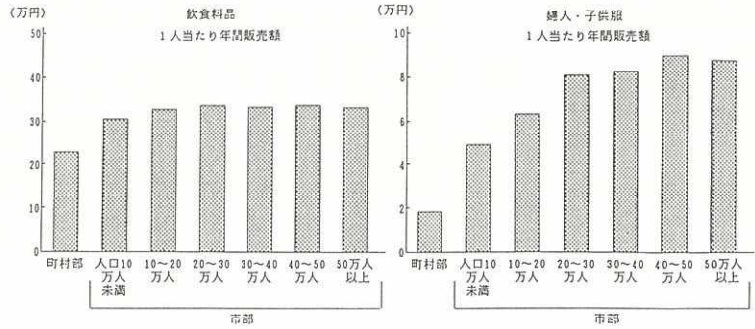
(関東、近畿で多い音楽、舞踊の公演)
 図は、音楽公演、舞踊公演それぞれについて、年間公演回数及びホール等客席数の全国シェアを地域別に示したものである。音楽、舞踊のどちらでも、関東、次いで近畿における公演が盛んであることが目立つ。まず、音楽については、関東、近畿の合計で、客席数のシェアは四割強であるのに対し、公演回数のシェアは七割となっている。一方、舞踊については二地域のシェアは、客席数では四割弱とやや小さいが、公演

回数では七割から九割近くと、むしろ音楽の場合よりも大きい。都道府県別にデータがある舞踊についてさらに細かく分けると、実は、公演の大半が東京都、大阪府、京都府、愛知県という三大都市圏中心部におけるものであることがわかる。また、ジャンル別では、日本舞踊については京都府における公演の多さが目を引き、単位人口当たりの公演回数では、東京都の水準を上回っている。一方、現代舞踊では東京都のシェアが圧倒的に高く、他の道府県でその公演を観ることは非常に難しいという実態がうかがわれる。ひとくちに音楽や舞踊と言っても、その内容は幅広く、興味の方向も様々である。また、そもそもほとんど関心のない人々も存在する。したがって、単に音楽ホールや劇場をつくるだけで公演が頻繁に行われることは期待できないし、思うように観客が集まるものでもない。東京や大阪で音楽、舞踊の公演が盛んであり、各人が好みに合ったイベントを楽しめるのは、多くの人が集まって来る広域的都市圏の中心地では、全体から見れば僅かの割合の人間しか興味を示さないものも含め、数多くの公演が商業ベースに乗るといえることになるところが大きいと考えられる。

選択の幅の広さII

多様な消費生活が楽しめるという場合、例えば、珍しい物、高級品やブランド品、あるいは流行の先端をいく品物が手にはいるといったことをイメージするが、その程度は、食料、衣類、家具、娯楽用品など商品の種類によってかなり異なるものと思われる。ここでは、多様性が小さいもの、大きいもののそれぞれの例として、我々の消費生活の中での

図 飲食料品は地元で、婦人・子供服は都会で買う



- 注) 1. 建設省資料
 2. 原データ：総務庁「平成2年国勢調査」、通商産業省「昭和63年産業統計」
 3. 三大都市圏（東京圏、大阪圏及び名古屋圏）以外の地域において飲食料品、婦人・子供服それぞれの1人当たり年間販売額を都市規模別にグラフ化したものである。
 4. 地域定義は以下のとおりである。
 東京圏：埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県
 大阪圏：京都府、大阪府、兵庫県
 名古屋圏：愛知県、三重県

ウエイトも高い飲食料品と、食料品よりも品質や種類においてバラエティに富んだ婦人・子供服を比較対象として選び、都市規模や地域により、消費生活の多様性にどの程度の差があるかを探ることとする。
 三大都市圏を除く三八道県について、都市規模別の一人当たり販売額を見てみよう(図)。
 婦人・子供服については、町村部

から二〇万人クラスの市までの間で人口規模に応じ一人当たり販売額に大きな差がある。一方、飲食料品では、町村部と市部の間でかなりの開きがあるが、市部では人口規模に関係なくほぼ一定である。所得水準や物価水準の違いなどを反映し、また、飲食料品については自家消費等も若干はあり、一人当たり販売額が人口規模の増大につれある程度上昇していくことは考えられる。しかしながら、図に見られるような大きな格差は、こうした要因のみでは到底説明が困難であろう。
 町村部や人口規模の小さな市では気に入った婦人・子供服はなかなか手に入らず、人口規模の大きな市部へ買いに行っていると考えるのが妥当である。一方、食料品については、町村部から市部へはある程度買っているもの、市部であれば大体のものが揃っていると考えられる。
 このように、ひとくちに消費生活の多様性といっても、その程度、内容は、商品によってかなり異なる。洋服や装飾品など種類、品質とも千差万別で、個性や趣味が問題となるものについてほど、大きな都市の持つ消費生活の魅力が高いのではないかと考えられる。

学習意欲をかり立てられて

根岸 行夫
(前橋市)

職場を離れて、これだけ長期の研修を受けたのは初めてでした。何とかなるとは思いながらも、やはり、受講前日ともなれば不安になりました。

研修初日、同室の人達との簡単な挨拶をしたあと、すぐにオリエンテーション、開講式、記念撮影となり、研修が始まりました。少しずつ講義に集中できるようにになると、それが気持ちの安定にも役立ち、当初の不安もなくなりました。また、講師の方々の話の内容がすばらしく、興味と学習意欲をかりたてました。自分の知識の確認や、最新の情報、考え方を自分のものにすることに楽しみさえ感じるようになりました。研修と聞くと、事前に尻込みしていた自分がまるで嘘のようでした。また、他の研修生との情報交換も有益でした。

改めて、この研修に参加できたことを嬉しく思っています。これを機会に、これからも自己啓発に

努力していきたいと思えます。

充実したカリキュラム

鈴木 優一
(豊橋市)

建築設計の研修を受講して、私は、大変有意義な時間を過ごす事が出来たと思っています。それは、充実したカリキュラムと、建築界における官・民のトップの講師の方々が、最新の情報・状況及び設計の基本についての講義をされ、それによって新たな知識を得たり、基本の再確認をさせて頂くことが出来たからです。

また、全国各地から集まられた研修生たちとも、短期間ではありましたが、情報の交換や交友を深めることが出来、研修終了後も、互いに助け合える仲間として付き合いたいと思っています。

聞きごたえのあつた各講義と適切な演習アドバイス

鈴木 志育
(静岡市)

個人的な講師の方々の講義は、それぞれ聞きごたえがありました。特に「都市における公共建築の役割」の講義での海外都市の事例紹

建築学の分野も、他の学問と同様に、近年とみに細分化、専門化されてきているが、建築設計と言えば、一般には建築屋の表芸として見られているのが現状であろう。ちよつと江戸時代の武士の剣術と言ったところであろうか。

このため、建築(設計)研修の研修期間は、一〇日間と他の研修に比べてやや長めにとり、研修内容の充実を図っている。特に設計演習については、課題として「美術館の概略設計」が設けられており、研修員は、期間内に設計を完成させ、終わりに先生方から一人一人講評を受けることになっている。

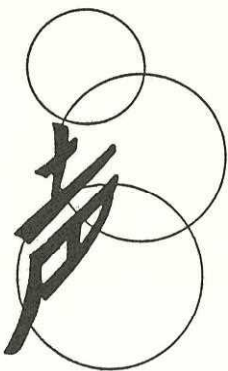
ここに、本研修の一端をうかがい知って頂く為に、受講された方々の研修についての感想文の一部を(紹介する)。(研修局)

日程	午前	午後	備考
第1日	特別講話	建築設計計画(1) (都市における公共建築の役割)	
第2日	建築基準法を巡る最新的话题	設計演習(1) (課題説明)	自主演習
第3日	建築設計計画(2)	設計演習(2)	自主演習
第4日	建築構造設計	オフィスの快適性について	自主演習
第5日	自主演習		自主演習
第6日			自主演習
第7日	設計演習(3)	設計演習(4)	自主演習
第8日	建築設備設計	建築設計における コンピューター利用	自主演習
第9日	建築の防災設計	設計演習(5)(講評)	
第10日	インテリア デザイン論	見学 (東京都新庁舎)	

※感想文の標題は編集部でつけたものです。

本研修に関する問い合わせは当センター研修局まで。

電話 0423 (24) 5315



介や、講義「建築構造設計」での(ちよつと横道にそれた)話は面白かった。「オフィスの快適性」についての学問的な話も新鮮だった。又、演習の時の適切なアドバイスには感謝します。夜の自主演

建築（設計）研修に参加して

習の励みになりました。

同室の人は、私と同じ地方公務員。多少仕事内容に違いはありましたが、日頃抱えている問題や、話題がそれぞれから出され、参考にさせていただきましたが、自主演習に時間を取られ、他の部屋の方々との交流が非常にとりについた事が残念でした。

快適な環境が与えられ感謝しています。この研修で修得した多くの事を、今後の仕事に活かせれば幸いです。

熱心な研修生に刺激されて

江成 広一
(法務省)

今回、研修センターの研修に初めて参加させていただいたが、まず最初に感じたことは、研修生のみなさんが大変熱心だと言ふことである。その熱心な気持ちにふれて、自分も真剣に受講したので、研修中には有意義に過ごせることが出来た。研修内容は、ふたん自分達が関わっている業務に関するものが多く、講義を聞くことによつて改めて納得できたように感じた。また、研修に参加すること

によつて、通常ならかわりを持つことのないいろいろな地域から来られた人々と勉学を通して接することができたのは、とても自分にとってプラスとなったことと思ふ。

私共の職場は、毎年研修生を参加させているが、こういう経験を長く続けることにより、より良い仕事が出来ることが増えることになり、大変良いことであると思う。

大変だった課題演習も仲間との作業で楽しくできた

新井 正保
(富士見市)

今回の研修は、一日間の研修でしたが、全体を通して楽しく終わることが出来ました。これもひとえに優秀な講師陣、又全国から集まった四四名の仲間、研修センターのお蔭と感謝しています。

講師の方々が、専門的知識をわかりやすく、非常に緻密に、かつ多角的に、熱意をもって講義して下さいましたので、期待していた通りの有意義な講義を受ける事ができ、大変参考になりました。

特に印象に残ったのは、何と言っても課題演習が一番大変だった

ことでした。割と簡単に出来るだろうと安易に考えていましたが、夜の十二時あるいは午前二時までかかり、自分の力量不足を痛感しているところでした。しかし、仲間と一緒に作業はならんら苦痛でも無く、楽しくまた色々と勉強にもなりました。

自学自習では得られない貴重な体験

小島 明
(千葉市)

仕事に追われる毎日の生活から離れて一日間、建築設計の勉強ができたことは、貴重な体験でありました。全国から集まった仲間と寝食を共にし、仕事やプライベートな事まで語り合ったことで、現在の自分の立場・位置を確認できたことは有意義でありました。

講義については、具体的な知識の習得はもちろんですが、なによりも講師をしていただいた先生方の、仕事に対する情熱を感じ大変刺激を受けました。先生方の貴重な体験を聞かせていただき、それは参考書からは得られないものであります。

官庁営繕の在り方については、

種々意見のあるところですが、ふだん自分の考えていることが、先生の話と一致するところがあり、自信につながりました。

自己啓発を動機づけられて

関 浩章
(日本電信電話株)

私の場合、建築に携わって日も浅いこともあり、講義の内容は少し難しいものがありました。この受講によつて、もつと自分は勉強しなければならぬんだと思いをさらに深くし、また自己啓発の動機づけにもなったと思っております。

製図の演習では、ちょっと戸惑いもありましたが、無事完成したので良かったと思ひました。しかし、他の人の図面を見たとき、自分はまだまだだと思ひ、これからさらに頑張らなければならないと痛感しているところです。

また、今回民間企業から参加させて頂きましたが、受講者の方々が全国各地至るところから参加されていたので、いろいろと情報交換の場ともなり、大変有意義な研修でした。

'90年代「知的生産」 「知的生活」の方法

昇 秀 樹

③情報のインプット

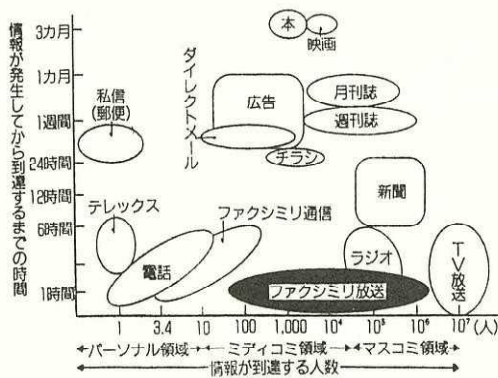
—前回からのつづき—

⑥メディア比較

読書、新聞、テレビ、映画、ウォークマンなど情報収集の方法を紹介してきたが、これらメディアの①情報発生から情報到達までの時間を縦軸にとり、②情報が到達する人数を横軸にとり、整理してみたものが図5である。

この図をみてわかるように、本、映画等は情報発生から情報到達までに三カ月程度かかるのに対して、月刊誌、週刊誌になると一カ月、一週間に短縮され、新聞になると一日単位、テレビ、ラジオだと時間単位の即報性がある、とい

図5 メディア比較



郵政省作成 出典1991.5/29 朝日新聞

うことになる。

また、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、本、映画などは、大量の人が同時に情報を知りうるマスメディアであるのに対して、電話、私信などは特定の個人だけが情報を知りうるパーソナルメディアであることがわかる。

情報のインプット（情報収集）にあたっては、こうしたメディアの特性を考え、それを上手にくみあわせて使っていく、という姿勢が必要だろう。

④知的生活と時間・空間

これまで、③「情報のインプット」について様々な観点から検討をおこなった。今度は「知的生産」「知的生活」をおこなう空間と時間について検討をくわえてみることにしたい。

(1) 知的空間

①あらゆる場所が知的空間となりうる

知的空間とは「知的生産」「知的生活」を展開する場所のことであるが、書斎、図書室など「知的生産」「知的生活」専用の空間はもちろんのこと、居間、台所、通勤電車の中、トイレの中、酒場、喫茶店等等……あらゆる場所が「知的空間」となりうる。

要は、本人が知的生産、知的生活をおこなおうとした場所が知的空間となる訳であって、その場所に制限はない、といっていいたいだろう。

②書斎

そうはいっても、やはり個人の知的活動のメイン・スペースとでもいうべき場所は書斎だろう。

しかし、大都会、中でも東京のサラリーマンにとってせまい住居の中で書斎を確保することはなかなか困難だ。この点では住宅事情のいい地方都市の方がはるかに有利な状況にある。

たとえば、私の場合、三重県津市に住んでいたときは、自分専用の書斎をもっていたが、東京にきてからは昼間は子供の勉強兼遊び部屋、夜から朝までは私の書斎というように、時間によって使い分けている。

何とか工夫をして、自分なりの書斎をもてればそれにこしたことはない。まとまった時間にまとまった思考をするには書斎は非常に有効なスペースなのだから。建築家の芦原義信（敬称略、以下同じ。）などは屋根裏の三角空間を書斎に改造して使っている、という。

しかし、仮に自宅に書斎がもてなくても——東京などでは多いにありうることだ——悲観することはない。後でみるように街中に書斎（の代わり）をみつめることは、いくらでも可能なことから。

③知的空間としてのコンビニエンス・ストア前にもふれたが、私などは執筆の大半はミニ・ストップというコンビニエンス・ストアでおこなっている。現に今書いているこの文章もミニ・

ストップで書いている。

春のある朝、午前六時前。それが今の時間だ。コンビニエンス・ストアで執筆するのは早朝か深夜のどちらか。（たまには徹夜することもある。こういう時二十四時間オープンしているのはありがたい。）客が少なくて店にも迷惑がかららないし、こちらにとっても静かである環境。

このミニ・ストップというコンビニエンス・ストアは、ハンバーガー、コーヒー、コーラなど簡単なファースト・フードが食べられるコーナーがあつて、私が愛用している店の場合、机が三つ、イスがそれぞれに四つの計十二脚ある。そのうちの一つの机を原稿書き用、読書用に使わせていただいている訳だ。（図6参照）。

一杯百二十三円のレギュラー・コーヒー（安い）をのみながら、原稿用紙にペンを走らせる。コピー、ファックスが必要なら、後ろをふりむけば一枚一〇円でとれるコピー機、一枚一〇〇円で送付できるファックスがある。テレフォン・カードが使える電話ボックスもある。

おながすがすげば、ハンバーガーやフライド・チキン、ポテト、ピザなどを注文し、原稿書きにあきればマガジン・コーナーで日経TRFN、DY、文芸春秋、週刊ポスト、少年サンデー、ぴあなどをたちよみ、気に入ったものがあれば購入する。

考えてみると、このミニ・ストップというコンビニエンス・ストアは、知的生活者の書斎と

して理想的(?)な条件をそなえている、といえる。①一年中、二十四時間あいているし、②冷暖房完備、③コピー、ファックス、電話など情報機器もそなわっているし、④レギュラーコーヒーが一杯百二十三円という安価でのめるのもコーヒー中毒の私にとってはありがたい。これに⑤ワープロ、パソコンがついていたらいいのだが……というのはゼイタクというのだろうか。

④知的空間としてのホテル

最近のホテルでは、ビジネス室と銘うって、ワープロ、パソコン、コピー、ファックスなどを用意したものがみかけられるようになった。

東京オリンピック、大阪万博等についての第四次ホテルブームのまったただ中（図7）、ホテルも差別化戦略に余念がない。こうした知的武装したホテルが今後ふえそうな勢いだ。知的生活者にとっては、旅先の宿でも知的生産、知的生活がスムーズにおこなえる訳でありたい。

リゾートホテルもリゾートブームの中でふえてきているが、リゾートホテルにもこうした情報機器サービスを期待したい。リゾートとは、本来、「非日常的な空間で、生活をおくる」ということで、生活をいとむ以上、生活に必要なインフラはリゾート地にそなわっていないなければならない。

知的生活者にとっての暮らしとは、知的生産、知的生活をいとむことで、スポーツ、タウン

ウォッチング等の後では日常と同じように知的生活がおくれるような条件が整備されていることが必要だから。

今一点、最近では、ほとんどのホテル、宿泊所で宅配便をあつかっており、出張等の際には、着換え、よみおえた本などを自宅あてにおくり、身軽に旅ができるようになったのはありがたい。原稿でしめきり間近のもの、しめきりを過ぎたものを旅先のホテル等からおくったことも一度や二度ではないことも告白しておこう。

ホテル、旅館等に期待したいのは、机の面積を大きめにとってほしいこと。「とりあえず机もおいてあります」といわんばかりの小さな机に出くわすことがあるが、原稿書き、読書にとって使いにくいこと、この上ない。第四次ホテル戦争に勝ちぬくポイントの一つは意外にこういう点にもあるのではないかと私などは思ってしまう。

⑤ 地域開発としての「文化開発」

「知的文化空間」の整備が「地域おこし」につながる時代

「知的空間としてのホテル」の項でリゾートホテルについてふれたので、この機会に知的空間とリゾートの関連について考えてみたい。

まちづくり、地域開発の手法として、これまでの「工業開発」に代わるものとして「知的空間開発」―「文化開発」なるものが考えられたいだろうか。

美しい自然や個性ある歴史空間の中で体をやすめ、あるいはスポーツで汗をながし、絵画、陶芸など芸術活動にいそしむ、小説、論文を書く、読書をたのしむ、……そうした「知的文化空間」の整備をすすめることによって、地域おこし、まちの活性化につながる可能性があるのではないかと。

図6 ミニ・ストップ（コンビニ）のレイアウト（一例）

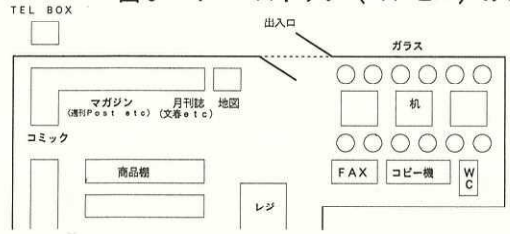
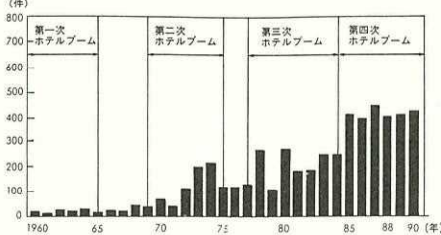


図7 ホテルの増加件数 (1965～90年)



資料：厚生省生活衛生局調べ

となつてい。アスペンではジャズ・フェスティバル、クラシック音楽祭、バレエ祭、国際デザイン会議、世界ワイン大会、経済政策会議など、世界的な評価をえているイベントが初夏から初秋にかけて続々と開催される。

こうしたイベントには世界中からすぐれた才能をもった人々があつまり、アスペンで交流する。アスペンのイベントに招待されるのは名誉なこと、との評価が定まっているので人口六〇〇〇人のロッキー山脈の中にある小さなまちに世界の文化人があつまりることになる。

アスペンはスキーのメッカでもあり、冬でも入込客は絶えることがない。三つの大きな山にそれぞれ上級者用、中級者用、ファミリー用の大型スキー場があるし、冬でもオペラ、バレエ、合唱など文化的イベントがもよおされている。

こうしてロッキー山脈の中の、定住人口六〇〇〇人のまちが、夏や冬のシーズンには三万人近くにふくれあがる。

アスペン市は、こうした「知的文化空間」としてのアスペンを守るために、いろいろな施策をうち出している。たとえば①建物はすべてビクトリア調にしなければ建築許可がおりない。おかげで街の建物はビクトリア調で統一され、シックな雰囲気をも出し出しており、小さいながらも繁華街には高級ブティック、絵画、宝石などの店や、しゃれたレストランがならんでいる。

②派手な看板や広告塔は許可されない。③

アメリカのインテリの大半は嫌煙主義であり、そうしたことを考慮して、市内のレストラン、喫茶店など公衆が出入りする場所は禁煙とされている。

こうして、アスペンは「知的文化空間」に焦点をあわせたまちづくりで成功した。

今、たまたまアスペンを例にとったが、こうした「文化開発」の考え方によるまちづくりはアスペンばかりではない。アメリカ、フロリダ州のオーランドやフランスの地中海沿いの都市モンペリエ、ニースなども「文化開発」によるまちづくりに成功した事例といえるだろう。

オーランドの場合は、デイズニールドが進出し、アミューズメントを核とした地域整備がすすめられ、あわせて湖でのフィッシュイング、ヨット、数多くのゴルフ場などスポーツ環境もとのえられ、全アメリカ、全世界からリゾート客をあつめることとなった。

こうしたアミューズメント・スポーツの施設があり、加えて冬でもあたたかいという気候条件、周囲いたるところに湖と川があり、少し足をのびせば白浜がどこまでもつづくメキシコ湾に出られるという条件が、知的生活者、研究者などにとって、知的生産をおこなう上で格好の条件、アメニティ空間をもっているという理由で、今ではハイテク企業の研究所、先端工場が多数進出している。

フランスのモンペリエでも、地中海沿岸のリ

ゾート地としての整備がすすめられ、アメニティ空間が誕生した結果、リゾート客だけではなく、企業の研究者等の注目するところとなり、ハイテク企業の研究所や先端工場が続々と進出し、リサーチパークの様相を呈しはじめている。

オーランド(米)やモンペリエ(仏)の例は、リゾート地として「文化開発」をすすめる、成功したことが、結果的に第二次産業(工業)の研究所、先端工場の進出をうながすことにつながっている。

工場誘致をすすめる場合でも、その前提として、技術者、研究者等が住みたくなるようなアメニティ空間、「知的文化空間」が必要となることをオーランドやモンペリエの例は示している、といえよう。逆説的だが、「工業開発」をすすめる上でも「文化開発」が不可欠な時代を先進諸国ではむかえつつある、といえるかもしれない。

これまで外国の例ばかりを紹介したが、日本の場合でも「文化開発」、「知的文化空間」の整備をすすめる、成功している事例がない訳ではない。

たとえば九州、大分県の湯布院などは「文化開発」、「知的文化空間」の整備をすすめる、成功した事例といえるだろう。

由布岳のふもとひなびた温泉宿であった湯布院を、東京からのUターン組、中谷健太郎氏と、日田市からの転入組、溝口薫平氏らが中心

となって、文化性の高い空間へとつくりかえていった。由布院町も景観条例等で文化のある空間づくりをすすめており、日本映画祭、牛ぐい絶叫大会などの名物イベントともかみあって、他地域にはマネのできない独特の「知的文化空間」をつくり出し、全国に湯布院ファンをつくり出している。中には湯布院に住みついで美術館を運営したり、芸術活動をおこなっている人々もいる。湯布院ファンの中には故小林秀雄をはじめとして文化人が多いことも一つの特色だが、これも「知的文化空間」としての地域づくりに成功したことの証拠といえるだろう。

他にも、北海道占冠村の自然をいかしたヨーロッパ風のリゾートづくりに成功した「トマム」、一七世紀のオランダを再現し、長崎の半島に毎年二百万人の集客に成功したオランダ村、そしてそれをさらに大規模に「滞在型まちづくり」に展開させようとする長崎・佐世保市での「ハウス・テンボス」などは、日本における「文化開発」、「知的文化空間」づくりの事例とみていいだろう。

日本にしても、世界にしても工業社会から情報化社会への移行の中で「知的文化空間」をつくるのが地域の活性化、地域おこしにつながる時代がおとずれつつあることを知るべきだろう。

(この項つづく)
(自治大学校・部長教授)

(本稿中意見にわたる部分は筆者の個人的見解であることをおこわります。)

O P E N
S P A C E

SHOUZABURO KIMURA

木村 尚三郎

東京大学名誉教授

フランス人のバカンスというと、夏の一カ月くらいを、山荘かなんぞで仕事を一切離れ、ジーツとしてくらす、と一般に信じられている。これではしかし、バカンスで本当にバカになつてしまふ。現実のフランス人は、夏に半月のバカンスを取る。山よりも、海が圧倒的に多い。別荘にジーツとしている人もいるだろうが、大抵はキャンピング・カーをつけて、あちこちを駆け回る。

そして、一カ所に二、三日滞在し、ミシュランのガイドブックを片手に、土地の教会や城その他の史跡を訪ね、この教会は十三世紀に建てられたもの、この彫刻は地獄に落とされたケチンボの姿などと「勉強」する。そしてひと通り済むと、また車で別の地点に移動し、新しい勉強が始まる。

このような、「頭のよくなる」「渡り鳥型」のバカンスが、このごろきわめて多い。行先き不透明な今日、のんびりとバカになつてはいられないのである。バカンスを楽しむはするが、いわば「気にながらの生活文化」である。時

間とカネを可能な限り使い切つて、はたして未来は大丈夫かという気持ちながら、拭い去れない。だから楽しみながらも、タメになることをしようと思う。

いまという時代

本日にアルプスの山荘で豪華なバカンスを楽しんでいるエキユゼクティブやビジネスマンも、電話が一本ジリリと鳴れば、たちまち地球の裏側にもスツ飛んでいく。のんきに「バカンスは私の権利」

などとは言つていられないのが、標題の「いまという時代」である。いまは、町に商品が溢れている。裏を返して言えば、行列を作つても買いたい商品とか技術は、少なくとも産業の分野では見当たらない。いま若者が行列を作っているのは、うまいラーメンやブタマンを食べるため、音楽会や映画の切符を買うためといった、非工業的分野ばかりである。あきらかに私たちはいま、技術文明の成熟期にある。

この状況は、少なくとも十年はつづくだろう。今世紀中に高度成長を実現しうる技術は、残念ながら今のところ、一つも見えていないからである。一つ階段を上りつめ、私たちはいま踊り場に立たされている。つぎの上るべき階段は、なかなか見えない。だからこそ将来を気にしながらも、さし当たりその日その日の生活文化を、めいづばい楽しもうとしている。

その心は、かつての「青い山脈」のように明るくない。だからやたらと人恋しく、一人で生きるのは心細い。若い人たちは、だから

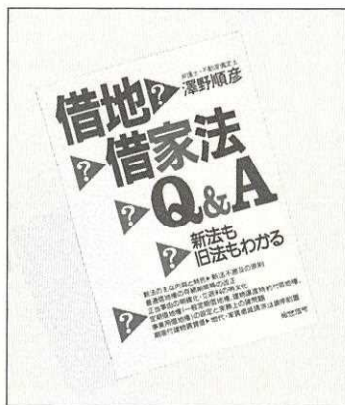
新法の「借地借家法」が平成4年8月1日から施行された。

本書は、「問い」Questionと「答え」Answerにより、日常生ずる主要な問題点を実務の観点からとりまとめたもので、一冊で新法と旧法のほとんどが理解できるように工夫がこらされている。

新法が施行される以前に設定された借地権及び建物賃貸借については、原則として新法は適用されないこととされているので、新法施行後は、新法が適用される借地・借家と、旧法が適用される借地・借家とが併存することになる。が、原則として旧法が適用される借地・借家についても、新法が適用される事項があり、新法の規定が参考となる場合が少なくない。

そこで、本書は、まず借地については、原則として旧法が適用される既存の借地関係と新法が適用される普通借地権及び定期借地権に分けて解説されている。次に借家については、原則として既存の借家関係にも新法が適用されるので、施行前後による区別はせず、遡及不適用については各項目の中で明らかにされている。また、借地借家法と同時に改正された地代・家賃の改定手続についても、紹介されている。

資料として、新旧条文の対照表が収録されており、新法の遡及適用の有無が一目で分かるようになっているのが、とても役にたつ。



澤野 順彦 著

新法も旧法もわかる

借地借家法 Q & A

総合法令 1,500円

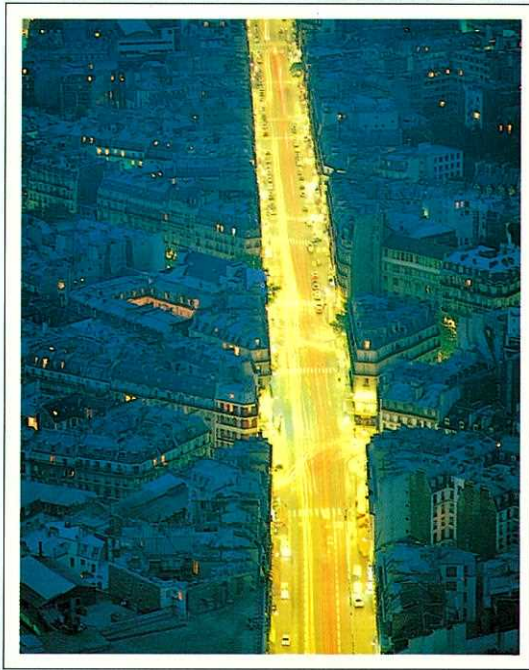
友だちや恋人がほしいと、内心真剣に思う。友だち、恋人、人情、光り、輝やき、オレンジ色、花、ファッション、いい香り、おいしい食事、ビール、自分なりの旅、芝居、音楽、スポーツ、その他何でもいい、心の明るくなるものほしい。それが、「いまという時代」である。

しかしながら、バブル崩壊後の

今日は、決して不景気の時代ではない。今日は昨日のつづき、明日は今日のつづきといった時代のほうが、歴史上はノーマルなのである。かつて、スシ屋を題材にしたNHKの連続ドラマに、「男は一度光りやいい」という、テーマソングの文句があつた。人間も本当に光るのは、人生のうち一度くらいしかない。あとは、今日は昨日

のつづき、明日は今日のつづきである。この当たり前の、ノーマルな時代こそが、「いまという時代」の本質である。当たり前には、伸びる人・企業・地域がある一方、落ちこむ人・企業・地域があるという、きわめて当たり前のことが起こる。全体としては横ばいより少し上であらうが、上昇する者と下降する

者との格差は大きくなる。総じて産業が振わず、商業が優位に立ち、国の意味が後退し、外に向かつて開かれた、コミュニケーション・センターとしての都市が発達する。「いまという時代」はだから、やる気のある人・企業・地域にとっては、面白い時代である。まさに、「常識の転換期」であるといえよう。



国づくりの研修